

內閣統計局編纂

第五十回

日本帝國統計年鑑

昭和六年刊行

76二卷 752

D42A

100

10工

內閣統計局編纂

第五十回

日本帝國統計年鑑

昭和六年刊行

正 誤

頁	表	欄 及 行	誤	正
8	2	備考欄 1 行	3.927 軒以上	3.927 軒以下
65	40	洲國地方欄 23 行、24 行	奏 天	奉 天
69	43	公務自由業欄 25 行	25	205
124	97	品名欄 22 行	一 疋	一 反
125	97	品名欄 15 行	一 貫	十 貫
128	97	品名欄 22 行	(百六十匁)	(百二十匁)
176	140	價額昭和 3 年欄 14 行	25,264	25,254
260	225	地方別欄 38 行	石 川	香 川
323	308	罪名別欄 27 行	隱匿ノ置	隱匿ノ罪
338	330	歳入超過總額欄 5 行	546,383	546,380
356	337	豫算昭和 6 年度文部省所管欄 4 行	2,511,853	2,512,853
"	"	" 5 年度欄 10 行	17,252,300	17,253,300
360	339	決算昭和 4 年度欄 30 行	5	54
372	347	第三種二萬圓以下欄 34 行	81,251	11,251
373	348	地方別欄 1 行	總 額	總 數
379	353	株式及持分株數欄 4 行	154,000	154,600
385	360	地方別欄 27 行、36 行	京京、口山	京都、山口
403	382	部局別欄 5 行	室 室	帝 室
404	383	總數欄 7 行	366,963	365,199
"	"	"	63,176,833	63,057,147
406	384	年次欄 1 行	明 和	昭 和
422	408	勳等別欄	勳四章	勳四等



7189471936

例 言

本書は各官公署の統計報告に基き、其の主要事項の要
數を摘録轉載し、又は之に若干集計を加へて編纂したも
のである。而して其の比例平均等は間々右報告より轉載
したものもあるが、多くは本局に於て算出したものであ
る。

本書に於ける度量衡單位は第四十九回年鑑より若干の
例外を除き盡く之をメートル法に改正した。

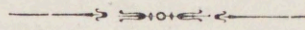
本書に於ては高級數位の計數は多くの場合一定單位未
滿を四捨五入したる略數を掲げ、四捨五入の結果數量一
單位に達せざるものあるときは之を「○」を以つて示した。

本書に掲ぐる計數の出所は之を「計數出所目録」として本
書卷末に其の書目を掲げ、精密なる計數を知らむとする
者の便に供した。

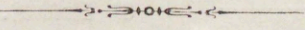


目 錄 概 覽

統 計 圖 (卷 頭)
略 說 (前 附)



摘 要 表	2—7
1. 土 地 及 氣 象	8—17
2. 人 口	18—69
3. 農 林 及 水 產	70—100
4. 鑛 業 及 工 業	101—120
5. 商 業 及 金 融	121—164
6. 貿 易	165—187
7. 交 通	188—213
8. 社 會 事 業	214—224
9. 勞 働	225—248
10. 教 育 及 宗 教	249—291
11. 警 察、衛 生 及 災 害	292—307
12. 司 法	308—337
13. 財 政	338—390
14. 選 舉、官 公 吏、軍 事 及 恩 賞	391—425
國 際 統 計 表	426—455



索 引 (前 附)
換 算 表 (")
計 數 出 所 目 錄 (後 附)
內 閣 統 計 局 刊 行 書 目 (")

統計表目錄

摘要表	頁 2
1. 土地及氣象	
1. 帝國ノ位置	8
2. 周圍及面積	8
3. 民有地	10
4. 北海道地積	13
5. // 年期地	13
6. 氣象總覽	14
7. 月別氣象	16
2. 人 口	
8. 帝國ノ人口	18
9. 世帯及人口地方別	20
10. 世帯ノ構成ニ依リ分チタル普通世帯及人員	22
11. 世帯主、家族、職業使用人及家事使用人	24
12. 年齢及配偶關係別人口	26
13. 職業(中分類)及職業上ノ地位別本業者、本業ナキ從屬者及家事使用人	28
14. 職業(大分類)別本業者、本業ナキ從屬者及家事使用人	32
15. 推計人口	36
16. 市町村數及人口	38
17. 市ノ世帯及人口	39
18. 町村ノ世帯及人口	40
19. 民籍及國籍別人口	41
20. アイヌ人口	41
21. 婚姻、離婚、出生、死産及死亡	42
22. 婚 姻	46
23. 離 婚	48
24. 夫婦關係繼續期間別離婚	49
25. 出生、死産身分別	49
26. 死亡月別	51
27. // 年齢別	51
28. 乳兒死亡	52
29. 死亡原因別	53
30. // 職業別	54
31. 死因月別	55
32. // 年齢別	56
33. // 地方別	57
34. 生命表	60
35. 北海道移住者	62
36. 渡航者及歸航者	62
37. 國籍變更	62
38. 外國旅券下附人員	63
39. 移 民	63
40. 在外本邦人國別	65
41. // 職業別	66
42. 在留外國人國籍別	68
43. // 職業別	68
44. 各國公館人員	69
3. 農林及水産	
45. 耕地面積	70
46. 農家戶數	71
47. 耕地所有者戶數	71

48. 東拓經營土地	71
49. 農産物作付面積	72
50. // 收穫高	74
51. // アール當收穫高	76
52. // 價額	77
53. 養 蠶	78
54. 家畜及家禽	80
55. // ノ出産及斃死	82
56. // ノ傳染病	82
57. // ノ交易	82
58. 屠 畜	83
59. 搾 乳	84
60. 乳肉製品	85
61. 果 實	86
62. 林野面積	87
63. 森林及林産額	88
64. 狩 獵	89
65. 保安林	90
66. 漁業者及漁船數	91
67. 漁獲物	92
68. 水産製造物	94
69. 遠洋漁業	96
70. 水産養殖	96
71. 製 鹽	97
72. 産業組合	98
73. 同業組合及聯合會	100
4. 鑛業及工業	
74. 鑛 區	101
75. 鑛 産	102
76. 製造場	104
77. 各種工業職工數	106
78. 工業生産高	108
79. 製絲業	112
80. 織物生産高	113
81. // 種類別	114
82. 朝鮮人蔘	114
83. 臺灣製糖、樟腦及阿片	114
84. 石 炭	115
85. 石 油	115
86. 特許及登録	116
87. 發明特許及實用新案種類別	116
88. 電氣事業	117
89. 發電所	117
90. 電氣需用	118
91. 瓦 斯	119
92. 度量衡器及計量器	120
5. 商業及金融	
93. 商工會議所	121
94. 取引所	121
95. 清算取引	122
96. 米穀取引所(清算取引先物平均相場)	123
97. 物 價	124

98. 會 社	130
99. 銀行總覽	138
100. 日本銀行兌換券	140
101. 日本銀行金利	140
102. 橫濱正金銀行爲替諸手形	140
103. // 銀行券	141
104. 正貨現在高	141
105. 通貨流通高	141
106. 日本勸業銀行債券	141
107. // 貸付金	142
108. 農工銀行債券	143
109. // 貸付金	143
110. 北海道拓殖銀行債券	144
111. // 貸付金	144
112. 臺灣銀行券	145
113. 朝鮮銀行券	145
114. 日本興業銀行債券	145
115. 普通銀行營業狀況	146
116. 貯蓄銀行營業狀況	147
117. 信託業	148
118. 擔保付社債信託業	148
119. 無盡業	148
120. 手形交換高	149
121. 金 利	150
122. 外國爲替相場	151
123. 郵便爲替	152
124. 郵便貯金	153
125. 振替貯金	154
126. 造幣局受入金銀銅地金	155
127. 貨幣鑄造及發行	155
128. 保險會社營業狀況	156
129. 簡易生命保險	160
130. 健康保險	162
131. 郵便年金事業收入支出	163
6. 貿 易	
132. 輸移出入品總額及貿易外收支	165
133. 内外國産別及特別輸出入品價額	167
134. 輸出入品種類別	167
135. 港別輸出入	168
136. 月別輸出入	168
137. 貿易船舶出入	168
138. 輸出入國別	169
139. 輸移出品々目別	171
140. 輸移入品々目別	175
141. 輸出品國別	181
142. 輸入品國別	184
143. 北海道移出物品價額	186
144. 樺太移出物品價額	186
145. 南洋輸移出入品價額	186
146. 金銀輸移出入	187
7. 交 通	
147. 道 路	188
148. 橋 梁	188
149. 通信局所	189
150. 內國郵便及電信	190
151. 外國郵便及電信	191

152. 通常郵便線路	192
153. 電信及電話線路	192
154. 電 話	193
155. 鐵 道	194
156. 鐵道運輸	196
157. 鐵道營業收支	198
158. 地方鐵道職員	198
159. 鐵道事故	198
160. 電氣軌道	199
161. 自動車軌道	199
162. 馬車軌道	199
163. 人車軌道	199
164. 諸車交通事故	200
165. 諸 車	202
166. 航 空(民間)	203
167. 航路標識	204
168. 入港船舶	205
169. 船舶噸數別	206
170. 船質及船齡別	206
171. 船舶地方別	208
172. 帆船石數別	209
173. 小 船	209
174. 港 灣	210
175. 造船所及船渠	210
176. 海 員	211
177. 海員審判所	211
178. 遭難船舶	212
179. 汽船會社營業狀況	213
8. 社會事業	
180. 社會事業施設類別	214
181. // 獎勵助成金	216
182. // 事業費	218
183. 軍事救護	218
184. 罹災救助基金	219
185. 恤 救	220
186. 養育棄兒	221
187. 釋放人保護	221
188. 行旅病及死亡	222
189. 勞務者共濟	223
190. 映畫檢閱	223
191. 娛樂場	224
9. 勞 働	
192. 勞働統計實地調査結果	225
193. 工場及從業者	228
194. 工場及職工數	230
195. 收入階級別一世帯一箇月平均實收入及實支出内譯	232
196. 公設職業紹介	234
197. 營利職業紹介	236
198. 日傭勞働紹介	237
199. 家庭職業紹介	237
200. 勞働爭議	238
201. 小作爭議	240
202. 賃 銀	242
203. 職工平均賃銀手當賞與額	242
204. 鑛夫平均賃銀手當賞與額	243
205. 工場傷害扶助	243

206. 鑛夫傷病扶助	244
207. 鑛夫人員	244
208. 鑛山變災度數及死傷人員	244
209. 組 合	245
210. 勞働組合種類別	245
211. 官業員共濟組合	246
212. 友愛組合	247
213. 消費組合	248

10. 教育及宗教

214. 學校、教員、生徒數	249
215. 學齡兒童	250
216. 小學校及學級	251
217. 小學校教員	252
218. 小學校兒童	254
219. 幼稚園	255
220. 學齡兒童盲聾啞者	256
221. 盲、聾啞學校	257
222. 師範學校	258
223. 高等師範及臨時教員養成所	259
224. 教員檢定合格者	259
225. 中學校	260
226. 高等女學校	261
227. 實科高等女學校	262
228. 專門學校	263
229. 高等學校	265
230. 大 學	265
231. 大學學生、生徒、學部別	266
232. 入學志願者及入學者	267
233. 學習院	267
234. 實業補習學校	268
235. 實業學校及職業學校	270
236. 實業專門學校	273
237. 各種ノ學校	274
238. 外國人教員及學生生徒	276
239. 文部省在外研究員	277
240. 博 士	277
241. 生徒體格	278
242. 青年團及青年訓練所	282
243. 小學校教員平均月俸	283
244. 公學資產	283
245. 公學費	284
246. 公學收入	284
247. 公學收入及公學費地方別	286
248. 出版圖書	287
249. 新聞雜誌	287
250. 圖書館	288
251. 神社及神官神職	289
252. 寺院及住職	290
253. 佛道教會說教所	291
254. 神 道	291
255. 基督教	291

11. 警察、衛生及災害

256. 司法警察官ノ取扱ヒタル犯罪檢舉件數	292
257. 盜難詐欺及恐喝	294
258. 被殺害者	294

259. 災害其他ノ事故ニテ死セシ人員	294
260. 醫藥業	295
261. 種痘人員	296
262. 傳染病	298
263. 精神病	299
264. 水 道	300
265. 墓地及埋火葬	301
266. 水災、潮災及暴風雨被害	302
267. 火 災	304
268. 消防員及機械器具	305
269. 貸座敷、料理屋及藝娼妓數	306

12. 司 法

270. 區裁判所取扱件數	308
271. 地方裁判所取扱件數	308
272. 控訴院取扱件數	309
273. 大審院取扱件數	309
274. 區裁判所訴訟件數	310
275. 區裁判所訴訟事件金額別	310
276. 區裁判所訴訟終局件數	310
277. 區裁判所非訴訟事件	310
278. 和解事件	311
279. 督促事件	311
280. 戶籍ニ關スル抗告件數	311
281. 強制執行事件	312
282. 區裁判所取扱破產事件	312
283. 借地借家調停事件	312
284. 地方裁判所第一審訴訟件數	312
285. 地方裁判所第一審訴訟事件金額別	312
286. 地方裁判所第一審訴訟終局件數	313
287. 地方裁判所控訴件數	313
288. 地方裁判所抗告件數	313
289. 地方裁判所取扱破產事件	313
290. 小作調停事件	314
291. 控訴院控訴件數	314
292. 控訴院上告件數	314
293. 公證事務	314
294. 供託事件	315
295. 執達吏事務	315
296. 外國人ニ關スル訴訟件數	315
297. 朝鮮、臺灣、關東州民事事件	316
298. 刑事事件取扱件數	317
299. 犯罪搜查終局事件及豫審終局被告人	317
300. 刑事第一審事件	317
301. 刑事控訴事件	318
302. 刑事上告事件	318
303. 朝鮮、臺灣、關東州刑事事件	318
304. 第一審刑法犯罪名別	319
305. 第一審刑法犯原因別	320
306. 第一審刑法犯年齡別	320
307. 第一審刑法犯罪名及刑名別	322
308. 第一審刑法犯受刑度數	323
309. 刑法犯執行猶豫及取消	323
310. 第一審刑法犯加重及減輕	324
311. 第一審特別法犯罪名及刑名別	325
312. 特別法犯執行猶豫及取消	325
313. 判決確定被告人	326

314. 刑事略式事件	326
315. 違警罪即決事件	326
316. 外國人ニ關スル第一審刑事事件	327
317. 登 記	328
318. 在監人員	330
319. 入監出監人員	331
320. 在監受刑者罪名及刑名別	332
321. 懲役在監受刑者刑期別	332
322. 新受刑者罪名別	332
323. 新受刑者犯數別	332
324. 新受刑者ノ年齡、其他ノ關係	334
325. 新受刑者刑名別	334
326. 體刑及財產刑執行被告人	334
327. 在監人罹病及轉歸	335
328. 少年刑務所	336
329. 在監人作業	336

13. 財 政

330. 歲入歲出總額	338
331. 歲入款別	338
332. 歲出所管別	339
333. 歲入經常部款項別	340
334. 歲入臨時部款項別	340
335. 歲出經常部款項別	341
336. 歲出臨時部款項別	347
337. 特別會計	356
338. 朝鮮總督府特別會計	358
339. 臺灣總督府	359
340. 樺太廳	361
341. 關東廳	362
342. 南洋廳	363
343. 歲入歲出豫算純計額	364
344. 所得稅納稅人員	368
345. 所得稅稅額	369
346. 第三種所得種類別	370
347. 所得金額	372
348. 地租納稅人員	373
349. 地租地目別	374
350. 營業收益稅	375
351. 國債現在高	377
352. 稅關收入	377
353. 國有財產	378
354. 大藏省預金部預金	380
355. 貸付金	380
356. 國庫支辨ニヨル道府縣經費	381
357. 道府縣歲入	382
358. 道府縣歲出	383
359. 市歲入	384
360. 市歲出	385
361. 町村歲入	386
362. 町村歲出	387
363. 市町村基本財產	388
364. 水利組合及水害豫防組合歲入歲出	389
365. 地方債	390

14. 選舉、官公吏、軍事及恩賞

366. 貴族院多額納稅者議員及互選者	391
367. 衆議院議員選舉	392
368. / 年齡及職業別	393
369. 府縣會議員選舉	393
370. 市町村會	394
371. 郡市町村數及役所役場數	395
372. 文官人員及年俸	396
373. 文官部局別	397
374. 文官休職人員	399

375. 現役陸海軍人及年俸	400
376. 國有鐵道職員	400
377. 通信職員	400
378. 警察官署及職員	401
379. 司法官署及職員	402
380. 在外公館官吏	403
381. 宮內官吏人員及年俸	403
382. 宮內官吏部局別	403
383. 地方吏員及俸給	404
384. 徵兵檢査	406
385. 陸軍衛戍病院及職員	410
386. 憲兵隊人員	411
387. 憲兵取扱犯罪人員	411
388. 陸軍軍法會議	412
389. 陸軍衛戍刑務所	412
390. 陸軍諸學校	413
391. 艦艇隻數及噸數	413
392. 海軍募兵人員	414
393. 航空(海軍)	415
394. 海軍所轄別患者數	415
395. 海軍兵種別患者數	415
396. 海軍患者病名別	416
397. 海軍刑務所	417
398. 海軍下士官及兵ノ費用	417
399. 海軍諸學校	417
400. 恩給及扶助料受給人員及金額	418
401. 恩給、扶助料、受領權裁定人員及金額	419
402. 恩給、扶助料受給權消滅	419
403. 警察官恩給及扶助料	420
404. 年金恩給拂渡高口數及金額	420
405. 有爵人員	421
406. 有位人員	421
407. 勳章佩用	421
408. 外國人新敘勳人員	422
409. 外國勳章記章佩用	422
410. 記章佩用人員及功勞者賜杯	422
411. 旭日勳章年金	423
412. 金鷄勳章年金	424
413. 勳章褫奪人員	424
414. 褒 章	425
415. 褒狀、賞杯、金圓表彰	425

國際統計表

416. 面積及人口	426
417. 主要都市人口	427
418. 職業別人口	429
419. 婚姻及離婚	431
420. 出 生	432
421. 死 亡	433
422. 死 產	434
423. 移 民	434
424. 人口增加率	435
425. 主要農產物作付面積	436
426. 主要生產品	440
427. 貿易(特別貿易)	444
428. 船 舶	446
429. 鐵 道	447
430. 正貨準備高	448
431. 通貨流通高	449
432. 卸賣物價指數	450
433. 生計費指數	450
434. 勞働組合員	451
435. 歲入歲出總額	452
436. 國 債	453
437. 小學校及中等學校	454
438. 議員及選舉有權者數	455

索引

本索引は主要項目を發音に依り、五十音順に配列せり

—(ア)—

阿片 114
遊警罪即決事件 326
醫師 295
齒科醫師 295
移住者 62
移民
内國 63
列國 434
飲食店 306

—(エ、イ)—

營業收益稅
納稅人員 375
稅額 376
營利職業紹介
衛生
醫藥業 295
種痘人員 296
法定傳染病 298
精神病 299
水道 300
墓地及埋火葬 301
映畫檢閱 223
遠洋漁業 94

—(オ、ヲ)—

大藏省預金部
預金 380
貸付金 380
卸賣物價
内國 124
列國 450
恩給 418—419

—(カ)—

海軍
軍艦 413
現役軍人 400
募兵人員 414
刑務所 417
下士官及兵ノ費用 417
患者 415—416
諸學校 417
海運 204—213
海員
海技免狀受有者 211
船員手帳受有者 211
海員審判所 211
外國旅券下附人員 63
外國人
現在人口(國勢調査) 41
職業別 69
國籍別 68

公館人員 69
教員、學生、生徒 276
民事訴訟 315
第一審刑事事件 327
新被動人員 422

會社

資本金高別 130
地方別 132
營業種類別 133
植民地 134
營業種類細別 134
商船會社 213
商事會社登記 328
會員組織取引所 121

學校 249
學生 249
體格 278

學齡兒童 250
學齡兒童中盲聾啞者 256
學習院 267
各種ノ學校 274
火災 304
火葬 301
貸席 224
貸座敷 306
加重減輕 324
瓦斯 119

家畜

總數 80
生産及斃死 82
傳染病 82
交易 82
屠畜 83
搾乳 84
乳肉製品 85

家禽

家庭(内職)職業紹介 237
活動寫眞 223—224
貨幣 155
官吏 396—403
官廳現業員共濟組合 246
簡易生命保險 160—161
觀物場 224

—(キ)—

議員選舉 391—394
貴族院 391
衆議院 392
府縣會 393
市町村會 394
列國 455
氣象
總覽 14
月別 16
累年平均 16
徽章 422
佩用 422
外國徽章 423

汽船會社營業狀況 213
汽動車軌道 199
軌道
電氣 199
汽動車 199
馬車 199
人車 199

救助 218—223
罹災救助基金 219
恤救人員及金額 220
棄兒 221
行旅病人及死亡人 222
日傭勞働者共濟 223

牛車 202
橋梁 188
教育 249—286
總覽 249
幼稚園 255
小學校(列國ハ454頁) 249—255

中學校() 260
高等女學校 261
實科高等女學校 262
盲啞學校 257
師範學校 258
高等師範學校 259
女子高等師範學校 259
臨時教員養成所 259
專門學校 263
實業專門學校 273
高等學校 265
大學 265
實業學校 270
實業補習學校 268
各種ノ學校 274
學習院 267
學齡兒童 250
中盲聾啞者 256
教員檢定 259
入學志願者及入學者 267
外國人教員、學生、生徒 276
文部省留學生 277
博士 277
學生、生徒、兒童體格 278
男女青年團 282
青年訓練所 282
小學教員俸給 283
公學資產 283
公學收入 284
公學費 284

救 助 218—223
罹災救助基金 219
恤救人員及金額 220
棄兒 221
行旅病人及死亡人 222
日傭勞働者共濟 223

牛車 202
橋梁 188
教育 249—286
總覽 249
幼稚園 255
小學校(列國ハ454頁) 249—255

中學校() 260
高等女學校 261
實科高等女學校 262
盲啞學校 257
師範學校 258
高等師範學校 259
女子高等師範學校 259
臨時教員養成所 259
專門學校 263
實業專門學校 273
高等學校 265
大學 265
實業學校 270
實業補習學校 268
各種ノ學校 274
學習院 267
學齡兒童 250
中盲聾啞者 256
教員檢定 259
入學志願者及入學者 267
外國人教員、學生、生徒 276
文部省留學生 277
博士 277
學生、生徒、兒童體格 278
男女青年團 282
青年訓練所 282
小學教員俸給 283
公學資產 283
公學收入 284
公學費 284

救 助 218—223
罹災救助基金 219
恤救人員及金額 220
棄兒 221
行旅病人及死亡人 222
日傭勞働者共濟 223

牛車 202
橋梁 188
教育 249—286
總覽 249
幼稚園 255
小學校(列國ハ454頁) 249—255

中學校() 260
高等女學校 261
實科高等女學校 262
盲啞學校 257
師範學校 258
高等師範學校 259
女子高等師範學校 259
臨時教員養成所 259
專門學校 263
實業專門學校 273
高等學校 265
大學 265
實業學校 270
實業補習學校 268
各種ノ學校 274
學習院 267
學齡兒童 250
中盲聾啞者 256
教員檢定 259
入學志願者及入學者 267
外國人教員、學生、生徒 276
文部省留學生 277
博士 277
學生、生徒、兒童體格 278
男女青年團 282
青年訓練所 282
小學教員俸給 283
公學資產 283
公學收入 284
公學費 284

救 助 218—223
罹災救助基金 219
恤救人員及金額 220
棄兒 221
行旅病人及死亡人 222
日傭勞働者共濟 223

牛車 202
橋梁 188
教育 249—286
總覽 249
幼稚園 255
小學校(列國ハ454頁) 249—255

中學校() 260
高等女學校 261
實科高等女學校 262
盲啞學校 257
師範學校 258
高等師範學校 259
女子高等師範學校 259
臨時教員養成所 259
專門學校 263
實業專門學校 273
高等學校 265
大學 265
實業學校 270
實業補習學校 268
各種ノ學校 274
學習院 267
學齡兒童 250
中盲聾啞者 256
教員檢定 259
入學志願者及入學者 267
外國人教員、學生、生徒 276
文部省留學生 277
博士 277
學生、生徒、兒童體格 278
男女青年團 282
青年訓練所 282
小學教員俸給 283
公學資產 283
公學收入 284
公學費 284

救 助 218—223
罹災救助基金 219
恤救人員及金額 220
棄兒 221
行旅病人及死亡人 222
日傭勞働者共濟 223

牛車 202
橋梁 188
教育 249—286
總覽 249
幼稚園 255
小學校(列國ハ454頁) 249—255

中學校() 260
高等女學校 261
實科高等女學校 262
盲啞學校 257
師範學校 258
高等師範學校 259
女子高等師範學校 259
臨時教員養成所 259
專門學校 263
實業專門學校 273
高等學校 265
大學 265
實業學校 270
實業補習學校 268
各種ノ學校 274
學習院 267
學齡兒童 250
中盲聾啞者 256
教員檢定合格者
小學校教員 259
中等科教員 259

高等科教員 259
教會 291
漁業 87—93
漁業者數 91
漁船數 91
漁獲物價額 92
水產製造物價額 94
遠洋漁業 96
水產養殖 96
製鹽 97
行刑 330—331
供託事務 315
供託局職員 402
共濟組合
官業員 246
友愛組合 247
協調組合(地主、小作人) 245
基督教 291
銀行 138—147
總覽 138
日本銀行 140
橫濱正金銀行 140
日本勸業銀行 141
農工銀行 143
北海道拓殖銀行 144
臺灣銀行 145
朝鮮銀行 145
日本興業銀行 145
普通銀行 146
貯蓄銀行 147

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

金 融
銀行 138—147
金利 150
正貨及紙幣流通高(列國ハ448—449頁) 141
信託業 148
無盡業 148
手形交換 149
清算取引 122
外國爲替相場 151
郵便爲替 152
貯金 153
振替貯金 154
貨幣 155
金利 150
日本銀行金利 149
金銀銅地金
產額 102
造幣局受入 155
輪移出入 187

キ、クの部

軍艦	413
勳章	
佩用數	421
襷	424
外國勳章年金	422
旭日勳章年金	423
金鷄勳章年金	424
軍事救護	218
—(ケ)—	
刑事裁判	
總件數	317
第一審事件	317
控訴事件	318
上告事件	318
植民地	318
刑事略式事件	326
刑法犯第一審	
罪名別	319
原因別	320
年齡別	320
刑名別	322
罪名刑名別	322
受刑度數	323
加重減輕	324
外國人=關スル事件	327
刑法犯執行猶豫	323
刑ノ執行	334
刑務所	402
少年刑務所	336
警察	292—307
犯罪檢舉件數	292
盜難、詐欺、恐喝	294
被殺害者	294
警察署	401
計量器	120
藝妓	306
置場	306
劇場	224
現住人口(植民地)	19
現在人口(國勢調査)	
總數	18
世帯別	20
世帯ノ構成=依リ分チタル普通世帯及人員	22
世帯主、家族職業使用人及家事使用人	24
年齡配偶關係別	26
職業及職業上ノ地位別	28—35
市別	39
町村別	40
民籍國籍別	41
健康保險	162—163
減輕加重	324
憲兵隊	
人員	411
取扱犯罪人員	411

—(コ)—

耕地

面積	70
所有者戶數	71
鑛業	101—113, 115
鑛區	101
鑛產	102
石炭	115
石油	115
鑛夫	
勞役人員	244
傷病扶助	244
鑛山變災死傷人員	244
工業	104—114
製造場	104
各種工業職工數	106
生産	
內國	108
列國	440
蠶絲生産高	112
織物生産高	113
同種類細別	114
製糖	114
榨糖產出	114
阿片	114
工場	228
工場數	228
從業者數	228
職工數	228
傷害扶助	243
交通	188—213
道路	188
橋梁	188
港灣	210
通信	189
鐵道(列國ハ 447頁)	194
軌道	199
諸車	202
海運(列國ノ船舶ハ 446頁)	204
事故	198, 200, 203, 212
汽船會社營業狀況	213
港灣	210
航空	203, 415
航路標識	204
行旅者救濟	
病人	222
死亡人	222
高等女學校	261
高等學校	265
高等科教員檢定	259
高等師範學校	259
公設職業紹介	234
公學資産	283
公學收入	284
公學費	284
公吏	404—405
公證	
公證人	402
事務	314

公館人員	
在外本邦公館	403
在本邦外國公館	69
控訴院取扱件數	
民事	309—314
刑事	318
小賣物價	127
小包郵便物	190, 191
小船	209
小作爭議	240
小作人組合	245
小作人、地主協調組合	245
國籍及民籍別人口	41
國籍變更	62
國有財産	378
國庫支辨地方費	381
國債	
內國	377
列國	453
婚姻、離婚、出生、死産、死亡	42
總數	
市別	43
内地外ノモノ	45
婚姻	
種類別	46
年齡別	47
列國	431
—(サ)—	
財政	338—390
歳入歳出(列國ハ 452頁)	338—347
特別會計	356—363
豫算純計額	364—367
租稅	368—376
國債(列國ハ 453頁)	377
稅關收入	377
國有財産	378—379
預金部預金及貸付	380
國庫支辨地方經費	381
地方財政	382—390
歳入歳出總額	338
歳入經常、臨時部別總額	338
歳入經常部款項別	340
歳入臨時部款項別	340
歳出所管別總額	339
歳出經常部款項別	341
歳出臨時部款項別	346
裁判	
裁判所及職員	402
民事々件	308—317
刑事々件	317—327
在監人	
人員	335
罹病	335
作業	336
受刑者罪名及刑名別	332
受刑者刑期別	332

新受刑者罪名別	332
" 犯數別	332
" 刑名別	334
" 年齡別	334
" 飲酒關係	334
" 教育程度	335
" 身分別	335
" 職業別	334
" 養育者別	335
在外公館官吏	403
在外本邦人	65
在本邦外國公館人員	69
災害	294, 302, 304
搾乳	84
産婆	295
産業組合	98
山林	87—90
—(シ)—	
商業	121—137
商工會議所	121
取引所	121
清算取引	122
米穀取引	123
卸賣物價(列國ハ 450頁)	124
小賣物價	127
商事會社	130, 134, 135
齒科醫師	295
事故	
鐵道	198
諸車	202
航空	203
船舶	212
死傷	
災害事故(警察)	294
水災	302
潮災	302
暴風雨	302
其他(鐵道、諸車、航空、船舶ハ事故ノ項參照)	
死亡	
月別	51
年齡別	51
乳兒死亡	52
原因別	53
職業別	54
死因月別	55
死因年齡別	56
死因地方別	57
(列國ノ死亡ハ 433頁)	
死産	
內國	50
列國	434
市歳入歳出	384
" 基本財産	388
市町村數	395
" 人口階級別	38
" 會數	394
" 役場數	395

コ、ケ、コの部

市町村吏員	404—405
市別現在人口及世帯數	39
〃 人口動態	43
支廳	395
恤救	220
實業補習學校	268
實業學校	270
實業專門學校	273
實科高等女學校	262
執達吏	402
執達吏事務	315
執行猶豫	
刑法犯	323
特別法犯	325
自轉車	202
自動車	202
兒童數	249
〃 體格	278
師範學校	258
賜杯	420
司法	
裁判	308—327
登記	328—329
行刑	330—336
司法官署及職員	402
借地、借家調停	312
爵位	421
社會事業	
施設類別	214
獎勵助成金	216
事業費	218
罹災救助基金	219
恤救	220
養育棄兒	221
行旅病人及死亡人	222
勞務者救濟	223
收入階級別一世帯一箇月平均實收入及實支出內課	232
宗教	289—291
神社	289
神官神職	289
寺院及住職	290
佛道教會說教所	291
神道	291
基督教	291
狩獵免狀下附數	289
出版圖書	287
衆議院	
議員選舉	392
議員職業別	393
種痘	296
出生	
身分別	49
地方別	50
列國	432
所得稅	

納稅人員	368
稅額	369
金額	372
第三種所得稅種類別	370
傷害	
工場ニ於ケル	243
鑛山ニ於ケル	244
職業紹介	
公設	234
營利	236
日傭	237
家庭(內職)	237
消費組合	248
消防	305
樟腦	114
諸車	
車數	202
事故	200
小學校	
校數	251
學級	251
教員	252
兒童	254
教員檢定	259
教員俸給	283
列國	454
女子高等師範學校	259
女子青年團	282
少年刑務所	336
人口	
現在人口	18. 20—39—41
列國人口	426
〃 主要都市人口	427
現在人口(植民地)	19
本籍人口	18
職業別(列國ハ 429頁)	28—35
推計人口	36
人口階級別市町村數及人口	38
動態	42—59
生命表	60
北海道移住者	62
渡航及歸航者	62
國籍變更	62
移民	63
在外本邦人	65
在留外國人	68
列國人口增加率	435
人力車	202
人車軌道	199
森林面積	88
神社	289
神官神職	289
神道	291
信託	
會社數	148
種類別	148
契約高	148
擔保附社債信託	148
新報、雜誌	287

—(ス)—

推計人口	36
水道	300
水産	
產額	92
製造物價額	94
養殖	96
水利組合	
普通水利組合	389
水害豫防組合	389
棄兒(養育)	221

—(セ)—

生命表	60
製鹽	97
製糖	114
製藥者	295
精神病	299
清算取引	122
正貨現在高(列國ハ 448頁)	141
生計費指數(列國)	450
生徒	
生徒數	249
體格	278
青年團	282
青年訓練所	282
稅關收入	377
石炭	115
石油	115
船舶	
入港船舶	205
貿易船出入	168
噸數別	206
船質	206
船齡	206
地方別	208
帆船	209
小船	209
造船所	210
船渠	210
遭難	212
列國	446
船員手帳受有者	211
海技免狀受有者	211
專門學校	263
選舉	391—394
貴族院互選	391
衆議院	392
府縣會	393
市町村會	394

—(ソ)—

租稅	368—376
所得稅	368
地租	373
營業收益稅	375
爭議	238—241
勞働	238
小作	240
相場	
外國爲替	151
米穀	123
壯丁	406—410
身長	406
體重	407
體格	410
教育程度	410

造船所	210
遭難船舶及死傷人員	212
—(タ)—	
大審院取扱件數	
民事	309. 316
刑事	327
大使館	403
大學	265
臺灣銀行	138. 145
體格	
學生、生徒、兒童	278
壯丁	406
—(チ)—	
地租	
納稅人員	373
地目別	374
地方財政	382—390
道府縣歲入歲出	382
市歲入歲出	384
町村歲入歲出	386
市町村基本財産	388
水利組合	389
地方債	390
地方鐵道	
運輸	194—197
職員	198
地方海員審判所	211
地方裁判取扱件數	
民事	308—316
刑事	317—327
中學校	
內國	260
列國	454
中等科教員檢定	259
朝鮮銀行	138. 145
朝鮮人蔘	114
貯蓄銀行	138. 147
徴兵檢査	406—410
町村別現在人口及世帯	40
町村歲入歲出	386
町村基本財産	388
賃銀	
職工平均賃銀手當賞與額	242
鑛夫平均賃銀手當賞與額	243
—(ツ)—	
通貨流通高	
內國	141
列國	449
—(テ)—	
停車場	194
手形交換	149
鐵道	
運輸	196
職員	198
事故	198
營業收支	198
電氣	
事業數	117
發電力	117
發電所	117
需用	118
軌道	199
電信	
局所	189
通數	190—191
線路	192
職員	400

ス、セ、ソ、タ、チ、ツ、テの部

電話	頁
局所	189
加入者通話	193
線路	192
職員	400
傳染病(法定)	298
—(ト)—	
道路	188
同業組合及同聯合會	100
東洋拓殖會社經營土地	71
燈臺	204
道府縣	
歲入歲出	382
選舉	393
登記	
件數	328
登録稅及手数料	329
商會社細別	328
職員	402
登録	
實用新案	116
意匠	116
商標	116
登記登録稅	328
盜難、詐欺及恐喝	294
特許	
發明特許	116
阿片吸飲特許者	114
特別會計	356—363
歲入歲出所管別	356
朝鮮總督府所管款項別	358
臺灣總督府所管款項別	359
樺太廳所管款項別	361
關東廳所管款項別	362
南洋廳所管款項別	363
特別法犯	
罪名及刑名別	325
執行猶豫	325
渡航者及歸航者	62
屠畜	83
圖書出版	287
圖書館	288
土地	8—13, 70—71
位置	8
周圍	8
面積	8
民有地	10
耕地面積	70
耕地所有者戶數	71
東拓經營土地	71
度量衡	120
取引所	
會員組織取引所	131
株式組織取引所	131
清算取引所	122
米穀取引所	123
フツク(船渠)	210
—(ニ)—	
荷車	202
日本銀行	138, 140

日本勸業銀行	138, 141—142
日本興業銀行	138, 145
乳兒死亡	52
乳肉製品	85
入港船舶	
總數	205
貿易船	168
入學志願者及入學者	267
入監出監人員	331
—(ネ)—	
年金	
受給人員	418
受領權裁定人員	419
警察官	420
拂渡高	420
旭日勳章年金	423
金鷄勳章年金	424
郵便年金	163
—(ノ)—	
農業	
耕地面積	70
耕地所有者戶數	71
農家戶數	71
農產物	72
東拓經營土地	71
養蠶	78
果實	86
農家戶數	71
農產物	72—77
作付面積(列國ハ 436頁)	72—73
收穫高	74
アール當收穫高	76
價額	77
農工銀行	138, 143
—(ハ)—	
賣藥	
方數	295
請賣人	295
行商人	295
博士	277
馬車	202
馬車軌道	199
發電所	117
發電力	117
發明特許	116
帆船	209
犯罪檢舉件數	292
犯罪搜查終局事件	317
判決確定被告人	326
—(ヒ)—	
飛行	203
被殺害者	294
日傭勞働者紹介	237
表彰	425
病院	295
—(フ)—	
府縣	
歲入歲出	382
府縣會選舉	393
武官人員及年俸	400
扶助料	416—418
佛教	290, 291

物價	頁
卸賣	124
小賣	127
普通銀行	138, 146
文官	
人員及年俸	396
官廳別	396—399
休職	399
—(ヘ)—	
米穀取引	123
辯護士	402
—(ホ)—	
貿易	165—187
總額(輸移出入)及貿易外收支	165
内外國產別(輸出入)	167
種類別(%)	167
港別(%)	168
月別(%)	168
船舶出入	168
國別(輸出入)	169
品目別 輸移出入	171
品目別國別(輸出入)	181
移出入(北海道)	186
輸移出入(南洋)	186
金銀輸移出入	187
列國	444
褒章	425
褒狀	425
北海道拓殖銀行	138, 144
保安林	90
保險	
官營	160
民營	156
健康保險	162
郵便年金	163
墓地	301
本籍人口	18
—(マ)—	
埋葬(火葬、墓地)	301
待合茶屋	307
—(ミ)—	
民有地	
有租地	10
免租地	11
年期地	12
特別免租地	13
民籍及國籍別人口	41
民事裁判	308—317
—(ム)—	
無盡業	148
—(メ)—	
面積	
內國	8
列國	426
免狀受有者	
海技免狀	211
航空乘員免狀	203
教員檢定合格者	259
—(モ)—	
盲聾啞者	
學齡兒童中	256
學校數	257
—(ヤ)—	
藥劑師	295

藥種商	295
—(ユ)—	
郵便	
局所	189
職員	400
郵便物	190
線路	192
爲替	152
貯金	153
振替貯金	154
年金郵便	163
有爵者	419
有位者	419
遊藝場	224
友愛組合	247
輸入稅	377
—(ヨ)—	
幼稚園	255
養蠶	78
養育費	231
養育棄兒	231
橫濱正金銀行	138, 140—141
豫審終局被告人	317
豫算純計額	364
預金部預金及貸付金	330
寄席	224
—(リ)—	
陸軍	400, 410—413
現役軍人	400
衛戍病院	410
軍法會議	412
衛戍刑務所	412
各學校	413
離婚	
種類別	48
夫婦關係繼續期間別	49
國際表	431
罹災救助	219
流通高(正貨及紙幣)	141
留學生(文部省)	277
料理屋	307
領事館	403
林業	87—90
林野面積	87
森林面積	88
林產物	88
狩獵免狀下附數	89
保安林	90
—(ロ)—	
勞働	
勞働統計實地調査結果	225—227
家計調査結果	230—233
工場及從業者	223—229
職業紹介	234—237
爭議	238—241
賃銀	242
傷害(工場、鑛山)	243—244
勞働組合等	245
〃組合員(列國)	451
共濟組合	246, 247
消費組合	248
勞務者共濟	223
蠟燭	109

フ、ヘ、ホ、マ、ミ、ム、メ、モ、ヤ、ユ、ヨ、リ、ロの部

略 說

1. 土地及氣象	頁 2
2. 人 口	3
3. 農林及水產	6
4. 鑛業及工業	10
5. 商業及金融	12
6. 貿 易	17
7. 交 通	19
8. 社 會 事 業	21
9. 勞 働	21
10. 教育及宗教	23
11. 警察、衛生及災害	27
12. 司 法	28
13. 財 政	30
14. 選舉、官公吏、軍事及恩賞	32

I. 土地及氣象 (統計表8—17頁参照)

土地

我が帝國は極南臺灣高雄州恒春庄七星岩の南端北緯21度45分より極北千島列島阿頼度島の最北緯北緯50度55分に至り、極西臺灣澎湖廳望安庄花嶼の西端東經119度18分より極東千島列島占守島の東端東經156度31分に至る間に於て亞細亞大陸の東に沿ひ斜に東北より西南に點在する樺太島の南半、千島、北海道、本州、四國、九州及臺灣を包含する所謂日本列島と大陸である朝鮮半島から成り、樺太の北部は露西亞朝鮮の北部は露西亞及中國と境を接する外四面皆海で西は中國、南は比律賓、東は亞米利加大陸と遙に相對して居る。

【面積】 帝國の總面積は675,039方呎で其中、内地は5割7分を占め、朝鮮は3割3分、臺灣と樺太とは各々5分で樺太の方が臺灣より116方呎廣い。

列國中面積の最も廣いのは露西亞の2,135萬方呎(内、歐露は424萬方呎)で之に亞ぐは中國の1,111萬方呎、ブラジルの852萬方呎、北米合衆國の784萬方呎、アルゼンティンの298萬方呎等である。帝國內地の面積は列國中の第25位でトルコ、パラグアイ、瑞典、ポーランドは我が國の上に、フィンランド、諾威は我が國の下に在る。又帝國の總面積を列國の屬領を含めた面積と比較すれば第二十一位である。

面積を府縣別に見ると最も廣いのは北海道の88,775方呎で内地面積の2割3分を占め他に2萬方呎以上の府縣はない。岩手、福島、長野、新潟、秋田及岐阜は各1萬方呎以上で面積の廣い地方に屬し、佐賀、沖繩、神奈川、東京、香川、大阪は何れも1千乃至2千方呎臺で面積の狭い地方である。

【民有地】 昭和五年一月一日に於ける内地の民有地は1,914萬ヘクタールで總面積の5割に當り逐年増加の趨勢である。各府縣の面積中民有地の割合を見ると最も多いのは山梨の9割2分で之に亞ぐは神奈川の8割1分、香川、沖繩、千葉、島根、埼玉の各7割臺、其の最も少いのは宮崎の3割、秋田、青森、北海道、大分の3割乃至4割で他は5割内外の地方が多い。

民有有租地を地目別に見ると田は2,956千ヘクタール、畑は2,825千ヘクタール、宅地は416千ヘクタール、山林は8,606千ヘクタール、原野及牧場は1,848千ヘクタール、鹽田、鑛泉地、池沼及雜種地は37千ヘクタールで之を前年に比較すると田は5千ヘクタール、畑は16千ヘクタール、宅地は2千ヘクタール、山林は8千ヘクタール、原野及牧場は37千ヘクタールを夫々増加した。

【北海道地積】 民有地を除きたる北海道地積は昭和三年末に6,122千ヘクタール在り内未開地、賣拂未成功地、貸付中未開地、未開地未處分地は大正十四年に646千ヘクタール、總地積の1割を占めたが最近には無くなつた。

氣象

昭和五年に於ける平均氣壓は朝鮮、滿洲及中國に高く762耗乃至4耗を示し最高は大連の763.6耗である。本州は761耗内外のもの多く、北海道、樺太及南洋は氣壓概して低く、最低はパラオの757.6耗である。臺灣及沖繩は770耗臺が多い。

【氣溫】 昭和五年中平均氣溫の攝氏20度を超ゆる地方は臺灣、沖繩及小笠原島及南洋で是等の中溫度最も高いのはパラオの26.7度である。四國、九州に屬する諸地方、銚子以西に位する太平洋沿岸諸地方は概ね16度内外、中國近畿兩區に屬する諸地方は15度内外、東山區に屬する諸地方は10度内外から13度以上のものがあつて、各地方間の差甚しく、奥羽地方は10度内外、北海道は南方の一部8乃至9度であるが5度内外の地方多く、樺太は4度臺以下で敷香の如きは0.3度である。朝鮮の南部は10度乃至13度稀に15度を示すが最北部は4度臺に降り、滿洲は10度内外、上海は16度、漢口は16.9度である。

氣溫の最高極は臺灣では臺北及臺東の36.1度、九州では佐世保の38度、中國では濟南の40.3度、天津の39.7度が高い。最低極は北海道では旭川の零點下28度、樺太は敷香の零點下34.7度、朝鮮では中江鎮の零點下41度、滿洲では長春の零點下29.9度分である。

【降水量】 昭和五年中の降水量は地方に依て甚しい差異がある、總量3千耗を超ゆるは八丈島、大台ヶ原山、名瀬、2千耗を超ゆるは高田、伏木、金澤、福井、敦賀、伊吹山、豊岡、潮岬、燒、溫泉岳、嚴原、宮崎、鹿兒島、那覇、石垣島、臺北、臺中、臺南の諸地方にして、本州は概ね千耗乃至2千耗、北海道は900耗乃至1千耗、樺太は500耗乃至800耗で少雨の地方である。朝鮮、滿洲、中國も亦少雨の地方が多い。南洋はパラオ3千耗臺で雨量多い。

【風】 平地に於ては各地の風速に甚しき逕庭なく1米乃至3米のものが多く、唯紗那、羽幌、壽都、銚子、新潟、八丈島、長津呂、伊吹山、溫泉岳、那覇、澎湖、サイパン、青島は風速急で、何れも毎秒平均5米以上である、最大風速も亦地位に依て甚しき差異あり30米以上は羽幌、壽都、伊吹山、佐賀、長崎、溫泉岳、富江、枕崎、那覇にして他は30米未満の地である。

II. 人口 (表18—69頁参照)

人口靜態

昭和五年國勢調査の結果に依る確定人口は帝國總數90,995千人で中、内地は64,450千人(7割1分)朝鮮は21,058千人(2割3分)、臺灣は4,593千人(5分)、樺太は295千人(3厘)である、又同時に調査した關東州及南滿洲鐵道附屬地の人口は1,328千人、南洋委任統治區域内の人口は70千人である。

歐米諸國最近の國勢調査に依ると北米合衆國は12,278萬人(昭和五年四月一日調)獨逸は62,568千人(大正十四年六月十六日調)英吉利本國は47,123千人(大正十年六月二十日調)佛蘭西は40,744千人(昭和元年三月七日調)である、又推計に依る中國の人口は47,479萬人(昭和三年)と稱し、露西亞の人口は147百萬(歐露昭和元年)と報じて居る、即ち列國中我が帝國の人口(昭和五年)は第四位に在る、内地人口の増加率大正十四年乃至昭和五年一年平均は1,000人に付男15,361、女15,247、其の平均15,304、朝鮮は15,256、臺灣は28,352、樺太は76,963である。

【男女別】 昭和五年國勢調査結果確定人口に依れば男女の割合は内地及内地外の各地域何れも男子は女子に超過するが其の程度は一様でなく女100に付男の割合内地は101で男女殆ど均衡を保ち、朝鮮(速報人口)は105、臺灣は105で、男子超過の程度未だ甚だしくないが、南洋(速報人口)は120、樺太(速報人口)は133、關東州は156で何れも男子超過の程度甚だ高い。

【年齢別】 大正十四年國勢調査に依る年齢別人口は零歳以上14歳、15歳以上59歳、60歳以上の三大階級に大別して其の割合を見ると全人口1,000中零歳以上14歳は3割7分、15歳以上59歳は5割6分、60歳以上は8分で各階級相互の割合が保たれて居る年齢構成である。

人口1,000中6歳以上14歳の學齡人口の割合は2割、17歳以上40歳迄の兵役義務年齢人口は1割8分男總數に對すれば3割5分、15歳以上50歳の妊孕年齢女人口は2割4分女總數に對すれば4割8分、14歳以上の犯罪責任年齢人口は6割5分である。

【配偶關係】 大正十四年國勢調査の結果人口1,000人中有配偶者の割合は4割、未婚者は5割2分、死別の者は7分、離別の者は1分の割合である。

【府縣別人口】 各府縣人口は甚だ不同で之を昭和五年國勢調査確定人口に付て觀るに最も多いのは東京府の5,409千人、其の最も少いのは鳥取縣の489千人で、最多と最少との比は11と1とに當る、人口200萬以上300萬は大阪、北海道、兵庫、愛知、福岡、100萬以上200萬は新潟、静岡、長野、廣島、神奈川、鹿兒島、京都、福島、茨城、千葉、埼玉、熊本、岡山、長崎、群馬、岐阜、三重、宮城、愛媛、栃木、山口、山形、100萬未満は秋田、岩手、

大分、青森、和歌山、富山、宮崎、石川、島根、香川、高知、徳島、滋賀、佐賀、山梨、福井、奈良、沖繩、鳥取である。

尙一府縣平均人口は137萬人て平均以上の府縣は上記の内埼玉縣より以上列記の17府縣、平均未満の府縣は同じく熊本縣以下30縣である。

【人口密度】 昭和五年内地人口密度は1方呎に付169人で地方に依り甚だしく不同であるが最も稠密なのは東京の2,522人で大阪の1,952人は東京の密度に近く、遙に降つて神奈川の688人、福岡の512人、愛知の505人、香川の394人、埼玉の384人は相亞いて人口稠密の地方に屬し、250人以上350人の府縣は千葉、京都、兵庫、佐賀、長崎、200人以上250人は茨城、静岡、三重、廣島、愛媛、沖繩、150人以上200人は栃木、群馬、富山、石川、滋賀、奈良、和歌山、岡山、山口、徳島、熊本、鹿兒島にして其の少き地方は宮崎の98人、青森の91人、秋田の85人、岩手の64人北海道の32人等である。

一世帯に付大正十四年内地人口は全國平均5人で、之を地方別に見ると大體三箇の分野がある、即ち富山、長野、静岡以北、北海道に至る各地方は何れも5人以上6人で殊に東北地方に至るに従ひ6人に近いものが多い、右分界縣に接する石川、岐阜、愛知以西の畿内、中國、四國及九州の大分、鹿兒島及沖繩は概ね5人以下で就中近畿、中國に屬する地方等が少く、奈良及九州に於て福岡、長崎、宮崎は全國平均と同位である。但し5人以上の分野中獨り東京は4人6分を示し、又5人以下の分野に在るから前者の如く著明ではないが大阪の4人5分、京都、兵庫の如き亦一世帯平均人口少く4人6分である。

蓋し前項の人口密度及一世帯平均人口の多少は固より天然上の影響のみでなく社會狀態及經濟事情の然らしめる所である、東京、大阪の其他大都市を包含する地方に於ては人口稠密で一世帯の人口少いのは人口の都會集中經濟組織の變遷に伴ふ小家族制の反映と見ることが出来るし、東北地方は人口稀疎で一世帯人員の多いのは天然の影響と一面社會狀態、經濟組織に於て大に異なるものがあるからである。

【職業別人口】 大正九年國勢調査結果に依れば、總人口中農業最も多く48%を占め、工業の19%、商業の13%之に亞いで多く他は10%以下である。即ち農業27,138千人、水産業1,450千人、鑛業938千人、工業10,738千人、商業7,313千人、交通業2,549千人、公務自由業3,208千人、無職業1,498千人、家事使用人40千人、其他1,091千人にして内本業者は27,378千人(49%)、本業なき従屬者27,950千人(50%)、家事使用人635千人(1%)である。本業者の割合比較的高きは農業で52%を示して居るが

商業に於ては同割合低く 12%となつて居る。

【都鄙別人口】 大正十四年國勢調査の結果人口の多少に依て市町村を都鄙別に分けて見ると村落(人口 5,000以下)人口は 26,413 千人で 4割 4分、都會(人口 5,001以上)人口は 33,524千人で 5割 6分、右の内人口100,001以上の大都會人口は 8,741 千人で、1割 5分を占めて居る。都鄙人口の割合を第一回調査に比較するに村落の減少するに反し都會人口の増加急速である。

全國 101市中人口最も多いのは大阪市の 2,115千人で之に亞ぐは東京市の 1,996千人、名古屋市の 769千人、京都市の 680千人、神戸市の 644千人、横濱市の 406千人で、尙廣島、長崎、函館、金澤、熊本、福岡、札幌、仙臺、吳、小樽、鹿児島、岡山、八幡、新潟、堺は何れも人口 100,001以上の大都會である。

【民籍及國籍別人口】 大正九年國勢調査の内地の現在人口中 9割 9分 9厘は内地人で内地人以外のものは僅々 1厘に過ぎぬ、内地人の中北海道アイヌは 15,575人、内地に在る朝鮮人は 40,755人、臺灣人は 1,703人、樺太人は 31人、南洋人 3人、外國人 35,569人である。

外國人を洲別に見ると亞細亞洲人 22,451人、歐羅巴洲人 8,794人、北亞米利加洲人 3,984人、南亞米利加洲人 68人、其他 272人である。

人口動態

昭和五年内地に於て行はれた婚姻は 506,674 件で前年に比し 9,264 件を増加した。人口 1,000に對する割合は 7.86で前年に比して 0.04低く漸次低下の狀勢に在る。

昭和三年に於ける歐洲諸國の婚姻率を見ると人口 1,000に付白耳義 9.0 獨逸は 9.2 佛蘭西 8.3 洪牙利 9.3 奧地利 7.4 伊太利 7.0 丁抹 7.8 和蘭 7.7 英蘭威爾斯 7.5 瑞西 7.5 西班牙 7.6等である。歐洲諸國の大戦前に於ける婚姻率は概して我國より低かつたが近時我が國より甚しく高きものゝあるのは大戦後に於ける一變象と見るべきである。

道府縣中婚姻率の概して高いのは東北、北陸、四國地方に屬する諸縣で其の率の低いのは東京、大阪、京都、神奈川、兵庫等の府縣である。

同年に於ける婚姻の種類は普通の婚姻 9割 2分、入夫婚姻 2分 5厘、姪養子婚姻 5分で、之を既往に比較すると其の歩調甚だ緩慢ではあるが普通婚姻は漸増し姪養子婚姻は漸減し入夫婚姻は減少の傾向である。

婚姻者の年齢を見るに男は 25歳以上 29歳最も多く 4割を占め 20歳以上 24歳の 2割 9分之二に亞ぎ、殘餘の 3割 1分は 20歳迄及 30歳以上の者で、50歳、60歳の高齡者で婚姻する者も一萬數千ある、女は 20歳以上 24歳が最も多くて 5割餘を占め 15歳以上 19歳の 2割 1分之二に亞ぎ、殘餘の 2割 9分は 15歳迄及 25歳以上の

者で、50歳、60歳の高齡者で婚姻する者も數千ある。

昭和四年朝鮮、臺灣及關東州に於ける婚姻總數は 247,890件で内朝鮮 194,265件(内本地人 192,723件)、臺灣 46,816件(内本地人 46,048件)、關東州 6,809件(内本地人 5,815件)である。

【離婚】 昭和五年内地に於て行はれた離婚は 51,259 件で前年に比し 37件を増し、人口 1,000に對する割合は 0.80で前年より 0.01 を減じた。又婚姻千に對する離婚割合は 101 で前年に比し 2を減少した。

昭和三年に於ける歐洲諸國の離婚率を見ると人口 1,000に付英吉利 0.1、獨逸 0.6、佛蘭西 0.5、丁抹 0.7、和蘭 0.4、白耳義 0.3 等で何れも我國より遙かに低率であるが米國は 1.7の高率を示して居る。

我國の離婚は嘗て實數に於て 100,000件以上、割合に於て人口 1,000 に付 2乃至 3組の高率を示して居たが其の後逐次減少し大正九年以後は一組以下の低率を示すに至つた。

道府縣中離婚率の概して高いのは東北、北陸、中國、四國に屬する諸地方及沖繩、其の率の低いのは北海道、關東、東山、近畿に屬する諸地方であつて婚姻率の多少と離婚率の多少とは殆んど兩者相作ふて居る。

同年に於ける離婚の種類は妻が夫の家を去る場合 8割 6分、夫が妻の家を去る場合 1割 1分、戸内離婚 3分である。

離婚者の夫婦關係繼續期間は一年迄 1割 4分、二年迄 1割 5分 三年迄 1割 1分、四年迄 8分 9厘、五年迄 7分、合計 5割 6分 5厘は五年迄で殘餘の 4割 3分 5厘は五年以上の割合であるから我が國の離婚は婚姻後數年の短期内に起るものが多い。

【出生】 昭和五年内地に於ける出生は 2,085千人で前年に比し 8千人を増加し、人口 1,000 に對する割合は 32.4 で前年に比し 0.6を減少した。

昭和三年海外諸國の出生率を見ると人口千に付英吉利 17.2米國 20.6 獨逸 18.6 佛蘭西 18.2 伊太利 26.2 白耳義 18.5和蘭 23.3 瑞西 17.2等で何れも我國より低率であるがポーランド 32.6ポルトガル 30.5の如く我國に略等しく高率のものもある。

道府縣中出生率概して高いのは、東北、關東、北陸に屬する諸地方、其の率の低いのは近畿、中國、沖繩である。

出生兒の身分は公生9割4分、私生(庶子を含む)6分で之を既往に比較すると公生の割合は漸増し私生の割合は漸減の趨勢である。

出生兒の體性は女 100に付男 105.3で前年に比し 1.3増加した。昭和四年朝鮮に於ける出生總數は 730,179人(内本地人 719,135人)で臺灣は 197,967人(内本地人 190,031人)、同樺太 9,382人(内本地人 21人)で概して次第に増加の狀態に在る。

【死産】 昭和五年内地に於ける死産は 117,730人で前年に比し 759人を増加し、人口 1,000 に對する割合は 1.83 で前年に比し

0.03を減少した。

同年に於ける死産兒の身分は公生 8割、私生(庶子を含む) 2割で之を出生兒の身分に比べると甚しく公生に少く私生に多い。

死産兒の體性は女 100に付男 120.0で出生兒に比し男子の割合遙に多く、又死産兒の體性を既往に比較すると男子超過の程度は漸進の趨勢に在る。

【死亡】 昭和五年内地に於ける死亡は 1,171千人で前年に比し 99千人を減少し、人口に對する割合は 1,000人に付 18.2 で前年に比し 1.8を減少したが、同率は大正九年以降概して年と共に降下の趨勢にある。

昭和三年海外諸國の死亡率を見ると人口 1,000に付英吉利 11.9、北米合衆國 12.0、獨逸 11.6、佛蘭西 16.5、伊太利 15.8、白耳義 13.3、和蘭 9.6等で何れも我が國よりは遙に低い。

道府縣中死亡率の概して高いのは東北、北陸、四國の諸地方、其の率の低いのは東山、東海、九州に屬する諸地方である。

死亡は夏期に最も多く冬季に亞ぎ春季及秋季に少ない。

死亡者の年齢は 4歳以下に於て全死亡の 3割 5分を占め 5歳以上に於て 6割 5分を占むる、大正七年以來同九年までは青年期及壯年期の死亡常例に比し幾分高かつたが大正十年から低下して殆んど舊に復した。

死亡原因は下痢及腸炎が最も多く 1割 2分を占め之に亞ぐは腦出血腦軟化の 9分、肺炎及氣管支肺炎の 8分 6厘、肺結核の 7分 4厘、老衰の 6分 5厘、畸形及先天性弱質の 6分 4厘、腎臟炎の 5分 4厘、腦膜炎の 4分 1厘等で、尙癌及心臟の器質的疾患に依る死亡が之に亞ぐ多い。

昭和四年朝鮮に於ける死亡總數は 461,729人(内本地人 452,853人)で同臺灣は 96,870人(内本地人 93,404人)、同樺太 5,481人(内本地人 23人)となつて居る。前年に比しいづれも死亡數増加した。

【人口の自然増加】 出生死亡の差増に依る人口の自然増加は年に依り多少あるが、大體逐次増加し明治の末年より大正に入り年々 700千人以上の増加に上つたが大正五、六年少しく減少し尙七年には大に減少して 300千人以下となつた(流行性感冒の影響)然るに大正八年には増加し約 500千人となり尙遞増し續けて昭和元年には實に 940千人に達したが、爾後 800千人臺に下つた。然るに昭和五年には 914千人、人口 1,000 に付 14.2となつて再び 900千人臺に上つた。

【生命表】 生命表は行政上、企業上及學術上の用途甚だ廣い本書に掲げた同表には生存者、死亡者、死亡率、平均餘命及死力の五種の函數を掲げた、生存者とは同一期に生れたる男女各 100,000人に假定し各年齢に於ける死亡率に依り年々死亡する者を控除した殘數にして、死亡者とは假定 100,000人中一年間に於ける各年

齡の死亡者である、死亡率とは各年齢の死亡者を當該年齢生存者を以て除した生存者 1人に對する比である、平均餘命とは各年齢人口の將來生存し得べき豫定年數にして、死力とは各歳に於ける瞬間の死亡率を言ふのである。

本書に掲げた生命表は大正十年乃至同十四年の統計に基き作成せられたるものにして同表に依れば零歳に於ける死亡率は男 0.162、女 0.144にして殆ど 80歳の死亡率に匹敵し零歳より年齢進むに従ひ死亡率は低下し 8歳乃至 12歳に於て人生中最も安全なる時代に達する、此年齢を過ぐれば死亡率は次第に増加し男は 19歳、女は 21歳に於て青年期の最高率に達する、爾後死亡率は漸次低下し 30歳附近に於ては稍安定せる狀態に達するが此時代を過ぐれば死亡率は上昇を續け女に於ては 40歳附近に於て一波瀾を呈するも次第に増加する。而して零歳に於ける平均餘命は男 42.06歳 女 43.20歳で歐米諸國に比し未だ大なる遜色を示して居る。

【移民】 昭和五年に於ける移民渡航許可員數は 21,829 人で前年に比し 3,875人を減少した、此内 7割 0分は移民取扱人に依るもので渡航地別はブラジル最も多く 13,741人(6割 3分)で比律賓群島の 2,685人(1割 2分)、ソヴイェト聯邦の 1,513人、英領馬來及海峽植民地の 835人、ペルーの 831人、蘭領東印度の 558人之に亞いで多く他は 500人未滿である。渡航許可人員の府縣別は沖繩最も多く熊本、廣島、福岡、北海道、岡山が之に亞ぎ他は 1,000人未滿である、其職業別は農業最も多く 6割 4分を占めて居る、而して同年に於ける歸國移民數は 15,432人である。

【在外本邦人及在留外國人及移民】 昭和五年十月一日現在に於ける海外在留の内 地人は 634,913人で、内男 361,434人(5割 7分) 女 273,479人である。

在外本邦人を洲別に見ると最も多いのは亞細亞の 236,639人で之に亞ぐは南亞米利加の 142,276人、北亞米利加の 127,605人、太平洋洲の 124,861人、遙に降つて歐羅巴の 3,463人、阿弗利加は僅に 69人である。大正九年の調に依れば在外本邦人の職業は農業最も多く 3割を占め、商業(2割 1分)、工業(1割 7分)、交通業(1割 1分)が之に亞いで居る。

【在留外國人】 昭和五年末に於て内地に在留する外國人の數は 40,290人で前年に比し 1,461人を増加した、外國人の多數に在る地方は兵庫の 9,791人、東京の 9,121人、神奈川の 5,842人、大阪の 3,813人、長崎の 1,460人、京都の 1,295人、愛知の 1,141人等で其他は何れも 1,000人未滿で 100人臺のものが多い。

外國人の國籍は中國の 30,836人が最も多く遙に降つて英吉利の 2,162人、北米合衆國の 2,026人、露西亞の 1,666人、獨逸の 1,097人、佛蘭西の 521人が主なるもので他は概ね數 10人乃至 10數人である。

III. 農 林 及 水 産 (表70—100頁参照)

農 業

昭和四年末に於て耕作を営む農家戸数は 5,576 千戸で、前年に比し僅に減少した。農家中自作は 3割 1分、小作は 2割 7分、自作兼小作は 4割 2分で之を既往に比較すると自作農及自作兼小作農は漸増し、小作農は漸減の趨勢である。農家耕地の廣狹を見ると最も多いのは 1戸 0.5ヘクタール未満を耕すもの農家總戸数の 3割 5分を占め、0.5以上 0.99ヘクタールは 3割 4分、0.99以上 1.98ヘクタールは 2割 2分、1.98以上 4.96ヘクタールは 8分、4.96ヘクタール以上は 1分で、小規模の經營に係る農業が大部分を占めて居る。然し之を既往に比較すると耕地 0.5ヘクタール未満の小農割合は漸減し、0.5以上 0.99ヘクタールを耕すもの割合は漸増の傾向を示して居るが 1.98ヘクタール以上を耕すもの割合は此の趨勢に背馳した形勢にある。

【作付面積】(米、麥は昭和五年、他は四年)農作物中主要なものゝ作付面積を挙げると米は 3,212千ヘクタール、麥は 1,464千ヘクタールで米は前年より増加し麥は減少して居る、而して桑は 621千ヘクタール、大豆 344千ヘクタール、甘藷 250千ヘクタール、小豆 110千ヘクタール、庄大根の 100千ヘクタールで、他は 10萬ヘクタール未満である。之を既往に比較すると米、桑の作付面積は増加の趨勢を示して居るが、其他のものゝ作付面積は概して漸減して居る。

【收穫高】昭和五年に於ける米の收穫高は 120,633千石で前年に比し 13,196千石、過去五年の平均作に比すれば 10,801千石の大増收である。同年の稻作は苗代期に於ける天候概して順調なりしたため苗の生育良好に進み、移植時期後は天候不良の爲局部的に被害を蒙つたものもあつたが、八月中旬以後の天候は極めて良好で二百十日及二百二十日前後も平穩に經過し一般に出穂結實佳良なるを得た。

昭和五年の米收高は曾て見ざりし大増收であつて、從來最高の收穫高を示した大正九年の 114,022千石より多きこと 6,611千石である。而して最近十年間に於て最も少收であつた大正十年の 99,540千石に比すれば、21,093千石の差がある。米の種類は梗米 9割、糯米 8分、陸米 2分で、近時此の割合に甚しき變動を見ない。

昭和四年朝鮮に於ける米收獲高は 24,717千石、同臺灣 11,691千石にして樺太及南洋には産せず關東州に於ては80千石の收穫を示して居る。

大麥の收穫高は 12,791千石、稗麥 10,983千石、小麥は 11,049千石で、前年に比し大麥は 47千石、稗麥は 2,228千石、小麥は 358千石を減少した。最近の趨勢では麥類の收穫高には大麥に聊

か減收の傾向が見ゆる他一定した傾向を認め難い。

米麥以外の農産物は最近概して減收の状態に在る。

昭和五年米の 1アール當り收穫高は 0.38石で、前年より 0.04石を増加した。之を地方別に見ると 1アール當り 0.40石以上を收穫したのは山形、群馬、山梨、長野、静岡、愛知、近畿全部、鳥取、岡山、香川、愛媛、福岡、佐賀で、同 0.30石未満を收穫したものに北海道、鹿児島、沖縄がある。1アール當り最高の收穫高を示したものは大阪及奈良の各 0.49石である。

大麥の 1アール當り收穫は 0.34石、稗麥は 0.23石、小麥は 0.23石、燕麥は 0.35石で、前年に比し大麥、燕麥は増し、小麥は變らず、稗麥は減じた。

【農産物價額】食用の農産物及茶種、麻、藍、楮、藁、甘蔗、葉煙草等の工業原料用農産物の昭和四年見積價額は 2,501,467千圓で前年に比し 89,278千圓を減少した、農産物價額を地方別に見ると北海道の 1億圓以上、新潟、愛知、兵庫、福岡、鹿児島各 8千萬圓以上、宮城、秋田、山形、福島、茨城、栃木、埼玉、千葉、長野、静岡、三重、岡山、廣島、山口、熊本、大分の各 5千萬圓以上等が多いものに屬し東京、鳥取、高知の 2千萬圓、山梨、沖縄の 1千萬圓臺が少いものに屬する。

農産物價額中、米の價額は 1,585百萬圓、麥の價額は 271百萬圓で、農産物總額中米は 6割 3分を占め、麥は 1割 1分に當る、米産額の多いのは新潟の 81,444千圓、兵庫の 65,738千圓、福岡の 62,366千圓、北海道、秋田、山形、愛知の 5千萬圓臺である。人口 1に付農産物の價額は 39圓 70銭に當り、之を地方別に見ると滋賀の 70圓臺、秋田、富山、佐賀の各 60圓臺が多く、北海道、宮城、山形、茨城、栃木、千葉、新潟、福井、奈良、岡山、香川、熊本、大分、宮崎、鹿児島は各 50圓臺で之に亞ぎ其の最も少いのは東京の 5圓で大阪の 14圓亦少く神奈川、京都は 20圓臺、群馬、山梨、長野、静岡、愛知、兵庫、和歌山、廣島、福岡、長崎、沖縄は各 30圓臺で少き地方である。

【養蠶】昭和五年に於ける養蠶戸数は 2,216千戸で、前年に比し多少減少した。左の内容蠶を飼育したもの 2,055千戸、夏秋蠶を飼育したるもの 2,019千戸で、前年に比し前者は増、後者は減少した。

蠶種掃立枚数は春蠶 8,438千枚、夏秋蠶 10,089千枚、合計 18,527千枚で前年に比し 626千枚を減少した。其の産繭高は春蠶 210,387千疋、夏秋蠶 188,851千疋、合計 399,238千疋である、之を前年に比べると 16,387千疋を増加した。

昭和五年に於ける産繭價額は値下りの爲 304,213千圓で前年に比し 350,787千圓を減少した。産繭價額を過去十年間比較すると

著しい變動があつて大正二年の歐洲大戰前は 188,000千圓であつたが三年四年と遞下して 150,000千圓となつた、五年には頗る増加して 273,000千圓となり尙八年まで遞増して 771,000千圓を示すに至つたが戦後の九年には 366,000千圓に激落した、然るに十年からは逐次挽回して大正十二年には 660,000千圓に上り十三年には減少を見たが又十四年には 800,000千圓を突破し昭和元年には再び 600,000千圓臺昭和二年には 400,000千圓臺に下り、昭和三年には聊々恢復して 500,000千圓臺、昭和四年には更に増加して 600,000千圓臺に上つたが、昭和五年には不景氣の影響を受けて 300,000千圓臺に急落した。

掃立枚數に依て養蠶事業の地方分布を見ると、長野の 2,427千枚が最も多く、全國總枚數の 1割 3分弱を占めて居る、之に亞ぐは群馬の 1,369千枚、埼玉の 1,191千枚、愛知の 1,142千枚、山梨の 850千枚、岐阜の 813千枚、茨城の 711千枚、福島の 706千枚、三重の 581千枚、愛媛の 512千枚等で其の産繭高は長野 33,271千圓、群馬 17,943千圓、埼玉 13,436千圓、愛知 18,150千圓、岐阜 14,181千圓、山梨 12,819千圓、福島 10,415千圓、三重 11,992千圓、愛媛 10,007千圓である。

養蠶戸數一に付掃立枚數の多少に依て養蠶事業の規模を見ると、群馬の 16.7枚最も多く長野の 15.1枚、東京及山梨 14枚、埼玉、千葉、神奈川、愛知の各 11枚臺、茨城の 10枚臺、岐阜、京都、徳島の 9枚臺之に亞ぎ他は何れも 9枚未満である。

家畜及家禽

昭和四年末に於ける牛は 1,488千頭で、前年に比し 4千頭を増加した。牝牛の別を見ると昭和四年には牝 100に付牝 271の割合になつて居る。

昭和四年末に於ける馬は 1,490千頭で前年に比し 4千頭を減少した。馬の現在數は數年前迄毎年 1,500千頭内外を上下し増減の趨勢は明でなかつたが大正十年から逐年増加し十三年に至つて又減少を示し爾來逐年減少し來つて居る。

昭和四年末に於ける山羊は 215,439頭で前年に比し 7,113頭を増加した。

昭和四年末に於ける綿羊は 20,728頭で前年に比し 1,233頭を増加した。綿羊頭數は十數年以前に於ては増減常なかつたが、近時に至り綿羊繁殖に關する施設の結果其増加頗る顯著となり、前項山羊と共に各種の家畜中増加の歩調最も急速である。

昭和四年末に於ける豚は 706,151頭で前年に比し 57,487頭を減少した、既往に比較すると逐年増加の歩調であつて、十年は約 30,000頭を減少したが十一年は 12,000餘頭を増加し十二年以降は増加が著しく十三年の如きは 75,000餘頭増加したが、十四年以降減少を續け昭和二年以降は増加をみて居つたが、昭和四年には減少した。

昭和四年六月末に於ける鶏は 48,258千羽で前年に比べると 2,154千羽を増加し毎年増加を續けて居る。

昭和四年六月末に於ける鶯は 537,088羽で前年に比べると 3,270羽を増加して居る。

【家畜及家禽の地方別】昭和四年末に於て牛は本州の中部以西就中中國、四國及九州に多く、中部以北に於ては北海道、青森、岩手、茨城、千葉、東京、神奈川、新潟に多い。

馬は北海道、東北の諸地方、茨城、栃木、群馬、千葉、新潟、長野、福岡、熊本、宮崎、鹿児島に多くて本州中部以西及四國には一般に少い。

山羊は沖縄が 6割 6分を占め、鹿児島之に亞ぎ尙長野、高知、長崎に多い。

綿羊は北海道、岩手、宮城、福島、長崎、鹿児島に多い、外に全頭數の 2割 1分官有のものがある。

豚は沖縄に最も多くて全數の 1割 7分を占め、鹿児島、静岡及關東地方が之に亞いで多い。

鶏は愛知の 4,884千羽最も多く之に亞ぐは千葉の 2,548千羽、鹿児島 2,426千羽、茨城の 1,808千羽、北海道の 1,805千羽、福岡の 1,752千羽、兵庫の 1,670千羽、静岡の 1,598千羽等である。

【家畜傳染病】昭和四年中家畜傳染病で最も發病頭數の多いのは豚虎列刺の 3,207、之に亞ぐは豚丹毒の 758、牛の傳染性流産 273、牛炭疽の 241等である。

【屠畜】昭和四年末に於ける全國屠場數は 622箇所ある。食用屠殺は成牛 300,907頭、犢 28,007頭、馬 77,224頭、豚 862,560頭で馬及豚は前年より増加し他は減少してゐる。尙既往に比較すると牛馬は毎年多少の増減があり豚は逐年著しい歩調で増加して來たが、十一年及十二年は減少し十三年十四年は著しく増加した、犢は十一年に甚しく増加したのに反し近年は稍減少の傾向である。

屠殺獸の價額は成牛 50,695千圓、犢 938千圓、馬 5,764千圓、豚 27,141千圓、合計 84,537千圓で前年に比し 88千圓を増加した。

【牛乳】昭和四年中の搾乳高は 1,627千石で前年に比し 146千石を増加した。人口に對する搾乳高は一人に付 2.6立に當り、前年に比し 0.2立を増加した。

【乳肉製品】昭和四年中の乳製品の總價額は 13,821千圓で前年に比し 760千圓を増加した。製品の主なるものは、煉乳 7,864千圓、バター 2,482千圓、人造バター 581千圓である。總價額を地方別に見ると、最も多いのは北海道の 6,916千圓、之に亞ぐは千葉の 2,191千圓、静岡の 1,496千圓、神奈川の 984千圓等である。

肉製品の總價額は 1,852千圓で前年に比し 247千圓を増加した、製品の主なるものはハム 1,010千圓、ベーコン 255千圓等である。總價額を地方別に見ると最も多いのは神奈川の 1,423千圓で全産額の 7割 7分を占め之に亞ぐものに長崎の 124千圓、東京の 86千圓が在る。

【果實】 昭和四年に於ける主要果實の産額は梅 781千疋、桃 48,291千疋、梨 149,251千疋、生柿 241,026千疋、乾柿 11,313千疋、苹果 93,895千疋、葡萄 48,169千疋、柑橘類 339,110千疋で前年に比し桃、梨、柑橘等は減少し他は何れも増加した。

果實の産額を地方別に見ると梅は埼玉、鹿児島、和歌山、茨城、千葉、静岡、福島に多く、桃は岡山、神奈川特に多く、大阪、広島、新潟、福島、奈良に多い。梨は静岡、愛媛、新潟、福島、茨城、岡山、千葉、埼玉に、柿は福島、長野、新潟、広島、京都、福岡に多い。苹果は青森特に多く全産額の 7割以上を占め北海道が之に亞ぐ多い。葡萄は大阪、山梨特に多く岡山、広島、長野にも多い。柑橘類は和歌山最も多く、静岡、愛媛、広島等亦多い地方である。

山林及狩獵

毎三年定期調査に依る昭和二年末に於ける全國の立木地面積は 19,514 千ヘクタールで總面積の 3割 5分を占めて居る、之を大正十三年末の面積に比べると 122千ヘクタールを増加した。

無立木地は 3,195千ヘクタール、總面積の 6分で前記立木地面積と共に國土の過半は林野である。之を各國の林野面積に比較すると瑞典は 5割 9分(1920年)で我國と伯仲の間に在るが獨逸は 2割 6分(1913年)、佛蘭西は 1割 9分(1919年)、白耳義は 1割 8分(1910年)、伊太利は 1割 6分(1919年)、北米合衆國は 1割(1910年)、和蘭は 8分(1922年)、英吉利は 4分(1917年)で我が國より遙かに少ない。

立木地を所有者別に見ると私有 3割 9分、國有 3割 8分、公有 1割 6分、御料 6分、社寺有 6厘で無立木地は私有 4割 9分、公有 3割 6分、國有 9分、御料 5分、社寺有 4厘で立木地、無立木地共從來私有増加し他は概して減少するの趨勢であつたが、昭和二年には之に反する傾向が示されて居る。

立木地面積を地方別に見ると北海道の 5,379千ヘクタールが最も廣く遙に降つて福島の 952千ヘクタール、岩手の 853千ヘクタール、長野の 725千ヘクタール、秋田の 696千ヘクタール、岐阜の 664千ヘクタール、山形の 554千ヘクタール、青森の 543千ヘクタール等相強ぎ其の狭き地方は大阪の 31千ヘクタール、東京の 65千ヘクタール、佐賀の 73千ヘクタール、香川の 88千ヘクタール等である。各地方原野の廣狭も大體森林と相似て居る。

【森林植栽】 昭和四年中に於ける森林新植面積は 110,915ヘクタールで、前年に比し 1,701ヘクタールを減少した、植栽面積を

地方別に見ると北海道の 9,202ヘクタールが最も廣く之に亞ぐは長野の 5,828ヘクタールで、静岡、秋田、熊本の各 4,000ヘクタール、岩手、福島、愛媛、大分、鹿児島各 3,000ヘクタール臺である。

森林の補植は 61,459 千本で前年に比し 1,426 千本を減少した。

【天然造林】 昭和四年中に於ける天然造林は 222,966ヘクタールで前年に比し 15,212ヘクタールを減少したが之を八、九年前に比較すると其の 2分の 1に及ぶに過ぎず、前記新植面積の不振と共に天然造林事業も近時甚だ不振である。天然造林の主なる地方は北海道の 43,644ヘクタール、静岡の 15,084ヘクタール、岩手の 9,574ヘクタール福島の 8,552ヘクタール等である。

【林産物】 昭和四年中に於ける用材の産額は 103,462千圓で前年に比し 15,439千圓を減少した、薪炭材は 62,308千圓、竹材は 4,918千圓で前年に比し何れも減少を示して居る。

林産物價額を地方別に見ると用材は北海道の 16,576千圓、長野の 6,025千圓が最大で之に亞ぐは秋田の 5,088千圓、奈良、宮崎の 4,060千圓臺、岐阜、静岡、三重の 3,000千圓臺等が主なるものである。薪炭材は北海道の 3,900千圓、岩手、福島、岐阜、兵庫、広島、山口、高知、宮崎の各 2,000千圓臺が主なるものである。竹材は京都の 358千圓が最も多く之に亞ぐは山口の 352千圓、大分の 342千圓、福岡の 320千圓、鹿児島各 309千圓等で他は 200千圓臺及び同未満である。

【狩獵】 昭和五年中に於ける狩獵免狀下附数は 117,394で前年に比し 1,587を増加した。免狀には銃器を用ひない甲種と銃器を用ひる乙種との別があり其の割合前者は 1割 5分後者は 8割 5分で従前に比し甲種の割合少しく増加をみた。

【保安林】 昭和四年末に於ける全國の保安林は 386,317 箇所、其の面積 2,045千ヘクタールで、前年に比し 5,004箇所、158千ヘクタールを増加した。保安林は國有に最も廣くして 4割 4分を占め、公有は 3割 8分、私有は 1割 7分で御料及社寺有には甚だ少い。

保安林の目的は水源涵養と土砂扞止とが最も多く此の兩者で保安林全面積の 9割 2分を占め其の他は防風、魚附、風致、水害防備等が主なるものである。

保安林を地方別に見ると北海道の 686千ヘクタールが最も廣く新潟の 156千ヘクタール、岐阜の 154千ヘクタール、山形の 138千ヘクタール之に亞ぎ尙 50千ヘクタール以上ある地方は秋田、福島、富山、山梨、長野、岡山等である。

【水産業】 昭和四年末に於ける全國の漁業者は 1,491千人で總人口千に付 23.7 に當り之を前年に比べると實數に於て約 8千人を減少した。右の内漁業を本業とする

者は 5割 2分を占め之を副業とする者より僅に多くなつて居る。

漁業者を地方別に見ると北海道の 196千人が最も多く、長崎の 88千人、千葉の 64千人、三重の 51千人、青森、静岡、島根、愛媛、高知、熊本、鹿児島各 40千人臺之に亞ぎ、尙 30千人臺には岩手、宮城、東京、神奈川、石川、愛知、兵庫、広島、大分、20千人臺には茨城、新潟、富山、長野、滋賀、和歌山、香川、福岡等がある。而して北海道は漁業を本業とする者は副業とする者より遙に多いが他には兩者同等又は副業とする者が多いものもある。

【漁船數】 昭和四年末に於ける全國の漁船數は 359,545隻で前年に比し 581隻を減少し、逐年減少の趨勢が現はれて居る。漁船の種別を見ると動力を有せざるもの 9割 1分を占め、動力を有するものは僅に 9分である、然し前者は逐次減少するに反し後者は逐次増加しつつある。動力の種類は發動機を備ふるもの大部分を占め蒸氣機關を備ふるものは一部分に過ぎない。

地方別に漁船の多少を見ると北海道の 58,554隻最も多く長崎の 23,873 隻之に亞ぎ他に 20,000 隻以上を有する地方はない。10,000隻臺を有するは青森、千葉、三重、兵庫、広島、山口、愛媛で其他の地方は何れも 10,000隻未満で、奈良には1隻もなく、山梨 12隻で、埼玉、栃木、群馬、長野、岐阜の海に面しない地方は各數百隻である。

【漁獲物】 昭和四年中に於ける内地沿岸漁獲物の見積總價額は 205,940千圓で漁業者一人に付 138圓に當り、漁獲物總價額を前年に比べると、3,324千圓を減少した。

漁獲物を大別すると魚類 122,617千圓(60%)、貝類 3,879千圓(2%)、藻類 7,995千圓(4%)、其他 71,448千圓(34%)で前年に比し藻類が減じ魚類が増したる他其の割合に大差ない。魚類中最も多いのは鱈の 26,234千圓で、鯛の 12,720千圓、鰯の 10,611千圓、鱈の 10,058千圓、鮭 7,993千圓、鯖 7,815千圓之に亞ぎ 5,000千圓以上 7,000千圓未満は、鮮及醃、鱈である、魚類以外のものでは烏賊及柔魚の 12,311千圓、鰻の 8,545千圓が主なるもので其の他は何れも 5,000千圓未満である。

各種の價額を前年に比べると何れも減少して居る。

漁獲物總價額を地方別に見ると北海道の 45,450千圓首位を占め長崎の 8,526千圓、山口の 8,419千圓、静岡の 8,419千圓、三重の 8,373千圓、愛知、高知の 7,000千圓臺之に亞ぎ尙 5,000千圓以上の地方に青森、千葉、神奈川、兵庫、和歌山、愛媛がある。

同年朝鮮に於ける漁獲物總額は 65,338千圓、同臺灣 14,446千圓、同關東州 4,682千圓、同樺太 540千圓、南洋 276千圓である。

【水産製造物】 昭和四年中に於ける水産製造物の總價額は 18

7,498千圓で前年に比し 3,554千圓を増加した。

水産製造物中重要なるものは鯨節の 18,565千圓、搾粕肥料の 14,130千圓、乾海苔の 13,967千圓、煮乾真鰻の 12,264千圓、素乾鰻の 10,559千圓、鹽乾真鰻の 5,115千圓等で其の他は何れも 5,000千圓未満である。

水産製造物總價額を地方別に見ると北海道の 55,431千圓最も多く之に亞ぐは静岡の 14,246千圓、東京の 11,654千圓等である。同年朝鮮に於ける水産製造物價額は 44,816千圓、同臺灣2,775千圓、樺太 20,341千圓、關東州 1,334千圓、南洋 220 千圓である。

【遠洋漁業】 昭和四年に於ける遠洋漁業に依る漁獲物價額は内地沖合 87,948千圓で前年に比し 7,076千圓を増加した。露領極東州に於ける鹽蔵及罐詰生産高は 32,198千圓で前年に比し14,184千圓を減じたが最近漸増の傾向に在る。又トロール漁業は歐洲大戰當時は一時殆んど廢絶せんとしたるが其の後挽回せられ近年は年々漁獲高千萬圓前後を擧げて居る。

【水産養殖】 昭和四年末に於ける水産養殖場は 143,011箇所其の面積は 505,729千平方米で之を前年に比べると 67,165千平方米を減少した。收穫物の價額は 22,316千圓で前年に比し 1,250千圓を減少した。水産養殖は紫菜の 9,129千圓、鯉の 4,252千圓、鰻の 3,572千圓、牡蠣及鯛の各 1,000千圓臺等が主なるものである。

【製鹽】 昭和四年度末に於ける製鹽業者は 3,727人、従業者 41,116人で、製鹽面積は 4,888ヘクタールである、之を前年に比べると製造者 1,288人、製鹽面積 820ヘクタールを減少した。尙最近十年間に於て製造者及従業者數は逐次減少の趨勢に在る。

昭和四年度中に於ける製鹽高は 644,151千疋で前年に比し6,263千疋の増加を示した。

製鹽高を人口に對比すると大正三年度に於ては一人に付11.4疋産出したが爾後逐次減少し七年度には 7.3疋となり其後多少の消長を以て経過し十三年度は 10.8疋に上つた。十四年度に於ては 11.2疋を産出し昭和四年度に於ては 10.2疋を産してゐる。製鹽高を府縣別に見ると最も多いのは香川の 177,430千疋、之に亞ぐ山口の 99,265千疋、兵庫の 85,423千疋等である。朝鮮に於ける製鹽高は 185,783千疋、臺灣は 164,358千疋、關東州は 248,904千疋である。

【産業及同業組合】 昭和四年末に於ける各種産業組合は 14,047で前年に比し 124を減じた。右の中主なるものは信用利用販賣購買組合の 3,593、信用販賣購買組合の 3,036、信用組合の 2,547、信用購買組合の 2,145で他は數百又は數十程度のもが多い。

昭和三年末に於ける産業組合を其の目的別に見て組合数を挙げると信用組合は 11,578組合員数 3,637千人、販賣組合は 7,515組合員数 2,547千人、購買組合は 9,559組合員数 2,928千人、利用組合は 4,761、組合員数 1,756千人で一組合平均組合員数信用は314人、販賣は 339人、購買は 306人、利用は 369人で何れも前年より増加した。

昭和四年末に於ける産業組合の組織は有限責任 9割、無限責任 8分、保証責任 2分で、之を既往に比較すると割合上有限は漸増し、無限は漸減し、保証は甚しい變動を見ない。

【同業組合】 昭和四年末に於ける重要物産同業組合数は 1,586で前年に比し11増加した。

IV. 鑛業及工業 (表101—120頁参照)

鑛業

昭和四年末に於ける全国の稼業鑛區数は 1,374 其の面積は 22,594,918アールで前年に比し 198區域 491,777アールを増加した、休業鑛區は前年に比し 331區 1,599,166アールを減少した。鑛區及其の面積は大正九年以來前年迄引續き減少し、同十二年以來此の形勢は稍挽回の傾向にある。

稼業砂鑛區は河床21箇所、其の延長78軒、河床以外の鑛區101、其の面積 210,273アールで前年に比し鑛區河床延長共増加した。休業鑛區は河床 679箇所、其の延長 2,968軒河川以外の鑛區 1,543其の面積 5,619,752アールで前年に比し河床は減少し其の他は増加して居る。

稼業鑛區を鑛種別に見ると石炭の 12,905,972アール 最も廣く遙に降て石油の 1,475,289アール、金銀銅の 863,266アール、金銀の 835,885アール、金銀銅鉛亜鉛硫化鐵の 825,709アール之に亞ぎ尙 30 萬アール以上を占むるものには金銀銅鉛亜鉛、銀銅、銅、銅硫化鐵、亞炭がある。砂鑛に在ては砂金砂白金及砂鐵が主なるものである。

植民地に於ける稼業鑛區数は昭和四年末朝鮮の 365を最大とし臺灣の 203之に亞ぎ遙に降りて樺太は 54にして關東州は 24である。而して其面積は朝鮮 10,258,992アール、臺灣 2,706,057アール、樺太 1,935,365アール、關東州 1,391,338アールである。休業鑛區及面積は朝鮮 1,630 (39,503,369アール) 臺灣 477 (3,321,577アール) 關東州32 (126,797アール) である。鑛種は朝鮮に於ては金銀鑛最も多く臺灣、樺太及關東州に於ては石炭が最も多い状態にある。

【鑛産額】 昭和四年中に於ける各種鑛産物の價額は 384,535千圓で前年に比し 6,204千圓を増加した。鑛産物中其の價額の最も多いのは石炭の 245,762千圓で全鑛産額の 6割 4分を占め、之に亞ぐは銅の 69,400千圓、金の 14,765千圓、石油(原油)の13,707

【同業組合聯合會】 昭和四年末に於ける同業組合聯合會は77で前年に比し 1を減少した。

【漁業組合】 昭和三年末に於ける漁業組合は 3,870、其の組合員 509,863人で前年に比し組合89、人員 38,901人を増加した。

【水産組合】 昭和四年末に於ける水産組合数は 44組合員 46,090人、前年に比し組合数 2、組合員 6,390人を減じた。水産組合聯合會は 1、加入組合数 3で前年に比し變りない。

【森林組合】 昭和四年末に於ける森林組合数は 1,041、其の組合員数 140,681人で前年に比し組合数 157、組合員数 24,955人を増加した。

千圓、鐵の 10,024千圓、硫化鐵鑛の 7,898千圓、亞鉛の 7,198千圓、銀の 6,139千圓、硫黃の 3,638千圓等で是等を前年に比較すると、石炭、銀、硫黃を除く他は増加を示して居る。

鑛産額を地方別に見ると金は大分の 4,845千圓最も多く茨城の 2,907千圓、北海道の 1,570千圓、鹿兒島の 1,562千圓、愛媛の 1,094千圓、香川の 1,057千圓が多く他は 1百萬圓未滿である。銀は大分の 1,181千圓最も多く、香川、茨城の各 800千圓臺、秋田、愛媛の 700千圓臺多く、銅は秋田の 15,432千圓最も多く、愛媛、栃木、大分の各 1千萬圓臺、茨城の 7百萬圓臺等多く、亞鉛は福岡に 5,647千圓を産して全額の 7割 8分を占め、鐵は岩手の 7,864千圓が多く、全産額の 7割 8分を占め、硫化鐵鑛は岡山の 2,782千圓、愛媛の 1,908千圓特に多く、石炭は福岡の134,870千圓特に多くして全額の 5割 5分を占め遙に降て北海道の 49,739千圓、長崎の 19,166千圓、福岡の 15,121千圓、佐賀の 11,129千圓が亞で多く、石油は新潟に 9,186千圓、秋田に 3,820千圓を産して全額の 9割 5分を占め、硫黃は北海道に 1,211千圓、岩手 1,173千圓を産する。

植民地及關東州に於ける鑛産物の總額は昭和四年に於て關東州の 74,597千圓を最高とし朝鮮の 26,488千圓、臺灣の 15,091千圓が之に亞いで居る。南洋には 1,415千圓を産した。而して朝鮮、臺灣、樺太、關東州共に石炭の産額が最も多く、6,321千圓、10,065千圓、636千圓、72,905千圓を夫々示して居る。南洋には鑛鑛の 1,415千圓を産し、他に鑛山物なし。

【土石類】 昭和四年中に採取した石材額は 11,542千圓、同土石及鑛水は 32,827千圓である。

地方別に見ると石材は福井の 973千圓、茨城の 872千圓、香川の 765千圓、廣島、岡山の 600千圓臺が多く、他は 500千圓未滿である。土石及鑛水は東京の 3,342千圓最も多く、兵庫、福岡の 2,000千圓臺之に亞ぎ、尙 1,000千圓臺のものに北海道、埼玉、千

葉、神奈川、岐阜、愛知、岡山、山口、熊本がある。

工業

昭和四年末に於ける各種製造場中其數最も多きは製茶業の 1,137千戸にして、遙に降りて之に亞ぐは織物業の 174千戸で他は何れも 100千戸未滿である、而して 100千戸未滿に於ては麥粉經木麻眞田製造業の 86千戸、壘表製造業の 81千戸等多く刷子及刷毛製造業の 763、製革の 741、酒精及酒精含有飲料製造業の 238 等は其の少なき部類に屬する。

各種工業製造場につき其従業職工数をみるに總數に於て最も多きは綿織物の 256,940人にして絹織物及絹綿交織物の 215,025人、木製品の 196,405人、壘表の 119,844人等之に亞ぎ他は概して10萬人未滿である。而して其の特に少なきは精製樟腦の 298人である。尙又此等各種工業中男工女工の割合につきて觀るに男工が女工に比して特に多きものは皮革製品の總數中 9割 5分、漆器業の 8割 4分、粗製樟腦製造業の 8割 7分、瓦製造業の 8割 2分等にして之に對して女工の數特に大なるは織物業にして就中麻織及麻交織物業の如きは總數中女工の占むる割合は 9割 5分に及んで居る。織物業以外に於て女工割合高きものには莫大小、壘表、菓莖及花莖、帽子、籐製品、精製樟腦の各製造業等がある。

【工産物】 昭和四年に於ける工産額の大宗は織物の 1,459,643千圓で、之に亞ぐは蠶絲の 881,377千圓、紡績の 776,279千圓、煙草の 279,804千圓、肥料の 210,757千圓、紙の 190,635千圓、小麥粉の 150,622千圓、工業用藥品の 116,269千圓、染物の104,255千圓、醬油及溜の 82,054千圓、陶磁器の 74,767千圓、莫大小の 65,979千圓、人造絹絲の 45,393千圓、硝子製品の 44,670千圓、植物油の 44,348千圓等にして尙 3千萬圓臺のものに瓦、石鹼、漆器、製茶、1千萬圓臺のものに壘表、罐詰、帽子、澱粉、味噌等がある。

上記の他酒類及砂糖は多數産するも價額の調査を闕く。

重要工産物に付其の地方別を見ると、織物は愛知の 261,293千圓、大阪の 213,362千圓、京都の 105,261千圓が特に多く、他は 100百萬圓未滿にして 5千萬圓以上の産額を有するものには群馬、東京、石川、福井、静岡、兵庫がある。蠶絲は長野の 223,522千圓特に多く愛知の 84,116千圓、群馬の 59,665千圓、埼玉の 40,375千圓、山梨の 40,110千圓、岐阜の 31,111千圓、山形、福島、三重、京都、愛媛の各 2千萬圓臺が之に亞いで多い。紡績は大阪の 147,656千圓、愛知の 83,159千圓、兵庫の 74,439千圓、三重の 49,137千圓、東京の 43,969千圓、岡山の 43,398千圓、静岡の 36,241千圓等が其の多きものである。紙は東京、北海道、静岡、兵庫、大阪、熊本に多く産し何れも産額 1千萬圓を超えて居る。肥料は東京、大阪、兵庫、福岡、新潟、熊本、静岡に多く、何れも産額 1千萬圓以上である。工業藥品は東京の 25百萬

圓、大阪の 21百萬圓が特に多く兩者で總産額の 4割を占めて居る。人造絹絲は最近其産額の増加著しく滋賀の 16,622千圓、山口の 13,613千圓、廣島の 5,114千圓が主なるものである。

植民地に於ける工業生産品をみるに朝鮮に於ては煙草の 33,898千圓、生糸及玉絲の 15,374千圓、織物の 9,332千圓 等が主なるもので、臺灣に於ては製茶 16,356千圓、煙草 15,276千圓、硝子6,812千圓が主なるもので、又樺太の紙 30,580千圓、關東州の植物油 17,828千圓は其大なるものに屬する。

【特許及登録】 昭和四年に於ける發明特許は出願 14,296、其の特許数 5,090、實用新案登録は出願 33,111 其の登録数 12,060、意匠登録は出願 9,643、其の登録 5,303、商標登録は出願 23,022、其の登録 10,131で前年に比し實用新案登録の場合を除き特許登録数共増加を示した。

電氣

昭和四年末に於ける電氣事業数は 6,317で前年に比し 177を増加した。右の中電氣供給及電氣鐵道事業は 775で更に細別すると電氣供給 556、電氣鐵道 142、電氣鐵道電氣供給兼營 77である。之を前年に比べると電氣供給 3を減じ電氣鐵道14を増加し、電氣鐵道及供給兼營は變りない。

【發電力】 昭和四年末に於ける發電力は 419萬キロワットで前年に比し 37 萬キロワットを増加し 10 年以前に比べると約 3 倍し其の發達甚だ急速である。發電は水力に依るもの 6割 2分、火力に依るもの 3割 8分で前年に比し水力の割合は増加した。

【電氣需要】 昭和四年末に於ける電燈需用戸数は 1,117萬戸其箇數は 3,589萬箇、燭光數 70,463萬燭光で前年に比し 32萬戸 198萬箇、4,829萬燭光を増加した。需用戸數 1に付電燈箇數は 3.2箇其の燭光 63燭光に當り前年に比し 2燭光を増加した。

人口に對する電燈箇數は 10人に付 5.7燈で、1人に付 11.2燭光に當り前年に比べると 10人に付 0.2燈、1人に付 0.6燭光を増加した。

面積に對する電燈燭光は一方軒に付 1,843 燭光で前年に比し 124燭光を増加した。

昭和四年末に於ける電動機裝置數は 46萬、其の電氣力 248 萬キロワットで前年に比べると裝置數 4 萬、電氣力 21萬キロワットを増加した。

電燈需用戸數の最も多いのは東京の 1,061千戸で之に亞ぐは大阪の 738千戸、兵庫の 627千戸、愛知の 512千戸、福岡の 420千戸、廣島の 355千戸等にして尙 30萬戸以上は神奈川、新潟、長野、静岡、20萬戸以上は北海道、福島、茨城、埼玉、千葉、岐阜、三重、京都、岡山、山口、愛媛、熊本、鹿兒島である。而して10萬戸未滿に鳥取及沖繩の兩縣がある。

電燈燭光と人口との割合は 1人に付東京の27燭光最も多く京都の 22燭光、大阪の 20燭光、神奈川の 16燭光、愛知の 15燭光、兵庫の 14燭光、福岡、長野の 11燭光、山梨の 10燭光之に亞ぎ他は何れも 10燭光未滿である。而して其の最も少きは沖繩の0.67燭光である。

電力装置の最も多いのは大阪の 70,316 之に亞ぐのは東京の 69,530、兵庫の 28,014、愛知の 25,720、福岡の 21,569 等で他は 20,000未滿である。

瓦斯

昭和四年度に於ける瓦斯供給事業者は 81 其の拂込資本金 350,174千圓で前年に比し事業者數 3、資本金 31,376千圓を増加した。

瓦斯取付口數は燈用及熱用を合して 306萬にして前年に比し 43萬を増加した。

瓦斯動力供給は 6,023馬力で前年に比し 139馬力を減じた、尙既往に比較すると逐次減少の趨勢に在る。

昭和四年度中に於ける供給瓦斯量は一年間 65,384 萬立方メートルで前年に比し 7,534萬立方メートルを増加した。

供給量を地方別に見ると最も多いのは東京の 318,356千立方メートル、之に亞ぐは大阪の 112,508千立方メートル、兵庫の 46,350千立方メートル、愛知の 39,161千立方メートル、京都の 33,501千立方メートル等である。

V. 商業及金融 (表121—164頁参照)

商業

昭和四年末に於ける全国の商工會議所數は89で前年に比し12を増し、議員數は 3,040人、特別議員は 503人で前年に比し前者 735 人後者 99人を増加し選舉權者は 165,560人で前年に比し 34,005人を増加した。一箇年の經費は 2,761千圓で前年に比し 77千圓を増加し、平均 1會議所に付 31,022圓に當つて居る、一箇年經費を地方別にみれば東京は318千圓、愛知 255千圓、大阪 219千圓、福岡 216千圓、北海道 207千圓、兵庫 182千圓、京都 109千圓、其の他の府縣は10萬圓未滿である。

47府縣中商業會議所を設けないのは千葉、奈良、沖繩の 3縣で他は1若くは2を有するもの多く北海道には6、愛知には5を有する。

【取引所】 昭和四年末に於ける株式組織の取引所數は 34 で前年と變りなく取引員は 923人、拂込資本金は 98,203千圓である。一年間の収入は 15,178千圓で其の 6割 5分は賣買手数料、支出は 7,227千圓で其の 2割は取引所税である。外に會員組織の取引がある。

地方別に拂込資本金を見ると東京の 38,875千圓、大阪の 37,000千圓特に多く之に亞ぐは神奈川の 6,500千圓、愛知 4,875千圓、京都 3,500千圓、兵庫 3,225千圓、他は數10萬圓乃至10數萬圓のものが多い。

度量衡

昭和四年度中に於ける度量衡器の檢定箇數は度器 8,385,421 量器 1,137,280、瓦斯メートル 488,034、水量メートル 194,419、衡器 2,456,036で前年に比し量器及水量メートルは増加したも他は何れも減少した。

檢定不合格率は各種百中度器甲種檢定 2.2、同乙種 1.7、量器 1.8 及 3.2、瓦斯メートル 4.4、水量メートル 4.2、衡器 2.1及 1.5 で前年度に比し甲種檢定に於ては瓦斯メートル及水量メートル、同乙種に於ては度器が夫々増したも他は減じた。

昭和四年度中に於ける度量衡器需用數は度器 6,656,390、量器 908,650、衡器 1,602,506で前年に比し一般に増加を示した。

昭和四年度中に於ける計量器檢定箇數は 2,737千箇で前年に比し 304千箇を増加した。同檢定箇數中不合格割合は乳脂計を除く他は良好で其割合最低は溫度計の 1.2同最高は浮秤の 7.6となつて居る。

植民地に於ける同年度中の度量衡器需要の状態をみるに朝鮮に於ては度器 250,244、量器 98,199、衡器 29,045、臺灣に於ては度器 173,329、量器 29,030、衡器 39,242、樺太に於ては、度器 44,438、量器 4,332、衡器 3,161で人口1,000に付ての割合は樺太が最も多い。

昭和四年に於ける株式清算取引所數は 11、賣買高は 11,029萬株、其の受渡高 18,285 千株で賣買高の 1割 7分弱に當る。米取引所數は 28、賣買高は 324,978千疋、其の受渡高 1,758 千疋で賣買高の 5厘に當る。生絲取引所數は 2、賣買高 11,958千疋、其の受渡高 323千疋で賣買高の 3分弱に當る。

株式取引所で賣買高の多いのは東京株式の 4,635萬株、大阪株式の 3,137萬株が特に多く遙に降つて名古屋株式の 1,300萬株、京都の 628萬株、神戸の 575萬株等である、米は大阪の堂島米穀の 113,663千疋、東京米穀商品の 71,706千疋、京都の 28,628千疋、名古屋の 23,355千疋、神戸の 22,392千疋等である。

昭和四年に於ける米穀取引所清算取引先物平均相場は 1.8039 疋 (1石)に付 28圓 1錢で前年に比し 2圓 6錢を下落した。之を月別に見ると 1月から騰貴して、6月には 30圓臺に達したが 7月に 27圓臺に下落し 10月及 11月に上騰して 28圓臺に騰つたが 12月には 27圓 36錢となつた。

【卸賣物價】 昭和五年中の東京市卸賣物價を食料、衣類、建築材料及燃料其他 42品に就いて前年と對比するに騰貴したものは豚肉、羅紗、杉板の 3品、低落したものは、31品の多きに及んで居る。大阪、神戸、京都、名古屋及横濱の各市に於ても之と同様の状態を示して居る。

會社

昭和四年末に於ける全国の會社數は 46,692 其の拂込資本金及出資額 138億圓で前年に比し

會社數 4,990を増し拂込資本金及出資額 6億圓を増加した。會社の組織は株式 4割 1分合資 4割 4分合名 1割 6分で前年に比し株式の割合少しく減じ合資の割合増加したが、既往に比較すると合資の増加が最も著しく合名之に亞ぎ株式の増加は最も少い。平均 1 會社の拂込資本金は株式 619千圓、合資 43千圓、合名 156 千圓で前年に比し株式及合資は 6千圓を増加し合名は 17千圓を減少した。

會社を資本金高別に見ると株式では 10萬圓以上 50萬圓の 3割 6分最も多く 5萬圓未滿の 2割 5分之二に亞ぎ 5萬圓以上10萬圓の 1割 7分、50萬圓以上 100萬圓、100萬圓以上 500萬圓は各 1割見當、500萬圓以上は4分である。之を既往に比較すると10萬圓以上各階級の割合は漸増して10萬圓未滿のものは漸減の趨勢であつたが5萬圓未滿の小會社は最近其の割合を稍々大にして來た。合資では 5萬圓未滿のものは 8割 8分を占め、5萬圓以上 10萬圓のもの 6分あるの外大資本の會社は甚だ少い。合名では 5萬圓未滿のもの 7割、5萬圓以上 10萬圓及10萬圓以上50萬圓が夫々 1割及び 1割 3分ある外是亦 50萬圓以上の大資本會社は甚だ少い。

會社を業態別とし其の拂込資本金を見ると株式では工業 3割 6分、商業 4割 5分、運輸 1割 4分、鑛業 2分、水産 1分、農業 2分、合資では商業 5割 6分、工業 3割 6分、運輸 5分、鑛業4厘、農業 1分 5厘、水産 3厘、合名では商業 6割、工業 3割 3分、農業 2分、運輸 4分、水産 5厘、鑛業 2厘である。

拂込資本金を地方別に見ると東京の 589,327萬圓最も多く大阪の 255,789萬圓、兵庫の 95,157萬圓、愛知の 46,652萬圓、神奈川の 40,549萬圓、福岡の 30,560萬圓、京都の 26,415萬圓順次相亞ぎ尙 1億圓乃至 2億圓臺は北海道、新潟、富山、長野、静岡、三重、岡山、廣島、山口、愛媛其の最も少いのは沖繩の 256萬圓で、宮崎 1,701萬圓、徳島 2,511萬圓、鳥取 2,861 萬圓、大分 3,212萬圓等は少い地方に屬する。

銀行

昭和四年末に於て帝國に本店を有する銀行は 1,007で其支店及出張所數は 7,837であつて前年に比べると 156行を減少した、支店及出張所も前年に比し 362を減じ、本店 1に付支店及出張所は 7.8に當る。

拂込資本金は 182,887萬圓、積立金は 99,188萬圓で前年に比し資本金 347萬圓積立金 3,559萬圓を増加した。本店 1に付拂込資本金は 183萬圓、積立金は 98萬圓で前年に比し前者は 25萬圓後者は 16萬圓を増加した。

昭和四年の入金 66,334,961萬圓、出金は 66,383,117萬圓で之を前年に比べると入金 4,262,836萬圓、出金 3,970,632萬圓を減少し、純益金は 14,614萬圓、配當金は 13,742萬圓で前年に比し純

益金は 1,665萬圓を減じ、配當金は 15 萬圓を増した。拂込資本金 100圓に對する純益は 7圓99錢、配當歩合 7分 5厘 1毛で前年に比し、前者は 91錢を減じ後者は1厘1毛を増加した。

昭和四年中の預金は 20,288千萬圓其の年末現在高 1,244,595萬圓で之を前年に比べると前者は1,198千萬圓を減じ、後者は24,489萬圓を増加した。借入金は 1,264,314萬圓、其の年末現在高 119,435萬圓で前年に比し、前者は 47,809萬圓を増し、後者は 32,885萬圓を減少し、再割引手形は 251,603萬圓、其の年末現在高 41,875萬圓で前年に比し前者は 31,376萬圓を減少し、後者は 9,928萬圓を増加した。昭和四年中の貸出金は 7,672,310萬圓、其の年末現在高 972,403萬圓で前年に比し前者は 81 億圓を減じ、後者は 269 萬圓を増加した。割引手形は 1,907,633 萬圓、其の年末現在高193,863萬圓で前年に比し前者は 313,367萬圓、後者は 22,429萬圓を減少した。

銀行の預け金は 6,298,511萬圓其の年末現在高は 96,232萬圓で前年に比し前者は 568,718萬圓を減じ、後者は 8,261萬圓を増加した、銀行所有の有價證券年末現在高は實價にして508,636萬圓、現金年末現在高は 116,567萬圓で前年に比し前者は 10,594萬圓を増し、後者は 6,771萬圓を減少した。

【日本銀行】 昭和四年末に於ける支店は16、拂込資本金は3,750萬圓、積立金は 9,238萬圓で之を前年に比べると、積立金 577萬圓を増加したる他變りない。

入金は 11,263,888萬圓、出金は 11,265,325萬圓で前年に比し入金 650,372萬圓、出金 648,794萬圓を減少し、純益金は 9,933千圓で前年より 432千圓を減じ、配當金は 375萬圓で前年と變らず、其の配當率は 1割である。

昭和五年末に於ける兌換銀行券發行高は 143,630萬圓で前年末に比し 20,555萬圓を減少した、正貨準備高は 82,600萬圓で發行高の 5割 8分に當り、其割合を前年末に比すると 7分減である、保證準備高は 61,030萬圓、制限外發行高は 49,030萬圓で、之を前年に比べると正貨準備は 24,628萬圓を減少し保證發行高4,071萬圓を増加した。

【横濱正金銀行】 昭和四年末に於ける支店は44、拂込資本金は1億圓、積立金は 112,046千圓で前年に比し資本金に増減なきも積立金 5,279千圓を増加した。

入金は 5,596,413萬圓、出金は 5,597,758萬圓で前年に比し入金 248,724萬圓、出金 246,332萬圓を減少し、純益金は 1,639萬圓、配當金は 1,300萬圓で前年に比し純益金 173萬圓を減少し、配當率は 1割 3分である。

昭和四年中横濱正金銀行の中華民國に於ける銀行券發行高は 15,669萬圓で前年に比し 5,280萬圓を増加した。

昭和四年中取扱ひたる爲替は、買爲替手形各地へ向けたるもの

320,838萬圓、各地より受けたるもの 319,470萬圓、賣爲替手形各地へ向けたるもの333,589萬圓、各地より受けたるもの 326,622萬圓、代金取立手形各地へ向けたるもの 12,910萬圓、各地より受けたるもの 17,426萬圓、賣爲替預金手形各地へ向けたるもの 5,216萬圓、各地より受けたるもの 5,158萬圓、利付買爲替手形各地へ向けたるもの 62,787萬圓、各地より受けたるもの 61,931萬圓である。

【日本勸業銀行】 昭和四年末に於ける拂込資本金は7,588萬圓、積立金は 5,438萬圓で前年に比し拂込資本金 100萬圓、積立金 491萬圓を増加した。

入金 218,996萬圓、出金 219,014萬圓で前年に比し入金、出金共に 9億 9千萬圓餘を減少した。

純益金は 1,254萬圓、配當金は 759萬圓で前年に比し純益金48萬圓、配當金10萬圓を増加し、其の配當率は 1割である。

昭和四年中債券発行高は 7,063萬圓で前年に比し 14,459萬圓を減少し、本年償還高は 5,139萬圓で前年に比し 11,613萬圓を減少し、年末に於ける現在高は 83,394萬圓で前年末に比し1,924萬圓を増加した。

昭和四年末に於ける年賦償還貸付金は 86,134萬圓で前年に比し 5,483萬圓を増加した。其年限は十五箇年最も多く十箇年及二十箇年之に亞ぎ又數箇年の短期及四十五箇年の長期もある。貸付金額を借主を其の業別にみると農業の 2割 4分最も多く、耕地整理組合の 1割 1分市區町村の 9分 8厘が亞いで多い。定期償還貸付金は 5,487萬圓で前年に比し 825萬圓を減少した。年限は五箇年内で五箇年最も多く 3箇年 2箇年 4箇年 1箇年の順である。

【農工銀行】 昭和四年末に於ける農工銀行は 24、其の支店及出張所 73、拂込資本金は 9,315萬圓、積立金は 6,223萬圓で前年に比し 1行を減少したが、資本金 53萬圓、積立金 400萬圓を増加した。

入金は 320,175萬圓、出金は 320,233萬圓、純益金1,419萬圓、配當金は 880萬圓で其の配當率は 9分 4厘である。

昭和四年中に於ける債券発行高は 16,268萬圓、償還高は12,516萬圓、年末に於ける現在高は 50,641萬圓で、前年に比し發行高及償還高は減少し、年末現在高は 3,752萬圓を増加した。

昭和四年末に於ける年賦償還貸付金は 61,267萬圓で前年に比し 3,950萬圓を増加した。借主の業態は農業最も多く 4割 2分を占め商業の 2割 1分、工業の 9分が主なるものである。定期償還貸付金は 7,899萬圓で借主には農業者及商業者が最も多い。

【北海道拓殖銀行】 昭和四年末に於ける本行の支店及出張所は 41、拂込資本金は 12,500千圓、積立金は 10,184千圓で前年に比し支店及出張所及資本金は増減なく、積立金 1,003千圓を増加した。

入金は 358,173萬圓、出金 358,112萬圓で前年に比し入金出金共に 28千萬圓弱を減少し、純益金は 2,233千圓、配當金は 1,125千圓で前年に比し純益金 2千圓を増し、其の配當率は 9分である。

昭和四年中に於ける債券発行高は 6,710千圓で前年に比し、30,318千圓を減少し、償還高は 13,010千圓で前年に比し 36,723千圓を減少し、年末に於ける現在高は 96,938千圓となり前年に比し 6,300千圓を減少した。

昭和四年度に於ける年賦償還貸付金は 112,341千圓で前年に比し 458千圓を増加した、年限は二十箇年迄最も多く十五箇年迄、十箇年迄之に亞ぐ、借主の業態は農業 3割 6分を占め、土功組合の 2割 6分、商業の 1割 7分が主なるものである。定期償還貸付金は 11,254千圓で前年に比し 2,376千圓を減少した、貸付者の業態は商業、農業が最も多く、漁業及土功組合が亞いで多い。

【臺灣銀行】 昭和四年末に於ける臺灣銀行の支店及出張所は 32、拂込資本金は 13,125千圓で前年と變りない。

入金 1,351,872萬圓、出金は 1,351,540萬圓で前年に比し入金出金共 32千萬圓餘を減少したが、純益金 985千圓をあげた。昭和四年末に於ける臺灣銀行券発行高は 49,241千圓にて前年末に比し、6,472千圓を減少した。

【朝鮮銀行】 昭和四年末に於ける本行の支店及出張所は 33、拂込資本金 25,000千圓、積立金は 2,101千圓で前年に比し、積立金 900千圓を増加した。

入金は 2,746,455萬圓、出金は 2,748,516萬圓で前年に比し入金出金共 360千萬圓餘を増加した、純益金は 1,865千圓、配當金は政府持分を除き 940千圓で前年に比し純益金 280千圓を増加し、配當率は 4分である。昭和四年末に於ける朝鮮銀行券発行高は 118,702千圓にして前年末に比較して 13,742千圓を減少してゐる。

【日本興業銀行】 昭和四年末に於ける本行の支店は 4、拂込資本金は 50,000千圓、積立金は 20,066千圓で前年に比し支店數資本金に増減なく積立金 1,650千圓を増加した。

入金 716,560萬圓、出金 766,318萬圓で前年に比し入金18千萬圓餘を減じ、出金 32 千萬圓餘を増加した、純益金は 4,478千圓で、前年に比し 27千圓を減少し、配當金は 3,000千圓で、其の配當率は 6分である。

昭和四年中に於ける債券発行高は 127,030千圓で前年に比し 12,030千圓を増加し償還高は 121,458千圓で前年に比し 30,963千圓を増加し、年末に於ける現在高は 278,575千圓で前年末に比し、5,572千圓を増加した。

【普通銀行】 昭和四年末に於ける本店は 881、支店及出張所は 6,999 拂込資本金は 1,381,144千圓、積立金は 603,858千圓で前

年に比し、本店 150、支店 342を減少、資本金 2,083千圓、積立金 11,157千圓を増加した、本店 1に付支店及出張所は 7.94で前年に比し 0.82を増加し、平均一行の拂込資本金は 1,568千圓、積立金は 685千圓で、前年に比し資本金 230千圓、積立金 110千圓を増加した。

入金は 430,147百萬圓、出金は 430,078百萬圓で前年に比し入金 32,090 百萬圓、出金 29,761 百萬圓を減少した、純益金は 76,642千圓、配當金は 95,122千圓で前年に比し純益金 7,974千圓、配當金 2,710 千圓を減少し、其の配當率は 6分 8厘である。

本店數を地方別にみればその最も多いのは兵庫の 81で、之に亞ぐは静岡の 59、山梨の 50、東京の 48、福岡の 39、長野の 34、大阪の 33、福島 of 32、新潟の 30等にして、其の最も少いのは樺太、沖繩の各 1、徳島の 2等である。

拂込資本金は東京の 419,075千圓最も多く大阪の 186,350千圓之に亞ぎ、遙に降つて兵庫の 65,600千圓、愛知の 54,616千圓、静岡の 46,606千圓、富山の 46,436千圓、新潟の 46,326千圓、長野の 38,845千圓之に亞ぎ尙10,000千圓以上は青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、神奈川、石川、福井、山梨、岐阜、三重、奈良、和歌山、岡山、愛媛、福岡、佐賀、長崎、大分、鹿児島で、其の少いのは沖繩の250千圓、徳島の1,450千圓、樺太の1,475千圓、熊本の 4,263千圓、宮崎の 4,939千圓、香川の 4,952千圓で、他は何れも 5,000千圓以上である。

配當金は東京の 29,128千圓最も多く大阪の 13,166千圓之に亞ぎ遙に降つて愛知の 4,420千圓、兵庫の 3,767千圓、富山の3,664千圓、静岡の 3,643千圓、新潟の 3,425千圓之に亞ぎ、尙 2,000千圓以上のものに長野、1,000千圓以上のものに青森、茨城、栃木、埼玉、山梨、岐阜、三重、奈良、和歌山、愛媛、福岡、長崎がある。

【貯蓄銀行】 昭和四年末に於ける本店は 95、支店及出張所は 564、拂込資本金は 40,578千圓、積立金は 34,639千圓で前年に比し本店 5、支店及出張所 37を減じ、資本金 145千圓を減少し、積立金 927千圓を増加した、本店 1に付支店及出張所は 5.9で前年に比し 0.1を減少し平均 1行の拂込資本金は 427千圓、積立金は 365千圓で前年に比し資本金 20千圓、積立金 28千圓を増加した。

入金は 7,477百萬圓、出金は 7,485百萬圓で前年に比し、入金 327百萬圓、出金 333百萬圓を増加した、純益金は 6,862千圓、配當金 4,099千圓で前年に比し純益金 8,565千圓、配當金 545千圓を減少し、其の配當率は 1割 1厘である。

地方別にみれば本店の最も多いのは東京、愛知及大阪の 8、之に亞ぐは岐阜、静岡及大分の 4で其の本店がない地方は京都、山

口、熊本、沖繩、樺太である。 拂込資本金の最も多いのは東京の 13,809千圓、之に亞ぐは大阪の 5,113千圓、愛知の 2,559千圓、神奈川の 1,222千圓、其の少いのは富山、三重、奈良、鳥取、高知、鹿児島各 125千圓である。

配當金の最も多いのは東京の 1,405千圓、之に亞ぐは大阪の 248千圓、愛知の 225千圓、新潟の 194千圓、埼玉の 86千圓、長崎の 83千圓、其の少いのは佐賀、鳥取、高知の 4千圓位で福島、神奈川、京都、兵庫、山口、熊本、沖繩は無配當である。

昭和四年度中貨幣鑄造の爲造幣局の受入れた

貨幣 地金の量は金 72,952兩、銀 68,141兩で前年度に比し金 66,977兩を増加し、銀 109,959兩を減少した。 昭和四年度中の貨幣鑄造高は、金貨 54,361千圓、銀貨 3,999千圓、白銅貨 1,000千圓、前年度に比し、金貨 54,361千圓を増し、銀貨 7,802千圓、白銅貨 3,000千圓を減少したが青銅貨、銅貨の鑄造はなかつた。同年度中貨幣發行高は金貨 51,431千圓、銀貨 4,000千圓、白銅貨 1,000千圓である。發行貨幣の種類は20圓及 5圓金貨、50錢銀貨、10錢白銅貨である。

【通貨流通高】 昭和五年末に於ける通貨流通高をみるに小額紙幣 11,680 千圓、日本銀行兌換券中銀行券準備充當金を除きたる差引流通高 1,413,891 千圓、補助貨幣 422,149 千圓此の計 1,847,720千圓にして此の他に朝鮮銀行券90,615千圓及び臺灣銀行券 39,904千圓があるも、之等は内地に於ては殆んど流通せざるものと看做し得るであらう。

而して之を前年に比すると内地流通高は 180,678千圓の縮小を示して居る又朝鮮、臺灣、兩銀行券も之を前年に對比すれば前者は 28,087千圓、後者は 9,337千圓の縮小である。

昭和四年に於ける信託業の營業狀況をみるに 本店 37、支店 14、資本金 92,700千圓 積立金 19,739千圓金銀在高 3,773千圓で其の入金 10,589,028千圓、出金 10,588,707千圓、純益金 13,974千圓、配當金 2,386千圓を示してゐる、年末現在信託高は 1,436,366千圓にして前年より 168,501千圓を増し中金銭信託は最も大にして 8割 1分を占め之に亞いては有價証券信託にして 1割 4分に當り其の餘は土地及定著物信託及其他が占めて居る。

【擔保附社信託事業】 昭和四年末に於ける會社數は 29、拂込資本金 568,049千圓、積立金 331,980千圓で前年に比し、資本金 5,000千圓、積立金 21,137千圓を増加した、年末現在契約口數は 82、其の金額 385,675千圓で前年に比し 8口 40,296千圓を減少した。

【無盡業者】 昭和四年末に於ける本店は 260、支店 134で、之れを前年に比べると本店 2、支店 29を増加した。

拂込資本金 16,158千圓積立金 6,713千圓で之れを前年に比べると前者は 1,589千圓、後者は 892千圓を増加した。

無盡組数は同年 43,579在り其無盡口數 1,529,506で 1組に付無盡口數 35に當り、前年と變らず。掛金契約高は 1,154,703千圓で平均無盡 1口に付き 755圓に當り前年に比し 35圓を増加した。

手形交換及金利 昭和五年中に於ける手形交換は 35,799千枚千枚 11,858,012千圓を減少した、交換高を六大都市別に見れば東京の 21,366,616千圓最も多く、之に亞ぐは大阪の 17,888,936千圓で、京都の 1,140,667千圓は最も少ない。

金利 昭和五年中に於ける金利の變動を觀察するに上半期(六月)に於ては定期預金最高 0.58割(年利)最低 0.48 證書貸付最高 1.18割 最低 0.76割、割引手形日歩最高 3.01錢最低 1.07錢であつたが下半期(十二月)に於ては定期預金最高 1厘減じ、最低2厘を増し、證書貸付最高 3厘減じ最低 2 厘を増し、割引日歩最高 0.15錢減じ最低 0.93錢を増した。前年同期に比し最高は概して減じ下半期最低は何れも増して居る。

外國爲替 昭和五年に於ける正金建値外國爲替相場年平均(電信賣 は紐育宛 100圓に付 49.38弗、倫敦宛 1圓に付 2志 0月3、巴里宛 12.510法、上海宛 100 圓に付 117.75 兩、孟買宛 136.31留にして前年に比して圓價騰貴を示した、而して之を月別にみると紐育宛は二月より 49.38弗に上り、倫敦宛は八月 2志 0月8に達して居る、上海宛は漸次上騰して、十二月 136.13兩を示すに至つて居る。

郵便爲替貯金及年金 昭和四年度中に於ける内國郵便爲替振出は口數 38,193千口、其の金額 963,461千圓、平均 1口の金額25圓 23錢で前年に比し 360千口を増加したが、20,139千圓を減少し、平均 1口 77錢を減少した、拂渡は口數 38,198千口其の金額 963,793千圓、平均 1口の金額 25圓 23錢で前年に比し 309千口を増し 19,464千圓を減少し平均 1口 72錢を減少した。

昭和四年度中に於ける外國郵便爲替は外國へ振出口數 67,688、其の金額 2,708,948圓、平均 1口の金額 40圓 2錢で前年に比し 5,042口、148,856圓を増加したが、平均 1口の金額は 85 錢を減少した、外國より振込口數は 126,939、其の金額 5,788,487圓、平均 1口の金額 45圓 60錢で前年に比し 14,551口 528,579 圓を減じ、平均 1口 95錢を増加した。

外國へ振出金額は中國の 1,689 千圓最も多く、之に亞ぐは北米合衆國の 310千圓、獨逸の 261 千圓、英吉利の 103 千圓、佛蘭西の 87千圓、ブラジルの 43千圓、布哇の 37千圓等で外國より振込金額は中華民國の 1,937千圓最も多く、之に亞ぐは北米合衆國の 1,865千圓、カナダの 917千圓、布哇の 643千圓等が主なる

ものである。

郵便貯金 昭和四年度末に於ける内地及朝鮮、臺灣、樺太、關東州、南洋各廳所管の郵便貯金及特殊郵便貯金人員は 36,388,441人、貯金現在高は 2,199,667千圓、預金者 1人の貯金高は 60圓 45錢である、前年と比較すれば 1,599千人、343,318千圓 1 人平均貯金高 7圓 9錢を増加して居る。右の中内地に於ける貯金は人員に於て 9割 2分、金額に於て 9割 6分を占めて居る。

郵便振替貯金 昭和四年度末に於ける加入人員は 267,240人其の預金額 70,071,582圓である。

郵便年金(官營) 昭和四年度郵便年金収入は 28,229,118圓にして内 8,066,138圓は掛金にして總額の 2割 9分に當つてゐる、其他の収入は積立金利息及雜収入である、支出事業費 325,495圓支拂年金 573,893圓、返還金 808,468圓、年度末積立金 26,521,263圓となつて居る。同年度中に於ける新契約は 26,897件掛金 6,446,816圓其の年金額 2,606,937圓となつて居る、同年度中に於ける死亡は 1,255件、掛金 214,620圓年金額 89,176圓 解約其他件數 11,509 掛金 250,077圓年金額 715,037圓にして年度末 現在に於ける件數 191,549件其掛金 22,397,749圓年金額 13,741,326圓である。

保 險 昭和四年度末に於ける簡易生命保險契約は 14,528千件其の保險金 1,949,938千圓で前年に比し 1,222千件 212,105千圓を増加した、1件に付保險金は134圓となつてゐる、同年度中新契約は 2,157,554件で前年に比し 345,031件を減少した、同年度に於ける被保險者の死亡は 170,551件其の保險金 23,169千圓である。

地方別に契約の多寡をみると東京の 1,704千件、324,095千圓最も多く之に亞いで大阪の 780千件、137,863千圓、北海道の708千件、106,186千圓等で最も少きは南洋の 202 件、59千圓である。

昭和四年に於ける簡易生命保險者の職業は工業 2割 5分、商業 2 割 4分 7厘、農業 2割 3分 2厘、公務自由業 1割 1分 4厘の順位で以上で全數の 8割 4分 3厘を占め他は何れも1割未滿である。

昭和四年度に於ける簡易生命保險事業収入は 505,318千圓で前年に比し 106,100千圓を増加した、収入の内容は保險料 127,646千圓、前年度末積立金 356,850千圓、利息収入 20,524千圓、雜収入 297千圓である。支出は事業費として 20,037千圓、支拂保險金 19,136千圓、還付金 8,489千圓で本年度末に於ける積立金は 456,915千圓、簡易保險局新營費 740千圓である。

前項の積立金中運用した額は 356,850千圓で其の種類は小學校建築資金に 42,131千圓、自作農創設維持に 57,801千圓、住宅資金に 11,123 千圓、上水道に 22,281 千圓、公債證券及預金に 133,991千圓を投じたのが主なるものである。

【民營保險】 昭和四年度末に於ける保險會社數(兼營を含む)は生命保險 39、徵兵保險 4、傷害保險 12、火災保險50、海上保險 43、運送保險 35、自動車保險 11、盜難保險 6、信用保險 3、汽罐保險 1、硝子保險 3で前年に比し生命保險 1を減じ、傷害保險 6、運送保險 1、自動車保險 6、盜難保險 4、信用保險 2、硝子保險 2、を増加した。

生命保險契約年度末現在高は 5,165千件其の保險金 6,663,735千圓で前年に比し 196千件、611,123千圓を増加した、被保險者の人口に對する割合は千人に付82.1にして1件平均保險金は 1,290圓である。年度中の新規契約は 721千件、其の保險金 1,289,418千圓で前年に比し 33千件、76.698千圓を増加した、新規契約 1 件平均の保險金は 1,788圓で前年度に比し約 27圓多額である。

徵兵保險年度末契約は 972千件、其の保險金 536,041千圓で前年に比し 52千件、48,551千圓を増加した、年度中の新規契約は 166千件、其の保險金 124,420千圓で前年に比し 9千件、6,547千圓を増加した。

傷害保險の年度末契約は 185,171件其の保險金 77,878千圓で前年に比し 132,421件を増加したが、23,288千圓を減少した。

火災保險年度末の契約は 15,127千件、其の保險金 17,062,355千圓で前年に比し 2,664千件保險金額は 1,427,016千圓を増加し 1件平均 1,128圓である。

海上保險年度中の新規契約は 3,952千件、其の保險金 7,152,185千圓で前年に比し 131千件、17,763千圓を増加した、而して 1件當り平均は 1,810圓である。

運送保險年度中の新規契約は 1,602千件、其の保險金4,321,364

VI. 貿

易 (表165—187頁參照)

貿易總額 昭和五年中内地よりの輸出額は 1,469,852千圓で内地への輸入は 1,546,051千圓となつて居る。輸出及輸入總額は明治初年僅に 3,4千萬圓に過ぎなかつたが二十一年に於て100,000千圓臺、三十三年には 500,000千圓臺となり、尙駁々として増加し大正元年には 1,000,000千圓臺に上り殊に歐洲大戰勃發以後は其の進展甚だ急速で六年には 2,000,000千圓臺、七年には 3,000,000千圓臺、八年及九年には 4,000,000千圓臺に躍進したが、十年に至る頃には 1,400,000千圓を減少して 2,000,000千圓臺に降つた、十一年は 660,000千圓を増加して大正七年當時の總額に略々等しくなり十二年は前年より 100,000千圓餘を減少したが大正十三年には 830,000千圓を増加して大正八、九年當時の總額と等しいものとなり、大正十四年は尙も増加して 5,000,000千圓臺を示さんとするに至つたが昭和元年よりは輸出と共に減少を示すやうになつた。

輸出及輸入兩者の權衡は年に依て一様ではない、明治初年から

千圓で前年に比し 60千件を減じたが、30,572圓を増加した、1件平均 2,698圓である。

信用保險年度中の新規契約は 3,109件、其の保險金 6,299千圓で前年に比し 83件、1,728千圓を減少し 1 件平均 2,026 圓である。

汽罐保險年度末契約は 1,138件、其の保險金 4,701千圓、自動車保險は 65,352 件、其の保險金 58,526 千圓、盜難保險は 28,831件、其の保險金 6,983千圓、硝子保險は 177件、50千圓あり、以上の内盜難保險が前年に比し減少したる他は何れも前年度末より増加して居る。

昭和四年度末に於て實際事業を營める外國保險會社の内地支店は生命 3、火災 26、海上 16で、海上が増したる他前年と増減なく、年度末に於ける契約は生命 39千件、222,963千圓、火災 335千件、1,262,488千圓、海上 17,918件、45,869千圓である。

【健康保險】 昭和四年度末に於て健康保險被保險者總数は 1,899,893人にして其内 1,871,236千人は強制被保險者 28,317人は任意被保險者 340人は任意繼續被保險者である。

政府管掌の被保險者總数は上記中 1,146,258人にして 6 割を占め他は組管掌の被保險者である。

被保險者の最も多き地方は大阪府の 274,684人にして東京府の 210,646人之人に亞ぎ 100千乃至 150千の地方に長野、愛知、兵庫、福岡がある、而して其の最も少きは沖繩縣の 753人である。

保險金給付件數 6,822,637件にして其の内療養 5,769千件療養費 18,006千圓、傷病手當 928,734件等主なるものにして何れも業務外の件數が遙かに多い。

同十四年迄は大體輸入超過し、二十六年迄は大體輸出超過し、大正二年迄は再び入超となり、三年乃至七年の歐洲大戰中は連年出超で然も其の額 600,000千圓に垂々とする盛況であつたが八年以降逆轉して入超相踵ぎ十三年は 646,000千圓の入超を示し未曾有の現象であつたが其後稍持直し昭和五年に於ては 76,199千圓の輸入超過を示してゐる。

昭和四年中朝鮮の輸出及輸入額は 143,541千圓で 71,995千圓輸入超過し、臺灣の輸出及輸入額は 97,729千圓で 31,353千圓輸入超過である。朝鮮の貿易は常に輸入超過し、臺灣は歐洲大戰當時輸出超過であつたが戰亂後期からは連年入超に逆轉した。

昭和四年中の主要外國貿易總額は英吉利 1,842百萬磅、佛蘭西 108,357百萬法、北米合衆國 9,496百萬弗、伊太利 36,188 百萬利、白耳義 67,587百萬法等は是等の諸國中 輸出超過は北米合衆國のみで他は皆輸入超過となつて居る。

【國別】 昭和五年の我國輸出は亞細亞洲に 704,030千圓(4割8

分)北亞米利加洲に528,655千圓(3割 6分)歐羅巴洲に125,368千圓(9分)で全體の9割3分を占め、殘餘の7分はアフリカ、南米、大洋洲である。北米の中では合衆國が大部分を占め、亞細亞洲では中國の260,826千圓、英領印度の129,262千圓、關東州の86,814千圓、蘭領印度の66,048千圓、香港の55,646千圓、比律賓諸島の28,369千圓、露領亞細亞の26,973千圓等の順位である。歐羅巴洲では英吉利の60,682千圓、佛蘭西の26,302千圓、獨逸の11,106千圓、以外は數百萬圓から數十萬圓のものが多い。アフリカ洲ではエジプト、南米ではアルゼンティン、大洋洲では濠洲が主なるものである。

輸入は亞細亞洲より632,439千圓(4割1分)北亞米利加洲より489,437千圓(3割2分)歐羅巴洲より279,773千圓(1割8分)で全體の9割1分を占め、殘餘の9分は大洋洲、アフリカ洲、南米である。亞細亞洲の中では英領印度の180,405千圓、中國の161,667千圓、關東州の121,405千圓、蘭領印度の59,964千圓が主なるもので、北亞米利加洲では合衆國が大部分を占め、歐羅巴洲では獨逸の106,183千圓、英吉利の92,561千圓、佛蘭西の16,636千圓、瑞西の15,232千圓、瑞典の8,634千圓、白耳義の8,024千圓が主なるものである。大洋洲では大部分濠洲、アフリカ洲ではエジプト、南米ではチリが主なるものである。

【物品種類別】 昭和五年に於ける貿易品の種類を大観すると輸出では全製品4割7分、原料用製品3割6分、遂に降て製造食料品6分、原料品4分、粗製食料品3分を占め、輸入では原料品5割4分、原料用製品1割5分、全製品1割7分、粗製食料品1割、製造食料品4分を占めて居る。之を前年に比較すると輸出に於て全製品の割合増加し原料用製品の割合減少したる他大差ない。

輸出額を箇々の品目に就いて見ると生絲の416,647千圓(2割8分)最も多く、遂に降て生金巾の56,350千圓、生シーチングの31,098千圓、細綾の30,968千圓、綾木綿の27,805千圓、陶磁器の27,171千圓、精糖の26,735千圓、晒金巾、晒シーチングの23,864千圓、綿メリヤスシャツの23,846千圓、綿襦子の23,084千圓等て尚20,000千圓以上のものは壁織、縮綿、石炭、銅等にして10,000千圓以上のものは小麥粉、蟹罐詰、綿織絲、綿フランネル、羽二重、富士絹類、履物、印刷用紙、セメント、鐵製品、木材等である。

輸入額中綿綿の361,715千圓(2割3分)最も多く羊毛の73,610千圓、豆糟の57,731千圓、木材の53,084千圓、原油及重油の44,776千圓、小麥の41,509千圓、石油の37,867千圓、大豆の36,664千圓、石炭の34,204千圓之に亞ぎ20,000千圓臺のものは

砂糖、硫酸アンモニウム、鐵板等にして10,000千圓以上のものは米及粳、印度ゴム及ガタバーチヤ、大麻黃麻及マニラヘンプ、毛織絲、毛織物、パルプ、磷礦石、鐵鑛、銑鐵、鐵屑及故鐵、鉛塊及錠、自動車部分品、瓦斯石油蒸汽機關、飼料、藪等である。

輸出品の主要なるものに付其の主要輸出先を見ると生絲は北米合衆國に特に多く(9割6分)佛蘭西之に亞ぎ。綿織物は中國、英領印度、蘭領印度、エジプト、香港、關東州。絹織物は英領印度、濠洲、蘭領印度、北米合衆國、英吉利、比律賓群島。石炭は中國、香港、海峽植民地、比律賓。陶磁器は北米合衆國、蘭領印度、英領印度、中國、カナダ、メリヤス製品は英領印度、英吉利、比律賓、蘭領印度、中國、南阿聯邦。精糖は中國、關東州が多い。

輸入品の主なるものに付其の主要仕出地を見ると實棉及綿綿は北米合衆國及英領印度にて9割を占め、中國、エジプト之に亞いで居る。羊毛は濠洲(9割8分)、アルゼンティン。鐵類は北米合衆國、獨逸、英吉利。油糟は中國、關東州。木材は北米合衆國、露領亞細亞、カナダ、暹羅。毛織物は英吉利、獨逸。砂糖は蘭領印度(9割9分8厘)。小麥は北米合衆國、カナダ、濠洲。豆類は關東州、中國。硫酸アンモニウムは獨逸、英吉利、北米合衆國。機械類は北米合衆國、英吉利、獨逸である。

昭和四年朝鮮の輸移出品中主要なるものは米及粳の148,816千圓、大豆の22,111千圓、生絲の20,143千圓、柞蠶絲の9,397千圓、銑鐵の7,088千圓で同輸移出品中主要なるものは粟の20,866千圓、米及粳の14,203千圓、絹織物の13,894千圓、柞蠶絲の9,986千圓、藥材の8,801千圓等であるが金屬製品 機械類の輸入も大きい。而して同臺灣の輸移出品中主要なるものは砂糖の143,760千圓、米及粳の49,324千圓、芭蕉實の8,488千圓等て同輸移出品中主要なるものは綿及絹織物の17,216千圓、豆糟の12,825千圓等である。

【輸出及輸入港】 昭和五年輸出の最も多いものは神戸で輸出總額の3割6分を占め横濱の3割1分、大阪の2割之に亞ぎ名古屋は3分、門司は2分9厘である。輸入の最も多いのは神戸で輸入總額の3割6分を占め横濱の2割5分之に亞ぎ大阪の1割5分、名古屋5分、門司の3分9厘之に亞ぎ輸出に於て神戸が横濱を凌いだ他前年と略々同じになつて居る。

【金貨及金銀地金の輸出輸入】 昭和五年に於ける輸出は金308,634千圓、銀2,373千圓、輸入は金9,043千圓、銀644千圓で金は299,592千圓、銀は1,729千圓の流出となつて居る。

國別に見ると金銀の輸出入は北米合衆國、中國、關東州との間に多い。

VII. 交

通 (表188—213頁参照)

道 路

昭和三年末に於ける道路延長は國道8,232軒、府縣道又は地方費道94,866軒、市道は23,959軒、町村道は812,008軒で1方軒に付國道は21.5米、府縣道又は地方費道は248米、市道は63米、村道は2.12軒、合計2.45軒に當る。

【橋梁】 橋梁は國道8,149、府縣道又は地方費道85,570、市道は11,289、町村道269,887である。其の構造鐵橋6,023、石橋81,848、木橋260,409、土橋28,272、其他660である。

通 信

昭和四年度末に於ける郵便局は一等局74、二等局217、三等局8,950、合計9,241で前年に比し二等局6、三等局218、合計224を増加し、電信局は一等普通局4、無線局3、二等普通局6、無線局35、合計48で前年に比し一等普通1、二等無線4を増加し、電話局は本局7、分局43で前年に比し分局2を増した、尙電信取扱所普通1,026、無線722、電信電話取扱所1、電話所234、公衆電話2,045、切手印紙賣捌所67,713、郵便函73,046、郵便私書函あつて前年にくらべると電信取扱所普通の減少した以外は何れも9,805増加した。

郵便局を地方別に見ると北海道の603最も多く之に亞ぐは東京の516、新潟、兵庫の326にして、200以上は福島、長野、岐阜、静岡、愛知、三重、京都、大阪、岡山、廣島、山口、福岡、長崎、鹿児島で其他は100乃至200のものが多い。

【通常郵便物】 昭和四年度中の引受内國通常郵便物は5,096,611千通で前年に比し331,940千通を増加した。人口に對する割合は一人に付81通に當り前年に比し4通を増加した。

同年度中の外國通常郵便物は發送25,807千通、到着38,164千通で前年に比し發送1,243千通を増し到着544千通を減じた。

國別に見ると發送は中國の11,307千通最も多く、北米合衆國の4,330千通、大不列顛の1,294千通、獨逸の1,177千通等が之に亞ぎ、到着は同じく中國の11,809千通最も多く、北米合衆國の9,712千通、大不列顛の4,159千通、獨逸の3,679千通等が之に亞いで多い。

【小包郵便物】 昭和四年度中の引受小包郵便は63,651千箇で、前年に比し316千箇を増加した。

【電信】 昭和四年度中の電信發信は64,772千通、著信は67,538千通で前年に比し發信1,420千通、著信1,465千通を減少した。

外國への發信は1,176千通、著信は1,229千通で前年に比し發信は48千通を増加し、著信は40千通を増加した。

發信を國別に見ると中國の457千通最も多く、之に亞ぐは北米合衆國の167千通、印度支那の98千通、大不列顛の97千通等て

ある。

【電話】 昭和四年度末に於ける電話交換取扱局所は2,967加入人員は690,043人で前年に比し交換所270、人員34,322人を増加し、人口に對する加入者の割合は1,000人に付11.0で前年に比し0.6を増加した。

鐵 道

昭和五年三月末に於ける開業鐵道は國有14,121軒、地方鐵道6,513軒、合計20,634軒で前年に比し國有448軒、地方575軒を増加した。尙未開業に係る國有鐵道934軒、地方鐵道5,913軒、合計6,847軒ある。開業に係る鐵道は100方軒に付5.4軒て、之を歐米の諸國に比較すると100方軒に付白耳義の16.9軒、瑞西の14.2軒、英吉利の13.4軒、獨逸の12.4軒、丁抹の12.1軒、和蘭の11.2軒等に及ばぬこと遠く、洪牙利の9.2軒、佛蘭西の7.9軒にも亦及ばぬ。

停車場数は國有線に2,639、地方線に3,740、機關車は國有4,222輛、地方971輛、客車は國有11,495輛、定員661,385、地方4,077輛、定員268,255、貨車は國有67,434、地方11,226で前年に比し何れも増加した。

昭和四年度の列車走行軒は國有鐵道177,536千軒、地方鐵道24,955千軒等て、前年に比し國有8,164千軒を増加し、地方41千軒を減少した。

昭和四年度末朝鮮に於ける鐵道は3,702軒、未開業線2,642軒にして同臺灣3,183軒、同樺太297軒にして是等を合するも内地の3割3分の延長を有するに過ぎぬ。

【乗客數】 昭和四年度の乗客數は國有862,939千人、平均一日2,364千人、地方415,463千人、平均一日1,138千人で前年に比し何れも著しく増加した。鐵道乗客は三等客が殆ど全部を占め一等客は1毛にも達しない。輸送貨物の噸數は國有77,230千噸、地方26,461千噸で前年に比し國有は減じ、地方は増加して居る。

【營業收支】 昭和四年度に於ける國有鐵道は營業收入517,795千圓、營業費304,143千圓、益金213,652千圓で資本金に對する益金割合は100圓に付6圓51錢に當り前年に比し84錢を減少し、地方鐵道は營業收入93,637千圓、營業費52,273千圓、益金41,364千圓で資本金に對する益金割合は100圓に付3圓52錢に當り前年に比し28錢を減少した。

【電氣軌道】 昭和四年度末に於ける電氣軌道事業者は93、線路2,053軒、車輛7,241、平均一日乗客數4,958千人で前年に比し事業者6を減じ、線路54軒、車輛145を増加し、平均一日の乗客145千人を減少した。

【交通事故】 國有鐵道死傷者は過失其他に依る死亡乗客65人、

職員 113人、公衆 553人、負傷者は乗客 1,124人、職員 858人、公衆 934人で鐵道自殺者は死亡 1,871人、負傷者 153人である。地方鐵道では乗客職員公衆を通じ過失死亡 371人、負傷者 548人である。

昭和四年に於て自動車、自轉車、人力車、荷車等による事故件数は 58,077にして前年より 2,544を増加した、總件数中最多きは自動車の 5割 3分で自轉車の 2割、牛馬車の 5分之二に亞て居る、而して自動車、自動自轉車の事故件数は増加し他は減少して居る、尙自動車事故件数に於ける死亡者数は 837、負傷者数は 21,675 で何れも前年より増加して居る。

【諸車】 昭和四年度末に於ける馬車は乗用 1,617、荷積用 306、103、牛車は 88,437、荷車は 2,056,812、自動車は乗用 45,855、荷積用 25,700、人力車は 33,045 自轉車は自動 21,378 通常5,3 18,230で前年に比べると馬車、牛車、荷車及人力車は減少し他は何れも増加した。

航空 昭和五年度末に於ける民間航空機臺数は122、乗員免狀受有者 460人、製作所 13 で製作所同じき他何れも前年より増加して居る、同年に於ける飛行回数は 30,018回、同時間 15,450時間 50分である。同年航空事故に依る死傷人員 5 人内死亡 1人で前年に比し死亡 2 人負傷 4人を減少して居る。飛行 10,000時間に付事故回数は次第に減少の状態に在り昭和五年には 31.7回で飛行 10,000回に付死傷人員数は 16 人である。

船舶 昭和四年中に於ける主要港への入港船噸數最も多いのは門司の 36,816 千噸で、神戸の 26,432千噸、大阪の 18,546千噸、横濱の 15,482千噸、下關の 12,341千噸、若松の 7,559千噸、小樽の 7,548 千噸で尙 2,000 千噸以上 5,000 千噸臺の入港船のある港は函館、室蘭、青森、東京、清水、名古屋、四日市、宇品、御手洗、多度津、高松、今治、高濱、三池、長崎である、各港への入港船は主に汽船であるが獨り御手洗は避難港であるが爲帆船が大部分を占めて居る。

【汽船、帆船】 昭和四年末に於ける汽船は 8,341 隻、其の噸數 3,862 千噸で前年に比し 192 隻、50千噸を増加した、汽船を噸數階級別に見ると、10,000 噸以上 12 隻 (1 厘) 6,000 噸以上 10,000 噸 116 隻 (1 分 4 厘) 3,000 噸以上 6,000 噸 362 隻 (4 分 3 厘) 1,000 噸以上 3,000 噸 434 隻 (5 分 2 厘) 500 噸以上 1,000 噸 227 隻 (2 分 7 厘) 100 噸以上 500 噸 555 隻 (7 分) 20 噸以上 100 噸 1,644 隻 (2 割) 5 噸以上 20 噸未滿 4,991 隻 (6 割) で前年に比し割合上大差ない状態にある。

帆船 (噸數船) は 46,512 隻、其の噸數 1,228千噸で前年に比し 1,410隻を増し、75千噸數を減少した。

石數帆船は 4,878隻、其の積石數 596,012石で前年に比し 371 隻 47,765石を減少した、既往に比較すると逐次減少の趨勢で十年以前に比べると隻數は半減し石數は 3分の 1に減少した。

【小船】 昭和六年三月末に於ける 5 噸又は 50 石未滿の帆船、傳馬船、倉庫船耕作用船等の小船(漁船を除く)は 187,708隻で前年に比し 2,632隻を増加した。

之を地方別に見ると最も多いのは大阪の 15,203 隻で之に亞ぐは広島の 13,575隻、茨城の 11,497 隻、滋賀の 10,217隻、東京の10,220 隻、5,000隻以上、10,000隻を有するは千葉、新潟、静岡、愛知、兵庫、島根、山口、高知、長崎、熊本である。

【造船所】 昭和四年末に於て 20 噸以上の船舶を建造する設備ある造船所は 405で前年に比し 4を増加した。船渠は 45、浮船渠は 1で前年と變りない。

昭和四年中に於ける船舶建造數は汽船 63隻、其の噸數164,622 噸、噸數帆船 16隻其の噸數 2,743噸で前年に比し汽船は 15隻、55,564噸を増し、帆船は 11隻、2,137噸を増加した。

【海技免狀受有者】 昭和四年九月末に於ける船長、運轉士、機關長、機關士の數は 71,630人で前年末に比し 3,712人を増加した。外に外國人 132人あつて前年と同數である。

【船員】 昭和三年末に於ける船員は 189,465人で他に外國人船員 4,517人ある。

【遭難船】 昭和四年中に於ける遭難船は 550 隻で前年に比し 5,174隻を減少した。遭難船は汽船 296隻、帆船 254 隻である。

遭難船の死傷人員は 306 人で前年に比し 83 人を減少した。遭難者中死亡は 68 人、負傷は 75 人、行衛不明は 163 人である。

【命令航路に服する汽船會社】 昭和四年度末に於ける拂込資本金は日本郵船 64,250 千圓、大阪商船 62,500 千圓、日清汽船 10,125 千圓、南洋郵船 4,563 千圓、北日本汽船 2,325千圓である。

運輸成績を見ると日本郵船は昭和四年度に於て船客 156 千人貨物 4,310 千噸、大阪商船は船客 2,027 千人、貨物 7,844 千噸、日清汽船は船客 248 千人、貨物 712 千噸、南洋郵船は船客 814 人、貨物 181 千噸、北日本汽船は船客 78千人、貨物 594千噸である。

VIII. 社 會 事 業 (表214—224頁参照)

施設 社會事業の行政機關としては一般關係は社會局の所管に、釋放者保護、不良兒の審判及矯正に關しては司法省に、社會教育、特殊教育關係は文部省に又社會衛生事項は内務省の所管に屬する。而して昭和三年度に於ける社會事業相互の聯絡統一を圖る機關は一道、三府二十九縣に設置を見、調査研究及養成機關は 40、助成機關は 14、方面委員制 65 である。

救護としては防貧事業最も多く普及し、兒童保護、司法保護亦施設せらるゝ所が多い。

奨励助成金 昭和五年度内務省社會局交付の團體數は 301 金額 43,700圓にして前年に比し 17,300圓を減少して居る。内育兒最も多く 70團體 11,100圓にして幼児保育及兒童少年保護の 61團體 6,600圓、救療の 31團體 3,600圓が之に亞いで多い。

罹災救助基金 昭和四年度支出總額 651,048圓にして支出中救助金は 512,899圓で内就業費 50%、食料費 26%、避難所及小屋掛費16%、被服費 7%を占めて居る。支出總額を地方別に見ると、北海道の175,054圓特に多く兵庫の114,923 圓、岐阜 73,693圓、三重 30,024圓等が之に亞いで多い。

年度末に於ける基金現在高は 85,708,317圓で、前年より約 385 萬圓を増し、年々遞増の傾向にある。

恤救 恤救規則に依る昭和三年度救済人員は17,443 人で、前年より 2,353人を増加してゐる。年度末現在者 12,332人中最も多きは老衰者の 4,566人で、疾病、幼弱、癡疾が之に亞いで居る。而して此の救済金 549,000圓中地方費は81%を占めてゐる。

養育棄兒 昭和三年度末に於ける養育棄兒數は 727人で前年より88人を減じ、同年度末現在數は 604 人前年より 49人の減であつて、此の養育費は 98,081圓となつて居る。

行旅病及死亡 昭和三年度末現在行旅病人は 2,585人で中男 71%を占め前年より 121人を減じてゐる。地方別に見ると東京府最も多く 1,348人にして、北海道の 239人、大阪の 165人、兵庫の154 人之人に亞ぎ、其他の府縣は數十人臺の

IX. 勞 働

實地調査結果 昭和二年十月十日勞働統計實地調査の結果に係る工場數 (原則として 30 人以上の勞働者を使用するもの) は 7,486で勞働者は 1,381,931人中男 629,106 人女 752,825人で 1工場に付平均勞働者 185人である鑛山數 (50 人以上の勞働者を使用するもの) 313、勞働者 277,263人中男 21

ものが多い。同年度中の行旅死亡人は 3,759人で、地方別に見ると、東京府の717 人を最多とし、大阪府の 466人、兵庫の 307人が之に亞いで多い、而して男は 81%に該つてゐる。

勞務者共済 昭和五年度末に於ける共済組合數は 3、同組合加入者數 4,650千人にして前年に比し 1,345千人を増加した。同年に於ける掛金又は會費總額は 190,516 圓其給付延數 101,645人 125,044圓である。給付中多きは失業の 78,580人、53,574圓、傷病醫療及癡疾の 23,037人、61,260圓である。

映畫檢閲 昭和五年中の檢閲總件數は 17,430件にして、一箇月平均 1,453件となり前年に比し 72件を増加した。而して之を製作國別に見ると、日本物 14,678件、米國物 2,124件其他歐洲物となつてゐる。更にフィルムの種別を見るに、殆んど實體畫にして、娛樂劇其の 59%を占めてゐる。日本物は現代物 100に付時代物 114に該り、米國物は現代物 100に付、時代物 4 に過ぎず、歐洲物は同 22である。之を前年に比すると、何れも時代劇の割合を減少した。

娛樂場 劇場の常設は昭和四年末に於て 1,733で、臨時のもの 33,907あり、前年に比し前者は 20、後者は 7,001の減である。常設及臨時を通じ、愛媛縣の 2,822 最も多く、埼玉、香川、福島等之に亞ぎ最も少ないのは石川縣の 149 である。常設劇場の最も多いのは北海道の 122で、其の最も少きは沖縄の 3である。

活動寫眞館は劇場に比して常設、臨時共に累年増加したが、昭和四年に於ては常設 1,273臨時 75,594で前年に比し前者 64を増したが後者 3,507を減少した。常設活動寫眞館數は東京の 217を最多とし、大阪の 110、福岡の 69、神奈川及北海道の 58が之に亞いで多い。

活動寫眞館の有料興業に於ける觀客數は、昭和四年中 192,444 千人で、常設館其の 79%を、大人小人別に見ると、大人が 73%を占めてゐる。又常設館一に付一日觀客數は 328人で人口一に付觀客數 2.4に該り前年より 0.5減じた。

寄席及觀物場の常設は昭和四年末前者 589、後者 37 同臨時 17,930、10,559 にして何れも前年より減少した。遊藝場は同年末 15,309在り最近増加の趨勢を示して居る。

勤 (表225—248頁参照) 5,665人女 61,598人で 1鑛山に付平均勞働者 886人を使用して居る。男女使用の割合を見ると工場では女 100に付男 83.6 で女子が多いに反し鑛山では女 100に付男 350.1で約 3倍半の男を使用して居る。工場數を地方別に見ると大阪の 1,281を最多とし東京の 1,099

愛知の 587、兵庫の 463、長野の 327、静岡の 218之に亞ぎ、北海道、群馬、埼玉、神奈川、新潟、石川、福井、三重、和歌山、岡山、広島、愛媛、福岡は 100臺で最も少ないのは沖縄の 7である。

鑛山數に於ては福岡の 80 最も多く北海道の 44、長崎の 33、福島 の 20之に亞ぎ秋田は 14、山口は 12、新潟及愛媛は各 11、岩手は 10で其他は 10未満である。

労働時間別に工場數を見ると 11時間以内の 2,614最も多く 10時間以内の 2,508、12時間以内の 1,723之に亞ぎ全工場の 9割は 9時間以上労働する工場である、更らに工場及労働者を産業別に見ると繊維工業は 3,379で總工場の約半數を占め之に亞ぐは機械器具製造業の 677で尙 400臺に窯業、金屬工業、化學工業、木竹類に關する製造業、飲食物品嗜好品製造業、製版印刷製本業がある、他は 200臺以下で最も少ないのは皮革骨角甲羽毛品類製造業の 43である。労働者總數の 5割 7分は繊維工業で占め、機械器具製造業の 1割 4分他は 1割に達するものなく最も少ないのは皮革骨角甲羽毛品類製造業の 3,366人である。

工場労働者の一日平均賃銀は男 2.15圓女 0.87圓で之を産業別にみると男女平均賃銀機械器具製造業 2.56圓、金屬工業 2.45圓、瓦斯電氣及天然力利用に關する業 2.44圓、土木建築業 2.41圓、製版印刷製本業及皮革骨角甲羽毛品類製造業 2.10圓其他は 1圓臺で唯だ繊維工業が 1圓を割り 0.97圓である。鑛山労働者の一日平均賃銀金屬鑛業男 1.82圓女 0.72圓、石炭鑛業男 1.81圓女 1.34圓、石油鑛業男 1.79圓女 0.74圓である。

家計調査

大正十五年九月乃至昭和二年八月の 1箇年間に互り全國代表的都市に付行はれた家計調査結果に依れば給料生活者及労働者の平均實収入の 8割 8分 5厘は勤勞收入で此の割合は收入階級の高まると共に減じて居る。而して飲食物費には實支出額の 3割 6分 9厘、住居費に 1割 6分 8厘、光熱費に 4分 6厘、被服費に 1割 3分 3厘、保健衛生育兒教育交通通信文房具費に 1割 1分 2厘、負擔費に 8厘、交際費に 7分 6厘、修養娛樂旅行費に 5分 1厘を支出して居る。實支出總額中飲食物費の割合は收入階級の高まると共に次第に減少し、同住居費は増加、光熱費は減少、被服費は増加、保健衛生育兒教育交通通信文房具費、交通費、修養娛樂旅行費は増加の傾向を示して居る。

職業紹介

【公設職業紹介所】 昭和五年中に於ける職業紹介所の状況を見るに、其取扱所數 282に於て取扱にかゝる求人數 904,730 人求職者 1,168,114人、就職者 336,197人で求人數の 6割 1分、求職者の 7割 6分は男である。前年に比すると紹介所の數 41を増し求人數 184,209 人増加し求職者數は 285,623人増加し就職者は 72,528人の増加を示して居る。

求職者に對する就職者の割合は男 2割 5分、女 4割 1分で前年に比し男變らず、女 6分を減少した。

昭和五年中に於ける日僱労働求人數は 5,128千人、求職者 6,175千人其の紹介件數 5,122千人で其の内男は何れも 9割以上を占めて居る、之を前年に比べると求人數、求職者數、紹介件數共に増加を示して居る。

日僱労働を除く求人數、求職、就職者の業態別は求人數は工業及鑛業の 263,309人、商業の 208,471人、戸内使用人 178,369人等多く、尙其細分に付てみれば奴婢の 142,999人、製絲の 97,375人、外交集金人の 88,689人、小店員の 69,106人等が多く其他 30,000人以上のものは嗜好品工業、土方、店員、商店雜役、飲食店雇人である。求職者は工業及鑛業 334,661人最も多く商業の 261,447人、戸内使用人 209,564 人等之に亞ぎ其細分に於ては奴婢の 118,264人、店員の 97,866人、事務員の 86,175人、土方の 65,610人、商店雜役の 65,601人が特に多く、其他 30,000人以上に製絲、機械器具、金屬及嗜好品工業、飲食店雇人、書生給仕及番人小使が在る。就職者の多いのは工業及鑛業の 97,841 人にして、戸内使用人の 71,068人、商業の 65,099人が之に亞いで多い。

營利職業紹介所に家庭職業紹介所に於ける状態をみるに前者昭和五年に於ては年末營業者數 3,206にして右の取扱に係る求職者數は 959,785人求職者數 791,688人、紹介件數 796,186、就職者數 474,468人を示し公設紹介所と趣きを異にして求人數に比して求職者數は著しく少ない。

家庭職業紹介所に於ては求人數 2,683人、求職者數 2,580人、紹介件數 2,492を示してゐる、而して其の主なるものは和服裁縫で大約 3分の 1を占めて居る。

労働爭議

昭和四年中に於ける爭議件數 571件参加人員 77,281人で内罷業 490件、怠業 53件、工場閉鎖 28 件である。爭議の原因は待遇改善要求、賃銀減額反對が多く、待遇改善要求は總件數中 4割、減額反對は 2割 3分を占めて居る。一件當り参加人員は 135人で前年より 25人を増加して居る。労働爭議中同盟罷業數を業態別に見ると機械器具製造の 106件最も多く、雜工業の 104件、化學工業の 84件之に亞いで多く、瓦斯電氣事業従業員には 1件もなかつた。

【小作爭議】 昭和五年中に於ける小作爭議は 2,478件で前年に比し 44件を増加した。件數を地方別に見ると山形の 215 件最も多く、新潟の 167件、秋田の 162件、山梨の 144件が之に亞いで多い而して其の少き地方は鹿児島 の 1件、大分の 4件等にして岩手及沖縄には發生をみなかつた。

爭議の關係者は地主 14,159人、小作人 58,565人、關係地の種類は田 28,192ヘクタール、畑 10,274ヘクタール、其他 1,004ヘクタールで爭議 1件に付地主 5.7人、小作人 23.6人、地主 1人

化學の 68組合、15,386人運輸交通の 84組合 140,616 人等が多い。

【官業員共済組合】 昭和四年度末に於ける印刷局、警察、土木事業、專賣、造幣、陸軍、海軍、林野、製鐵、逓信、國有鐵道の諸官業員共済組合の組合員總數は 574,333人にして内國有鐵道の 195,988人最も多く總數の 3割 4分に該り逓信の 165,721 人之に亞ぎ 2割 9分を占め最も小なるは造幣局の 473人である。

是等組合の収入は總額 41,275 千圓にして其の 3割 9分は掛金 3割 2分は政府の給與金 2割 8分は預金利子 1 分は其他の收入である。救済支出は總額 16,459千圓にして内 4割 2分は退給與金 1割 8分は傷疾給與並療養金同じく 1割 7分は殉職並死亡給與金健康保險給付 1割 1分等が主なるものにして他は何れも 1割以下である。給與人員は總數 700千人にして内傷疾並療養 308千人、健康保險給付 254千人退給與 91千人等が多いものである。

【友愛組合】 昭和五年末に於ける組合數は 3,336にして其の組合員數 503,998人を有し組合數を其の目的に依りて分てば共済を主とするもの 1,883、修養を主とするもの 357、其他 1,096となり、更に組合員數の多寡によりて分てば 15人以上 50人未満の 1,227が最も多く、總數の 3割 7分を占めて居る、之に亞いで 50人以上 100人未満の 841、100人以上 300人未満の 686、15人未満の 228 にして 300人以上 500人 未満及 500人以上は何れも 200未満である。

全國中組合の多き地方は兵庫の 222、北海道の 217、東京の 199 等にして其の少きは滋賀の 10、千葉の 11 である。

【消費組合】 昭和四年度に於ける消費組合の状況は組合數 149、組合員數 133,036人にして出資總額 2,911千圓、中拂込済額 1,833千圓を有し他に諸積立金として 1,000千圓がある。

1箇年購賣品賣却高は 21,685千圓にして一方預金 1,993千圓借入金 1,474千圓を示し、剩餘金として 396千圓を示して居る。之を事業別にみれば組合總數中購買組合 109にして最も多く 7割 3分を占め、之に亞いで信用購買組合 19、購買利用組合 12、信用購買利用組合 9である。又構成別にみれば一般市民に依りて構成せらるゝもの 91にして總數 6割 1 分を占め之に亞いで官廳及會社内或は學校内のもの 40、労働者の 12が多い。

五. 教育及宗教 (表249—291頁参照)

に付小作人は 4.1人である。

賃 銀

昭和五年に於ける平均職工賃金の最高は石工及瓦葺工の 2圓 92錢で煉瓦積工の 2圓 87錢、左官の 2圓 66錢、ペンキ塗の 2圓 54錢が之に亞いで高い。工業賃銀は紡織 80錢臺乃至 1圓 60錢、機械器具 2圓臺、化學 60 錢臺乃至 2圓 13錢、飲食物 1圓 70錢乃至 2圓 17錢となつて居る。而して構寸製造女工 65錢、莫大小編女工 82錢、絹撚絲女工 81 錢等は最も低い部分に屬するものである。尙下男は月 14 圓餘、下女は月 12 圓弱である。之を前年に比較すると僅少の例外を除き何れも低落して居る。

更らに鑛夫の賃銀をみるに昭和五年上半期總平均 1圓 76錢 8厘下半年期 1圓 64錢 4厘を示し之を昭和四年に比較すると 9分程低落して居る。尙調査鑛種別にみれば昭和五年下半期總平均に於て最も賃銀の高きは銅其他の 2圓 4錢 1厘にして最低は銀及銀銅其他の 1圓 24錢 5厘である。

鑛 夫

昭和四年六月末(砂鑛夫は年末)に於ける全國の鑛夫數は 287,229人で前年に比し 6,219人を減少した。一年労働延人員は 69,489 千人前年に比し 7,517千人を減少して居る。鑛夫は石炭山に最も多く總數の 8割を占め金屬山は 1割 7分、其他は 3分である。前年に比し石炭山は其の割合を減じ金屬は増加した。

鑛山變災

昭和四年中に於ける鑛山變災度數は 129,649 で前年に比し 12,386 回を減少した。罹災人員は死者 964人、傷者 129,419人で鑛夫千人に付死者は 3.34 人傷者は 450.6人で前年に比し死者増し傷者減少した。

鑛山の種類別に死傷者の割合を見ると鑛夫千人に付死者は石炭山 3.85、金屬山 1.62、石油山 0.68、其他の非金屬山 0.23、傷者は石炭山 518.8、金屬山 204.5、石油山 85.4、其他の非金屬山 94.6で石炭山に於ける死傷率は甚しく高い。

組 合

昭和五年末に於ける組合總數は 7,540組合員 956,906 人にして其の内労働組合は 712、人員 354,312、小作人組合 4,208、人員 301,436、地主小作人協調組合 1,980、人員 247,880、地主組合 640、人員 53,278 にして小作人組合最も多く總組合數の 5割 6分總人員の 3割 2分を占めて居る。労働組合の産業別を見ると機械器具の 74組合 99,683 人

教 育

昭和三年度末に於ける學齡兒童中四月一日に於て既に就學の始期に達した者は 男 4,937,647人、女 4,779,410人、合計 9,717,057人で人口に對する割合は男女各 100人中男 16.0、女は 15.5、其の平均 15.8 で前年に比し男 0.2、女 0.1を増加した。

學齡兒童の就學歩合は男 9割 9分 5厘、女 9割 9分 4厘、平均 9 割 9分 4厘で前年と殆ど變ない。

植民地に於ける學齡兒童の状態をみるに朝鮮に於ては内地人中就學の始期に達したるもの、數男 30,438、女 29,143にして其の就學率は男 9割 9分 8厘、女 9割 9分 8厘にして却つて内地より

高率を示して居る。

臺灣に於ては就學の始期に達したるもの男 388,016、女 362,583 にして其の就學率男は 4割 8分、女 1割 9分にして甚だ低いが内地人に限り觀察するときは男 9割 8分 5厘女 9割 8分 5厘である。樺太に於ける就學始期に達したる者は男女合して 40,725 人にして就學率は 9割 9分 7厘となつて居る。

【小學校】 昭和三年度末に於ける小學校校数は 25,606 で前年に比し 60 校を増加し平均一市町村に付 2.2校に當る。小學校は尋常科のみ 2割 8分、尋常科及高等科併置 7割 1分、高等科のみ 1分て之を既往に比較すると尋常高等兩科併置のものゝ割合は増加し尋常科のみ高等科のみの割合は減少の趨勢である。

小學校の學級は 203,730で前年に比し 4,814を増加し平均一校の學級数は 8.1で前年に比し 0.3、十年前に比べて 1.7を増加した。

植民地に於ける小學校の状態をみるに朝鮮に於ては公私立普通合して 2,164 校 10,340學級、臺灣に於ては小學校公學校合せて 887校 5,717學級、樺太に於ては 199 校 889學級、關東州に於ては 206 校 657 學級、南洋に於ては 32 校 85 學級である。

【二部教授】 二部教授施行の尋常小學校は 190校、尋常高等小學校は 206校で前年に比し尋常は 28校減じ、尋常高等は 19校を減少した。

【小學校教員】 小學校教員總数は 229,188人で中等尋常小學校の教育に従事する者 8 割 2 分、高等小學校の教育に従事する者 1 割 8分である、教員の資格は本科正教員 8割 1分、専科正教員 1 分、准教員 6分て前年と比して正教員増加し准教員及代用教員は減少した。

小學校教員中男は 6割 7分、女は 3割 3分て前年と同割合であるが既往に比較すると女子の割合は漸増し男子の割合は漸減の趨勢に在る。

小學校 1に付本科正教員の割合は 7.1 で前年に比し 0.2 を増加した。地方別に見ると最も多いのは東京の 14.6 にして大阪の 14.4、福岡 10.8、兵庫の 10.7、神奈川の 10.6、沖縄の 10.5、愛知の 10.0、佐賀の 9.8、香川の 9.2、京都の 9.0 之に亞ぎ 8 人臺は埼玉、静岡、7 人臺は栃木、群馬、千葉、富山、長野、三重、廣島、長崎、宮崎、鹿児島て其の少いのは岩手の 3.8北海道の 4.0である。

植民地に於ける小學校教員をみるに朝鮮に於ては 1,932人普通學校 8,598人、臺灣に於ては 6,192人(公學校を含む)、樺太 971人(土人教育所を含む)、關東州小學校 819人諸學堂 886人、南洋に於ては小學校 37人、公學校 78人が各教育に従事して居る。

【小學校兒童】 昭和三年度末小學校兒童總数は 9,680,732 人で前年に比し 182,755人を増加し平均一市町村に付 824人、學校 1

に付 378人に當る、兒童數を地方別に見ると最も多いのは東京の 573,507人、之に亞ぐは北海道の 463,121人、大阪の 383,138人、兵庫の 371,273人、福岡の 363,830人、愛知の 355,227人、新潟の 313,287人にして尙 200,000人臺は福島、茨城、埼玉、千葉、神奈川、長野、静岡、廣島、熊本、鹿児島て其の少いのは鳥取の 78,475人、沖縄の 97,390人、奈良の 94,728人等である。

【幼稚園】 昭和三年度末に於ける幼稚園數は 1,294にして前年に比して 112を増加し保姆數 3,919 幼兒 107,236人にして、前年に比し前者は 321人後者 7,862人の増加である、幼稚園 1に付き幼兒の數は 83人、保姆 1に付園兒の數は 27人にして前年に比し園兒 1を減じ、保姆 1に付 1人を減少してゐる。

【盲啞學校】 昭和三年度末に於ける校數は 119、教員は 909人生徒は 7,230人、卒業者は 1,273人で前年に比し校數 2を増し教員 58人、生徒 616人、卒業者 32人を増加した。

植民地に於ては臺灣に 2 校ありて教員 21、生徒 266人を有し卒業者 45人を出して居る。

【師範學校】 昭和三年度末に於ける校數は 104、教員は 2,827人本科生徒は男 33,668人女 15,262人、本科卒業者は男 9,289人女 4,648人で前年に比し校數 2、教員 43人、本科生徒 3,643人を増加し、本科卒業者は 249人を減少した。

植民地に於ては朝鮮に 14校、臺灣に 4校在り尙關東州に 1 校あつて其教員數は朝鮮 186人、臺灣 111人、關東州 38人、生徒數は朝鮮 2,049人、臺灣 1,185人、關東州 183人にして、卒業者は朝鮮 854人、臺灣 344人を出して居る。

【高等師範學校】 昭和二年度末に於ける高等師範(男子)は 2校で教員は 192人、生徒は 1,809人、卒業者は 413人にして、女子高等師範は 2校で教員は 123人、生徒は 839人、卒業者は 189人である。

臨時教員養成所は 15、教員 499人、生徒 1,621人、卒業者560人である。

同年度に於ける教員檢定合格狀況は小學校本科正教員 3,258人尋常小學校本科正教員 7,805人、小學校専科正教員 7,575人、小學校准教員 2,720人、尋常小學校准教員 3,440人にして以上小學校教員檢定合格者總數 24,798人にして前年に比して 710 人を減じて居る。

其他教員檢定合格者は師範、中學、高女教員總數 10,670人、高等學校高等科 746人を示して居る。

【中學校】 昭和三年度末に於ける校數は 546、教員は 13,377人生徒は 343,682人、本科卒業者は 54,046 人で前年に比し校數 14、教員 388人本科生徒 12,137人、本科卒業者 3,900 人を増加した、平均一校の本科生徒は 629人、教員 1に付本科生徒は26人である。

【高等女學校】 昭和三年度末に於ける校數 733 教員は 13,650人本科生徒は 323,123人、本科卒業者は 68,403 人で前年に比し校數は 36を増し教員は 664人を増加し、本科生徒 16,427人本科卒業者 4,197人を増加した、平均 1校に付本科及實科生は 444人教員 1に付同生徒は 25人である。

實科高等女學校は 207、教員は 1,280 人、本科生徒は 26,558人本科卒業者は 6,743人で前年に比し校數 6を増し、教員 46 人を減じ、本科生徒は 417人、本科卒業者 556人を減少した、平均 1校に付本科生徒は 128人、教員 1に付本科生徒は 21人である。

【専門學校】 (實業専門學校を除く) 昭和三年度末に於ける校數は 102、教員 4,623人、生徒は 64,095人、本科卒業者は11,346人で前年に比し校數 5、教員 823人、生徒 8,167人、本科卒業者は 2,059人を増加した。

生徒は男 8割、女 2割て前年と變らず、各學科中醫學、藥學、齒科醫學、文學、數理化學、宗教、音樂、體育は男女生在り、法學、經濟學、商科、美術、拓殖、測候技術、農業は男學生のみて在る。

昭和四年度末植民地に於ける専門學校は朝鮮に 5、臺灣に 8及關東州に 2在る。朝鮮は京城法學専門學校、京城醫學専門學校、京城高等工業、水原高等農林、京城高等商業學校にして教員總數 278人、生徒總數 1,139 人を有して居る。臺灣は臺北高等商業、同高等農林、同醫學専門學校及び臺北、臺南、臺中師範學校にして教員數 223 生徒總數 1,735 を有して居る。關東州は旅順工科大学及び旅順師範學堂の 2 にして教員 128、生徒 551を有して居る。

【高等學校】 昭和三年度末に於ける校數は 31、教員は 1,238人、生徒は 17,718人、卒業者は 5,167 人で前年に比し校數は變らず、教員 12人生徒 406人、卒業者 119人を増加した。

【大學】 昭和三年度末に於ける帝國大學は 5にして前年と變らず教員は 1,839人で、前年に比し 115人を増加した、東京は教員 624人、京都は教員 460人、東北は教員 240人、九州は教員 259人、北海道は教員 256人である。

學生及生徒は東京 7,820人、京都 5,170人、東北 1,419人、九州 2,007人、北海道 2,211人、合計 18,627 人で前年に比し 639人を増加し、學生の卒業者は東京 2,119人、京都 1,069人、東北 335人、九州 524人、北海道 238人、合計 4,285 人で前年に比し 221人を増加した。

昭和三年度末に於て大學令に依る大學は官立 6、公立 5、私立 24、合計 35、教員は官立 419人、公立 234人、私立 2,418人、學生生徒は官立 3,959人、公立 2,665人、私立 36,247人、學生の卒業者は總體で 5,341人を出して居る。

學科は官立は商學、醫學、公立は醫學、商學、私立は法律、政治、經濟、商學を置くものが多いが中には文學、醫學又は理學、工學科のあるものがある。

【實業補習學校】 昭和三年度末に於ける校數は工業補習 105、農業補習 12,791、水産補習 226、商業補習 547にして生徒數は工業補習 11,937人、農業補習 947,518人、水産補習 14,442人、商業補習 46,708人、之を前年に比べると水産補習が増加したる他は何れも減少を示して居る。

【實業學校及職業學校】 昭和三年度末に於ける實業學校校數甲種工業 88、乙種工業 28、甲種農業 220、乙種農業 115、甲種商業 236、乙種商業 40、甲種水産 12、甲種商船 11で前年に比し、甲種及乙種工業、甲種農業、甲種商業は増し、他は減じた。

教員は甲種工業 1,977人、乙種工業 233人、甲種農業 2,451人乙種農業 867人、甲種商業 5,025人、乙種商業 327人、甲種水産 125人、甲種商船 157人で前年に比して乙種工業、乙種農業、乙種商業、甲種水産は減少し他は増加して居る。

生徒數は甲種工業 27,365 人、乙種工業 4,133 人、甲種農業 43,534人、乙種農業 18,580人、甲種商業 118,737人、乙種商業 9,544人、甲種水産 1,690人、甲種商船 1,423人にして前年に比して乙種工業、乙種農業は減少し他は増加した。

乙種職業學校校數は 28、教員は 234人、本科生徒は 4,784人、本科卒業者は 1,555人で前年に比し校數 6を減じたが教員 23人、本科生徒 262人を増加した。

昭和三年末に於ける植民地實業學校は朝鮮に工業學校 1、農業學校 24、商業 22、水産學校 3、があり臺灣に於ては工業學校 1、農業 1、農業 2、商業 2、がある。

【實業専門學校】 昭和三年度末に於ける校數は工業 21、農業 11、商業 17、商船 2で商業 1を増したる他前年と變りなく、教員は工業 896人、農業 385人、商業 521人、商船 125人で前年に比し工業 9人、農業 10人、商船 3人を増加し商業12人を減少した。本科生徒は工業 7,531人、農業 2,871人、商業 7,746人、商船 1,484 人で前年に比し商船が變らず商業が減少したる他何れも増加し、本科卒業者は工業 2,311人、農業 894人、商業 2,266人、商船 330人で前年に比し工業 38人、農業 101人、商業 360 人を減じ商船は 30人を増加した。

植民地に於ける實業専門學校は工業に關するもの朝鮮に 1あつて教員 60人、生徒 178人を有し卒業者 55人を出して居る。關東州にも 1、教員 40人、生徒數 232人を有し、卒業者 61人を出して居る。又農業に關するものが朝鮮に 1、教員 60人、生徒160人あり卒業者 48人を出し、臺灣に於て 1、教員 23人、生徒 93 人あり卒業者 35人を出して居る。商業に關するものは朝鮮に 1、教員 43人、生徒 257人あり卒業者 72人を出し、臺灣に 1校、教

員 4人、生徒 337人あり卒業者 122人を出して居る、商船に關するものは植民地には未だない。

【各學校入學志願者及入學者】 昭和三年度に於ける専門學校以上の諸學校入學志願者は僅少の例外を除き前年より何れも増加したが中學校及高等女學校の入學志願者は前年より減じた。入學志願者 100人の中入學者の割合は中學校 59.0、高女 59.9専門學校 4.0乃至 100.0 平均 41.3 高等學校 15.0 帝國大學 65.0、官立大學 60.8 公立大學 62.6 私立大學 86.6 官立實業専門學校15乃至 22である。

【文部省在外研究員】 昭和三年度に於ける文部省在外研究員は 428人で前年に比し 9人を減少した。留學國は獨逸の 151 人最も多く之に亞ぐは英吉利及北米合衆國の各 34人、佛蘭西の 29人、等にして研究學科別は理學 90人、工學 80人、文學 76 人、醫學 66人、經濟 46人、農學 37人、法學 21人、等である。

【生徒の健康狀態】 昭和三年度中東京盲學校及聾啞學校、高師附屬小學校を除く文部省直轄學校に於て検査を受けたる男生徒 50,423人、女生徒 2,475人に付き其健康狀態をみるに發育甲のもの男は 4割 5分、女は 4割 6分、乙のもの男 3割 5分 女 4割 6分、丙のもの男 2割、女 8分にして男は甲が最も多く女は乙が最も多い。營養狀態は男に於ては甲 6割乙 3割 8分、丙 2分、女に於ては甲 5割 8分、乙 4割 1分、丙 1分にして概して營養狀態は良好である。視力の檢診の結果は男に於ては 4割 8分は兩眼正視にして 4割 4分は兩眼近視眼他は一眼近視、一眼正視、或は遠視の者である。女に於ては 7割は兩眼正視にして兩眼近視は 2割 5分にして視力の狀態は女の方がはるかに優れ就中近視は男の 5割に對して女は僅かに 2割 6分に過ぎない狀態である。

總検査人員に付き疾病の狀態をみるに最も多きは齲齒にして男 3割 4分 女 4割 6分を占め之に亞いで眼疾の男 5分女 1割 7分である。

【青年團及青年訓練所】 昭和四年度に於ける青年團は團體數 28,466、正團員數 4,104千人にして平均一府縣 606、團體平均團員 144人に該つてゐる。青年團を男女に分けては男 15,144 團體 2,553千人、女は 13,323團體、1,550千人にして一團體所屬人員男は 169人、女は 116人に該り男の方遙かに多い。

青年訓練所は所數 15,785にして之に所屬の主宰 15,490人指導員 88,905人、生徒 806,372人、其終了者 110,627 人で前年度に比し指導員を除く他何れも減少して居る。

【小學校教員平均月俸】 昭和三年度に於ける小學校教員平均月俸は尋常小學校本科正教員男 73圓、女 51圓に該り高等小學校に於ては本科正教員 74圓、女 55圓に該つて居る。而して専科正教員、准教員と次第に低下し最小額は代用教員の尋常男 39圓、同女 27圓、准教員の尋常男 41圓、女 37圓である。

【博士數】 昭和三年度末に於ける博士の總數は 4,526中 7人は外國人にして實人員は 4,519人を示して居る。學部別にみれば醫學の 3,181最も多く總數の 7割餘を占め之に亞いで工學の 414人、理學の 271人にして其の少なきは政治學の 1、商學の 4、經濟學の14である。

【公學資産】 昭和三年度に於ける府縣、市、町村公學資産は 134,550萬圓で前年に比し 9,182萬圓を増加した、府縣公學資産は 30,728萬圓、平均一府縣 654萬圓、市公學資産は 42,219萬圓平均一市 406萬圓、町村公學資産は 61,603 萬圓平均一町村 524圓である。

【公學費】 昭和三年度に於ける府縣、市、町村の教育費は47,132萬圓で人口一人に付 7圓 59錢當り前年に比し 1,159 萬圓を増加し國民一人當り 9錢を増加した。府縣公學費は 11,330 萬圓、平均一府縣 241萬圓で主として中學校、實業學校、師範學校、高等女學校に支出する。

市公學費は 10,189萬圓、平均一市 980千圓、大部分は小學校に支出し、町村公學費は 25,613萬圓、平均一町村 21,794圓でその大部分は小學校に支出する。

【公學收入】 昭和三年度に於ける府縣、市、町村の公學收入は 14,635萬圓で前年に比し 372萬圓を増加した、府縣公學收入 4,016萬圓で主として授業料、寄附金、雜收入に依り、市公學收入は 1,931 萬圓で主として授業料及保育料國庫補助金、寄附金雜收入等に依り町村公學收入は 8,688萬圓で國庫補助金、寄附金雜收入授業料及保育料等より成つて居る。

【出版圖書】 昭和五年中に於ける出版圖書數は 22,476 部で、前年に比して 1,365を増し中主なるものは教育の 3,916部、文學の 2,661部、神書宗教書の 1,257部、音樂の 1,130部、社會問題の 1,053部、經濟の 907部、地誌紀行の 859部、語學の 788部等である。

【新聞雜誌】 昭和五年末に於ける新聞雜誌數は有保證金のもの 5,995、無保證金のもの 4,135、總數 10,130で前年に比し 939を増加した。總數を地方別に見ると東京の 2,090特に多く大阪は 1,328、北海道 537、愛知 499、兵庫 485、福岡 454、京都 400、長野 313臺、神奈川、新潟、静岡、廣島は 200臺、宮城、福島、茨城、埼玉、三重、奈良、和歌山、岡山、山口、愛媛、鹿兒島は 100臺で他は數十台のものが多い。

【圖書館】 昭和三年度末に於ける圖書館は官公立 3,153、私立 1,337で前年に比し前者は 190を増し後者は 6を減少した。圖書冊數は 8,591,612冊、前年に比し 409,734冊を増加した、平均一館の圖書は官公立 1,805冊、私立 2,170冊、和漢と洋との別は官公立和漢 9割 5分、洋 5分、私立和漢 9割 6分、洋 4分で前年に比し官公立共同様である。

【宗教】 昭和五年末に於ける神社數は神宮 1、官幣社 113、國幣社 85、府縣社、郷社、村社 49,383 無格社 62,157 で前年に比し府縣社、郷社、村社54を増し、無格者 213を減じた。

【神官神職】 昭和五年末に於ける神官神職は 15,069 人で前年に比し、27人を増加した、平均一社の神官神職は神宮 73 人、官幣社 4.5人、國幣社 3.5人、府縣社 1.4人、郷社 0.9人、村社は 5社に 1人、無格社は 66社は 1人の割合である。

【寺院】 昭和三年度に於ける寺院數は 71,336 で前年に比し 6を増加した宗派別に見ると眞宗最も多く 2割 8分を占め、之に亞ぐは曹洞宗の 2割、眞言宗の 1割 7分、淨土宗の 1割 2分、臨濟宗、8分、日蓮宗の 7分、天台宗の 6分殘餘の 2 分は黃檗宗、時宗、融通念佛宗、法相宗、華嚴宗である。

【任職】 昭和三年度末に於ける任職は 54,479 人で前年に比し 334 人減少した、寺院と任職との割合は任職 1人に付 1.3寺である。

XI. 警察、衛生及災害 (表292—307頁参照)

【警察】 昭和四年中に於て司法警察官の取扱つた犯罪檢舉件數は 1,674,095人で其の内譯は刑法5割 1分警察犯處罰令違反 1割 3分、廳府縣令違反 2 割、其の他の法令違反 1割 6分である。

【盜難及詐偽恐喝】 昭和五年に於ける強盜は 2,180件、竊盜は 512,047件で前年に比し前者は 145件を減少し、後者は 132,762件を増加した、拘捕に遭ひし人は 13,006人、詐偽恐喝に遭ひし人は 199,734、人で前年に比し前者は 218人を増加し、後者は 30,954 人を増加した。

【被殺害者】 昭和四年中に於ける被殺害者は 1,349人で前年に比し 75 人を増加した、其の原因は爭論又は一時の怒に因るもの最も多く、之に次ぐは痴情、嫉妬、怨恨、貧困、利慾、瘋癲人、暴行人又は醉狂人、盜賊である。

【衛生】 昭和四年末に於ける醫師は 48,804人、齒科醫師は 15,573人、藥劑師は 18,366人、産婆は 48,399人で前年に比し醫師 944 人、齒科醫師 691人、藥劑師 1,177人、産婆 2,100人を何れも増加した。人口 1萬に對する割合は醫師 7.8、齒科醫師 2.5、藥劑師 2.9、産婆 7.7に當つて居る。昭和四年末に於ける賣藥方數は 221,253 で前年に比し 15,331を増加し賣藥請賣人は 237,263人で前年に比し 6,373人を増加し、賣藥行商人は 188,699人で前年に比し 2,108人を減少した。

【種痘】 昭和四年に於ける第一期種痘 (出生から翌年六月迄に行ふもの)人員は公種痘 1,847 千人で前年に比し 4千人を増加し、善感割合は 9割 3分、不善感と檢診未了は 7分で善感割合及不善

【佛道教會說教所】 昭和三年度末に於ける說教所は 6,518で前年に比し 201を増加した、其の宗派別は眞宗の 2,340最も多く、之に亞ぐは眞言宗の 1,548、日蓮宗の 1,123、曹洞宗の 526、淨土宗の 374、天台宗の 328、臨濟宗の 234、である。

【神道】 昭和三年度末に於ける說教所は 13,631 で前年に比し 381を増加した、其の宗派は天理教の 8,758最も多く、遂に降で金光教の 927、御嶽教の 727、神道の 668 黒住教の 482 修成派の 403 等が多いものに屬する。教師數は 96,383人にして前年に比して 3,930人の増加を示して居る。

【基督教】 昭和三年度末に於ける會堂及講義所は 1,708で前年に比し 43を増加した。其の種別は日本基督教會の 287 最も多く之に亞ぐは日本聖公會の 234、日本メソヂスト教會の 231天主教の 217、組合基督教會の 137、ハリスト正教の 105等で其の他 100未滿のもの數種である。

宣布者數は 2,500人にして前年に比し 79人を増加して居る。

感と檢診未了とは前年と變りはない。私種痘は 52,586人で前年に比し 27,876人を減少し善感割合は 9割 7分、不善感 3分である。

第二期種痘 (數へ歳十歳に行ふもの)人員は公種痘 1,743千人で前年に比し 131千人を増加し、善感 は 5割 6分、不善感と檢診未了は 4割 4分で前年より善感割合少しく減した。私種痘は 8,665 人で前年に比し 11,525人を減少し、善感割合は、5割 2分不善感 は 4割 8分である。

【水道】 昭和三年度末に於ける上水道は 299で前年に比し 66を増加した、地方別に見ると長野の 25最も多く、東京、岐阜の 19、山形の 17、北海道、静岡の 16、兵庫、岡山、長崎の 11、神奈川、山口の 10、宮城、島根、福岡の 9、山梨、大阪、廣島の 8、福島の 7之に亞ぎ沖繩には未だ敷設されない。給水栓は東京の 427,469最も多く、大阪の 339,955、京都の 137,273、神奈川の 108,941、兵庫の 94,168、廣島の 68,244、愛知の 64,760之に亞いで居る。

【傳染病】 昭和四年に於ける法定傳染病患者は虎列刺 205人、腸チフス 37,345人、赤痢 (疫痢を含む) 30,253 人、ヂフテリア 19,728人、バラチフス 4,211人、痘瘡 114人、猩紅熱 5,663人、流行性腦脊髄膜炎 359人、發疹チフス 15人、ペスト無しで前年に比し虎列刺、赤痢、ヂフテリア、流行性腦脊髄膜炎は増加したが其他は減少してゐる。各病患者に對する死亡率 5割以上を示したるものは虎列刺、流行性腦脊髄膜炎である。

【墓地、火葬場及埋火葬】 昭和四年末に於ける墳墓地は 978,7 61箇所其の面積 21,713ヘクタールで一箇所平均 2アールに當る、火葬場は 35,383で、同年中に於ける火葬死體は 622,492 で一箇

2分等で前年と大差ない。

犯罪原因を見ると男は利慾最も多く習癖、出来心、憤怒、懶惰、貧困、射倖等之に亞ぎ、女は利慾最も多く出来心、習癖、貧困、憤怒等之に亞で多い。

犯罪者の年齢は男に在つては30歳以上40歳未満の者が最も多く40歳以上50歳未満、25歳以上30歳未満之に亞ぐ、女は40歳以上50歳未満が最も多く30歳以上40歳未満が之に亞で多い。

第一審刑法犯有罪被告人の科刑は罰金刑も最も多く總數の6割5分を占め有期懲役は3割0分、科料は4分5厘で他は無期懲役35人、有期禁錮258人、死刑21人である。

同被告人の受刑度數を見ると一度の者は男6割6分、女8割1分、二度の者は男1割4分、女1割、三度以上六度の者は男1割6分、女8分、七度以上十一度の者は男3分、女7厘、十二度以上の者は男6厘、女1厘である。

第一審特別法犯有罪被告人の罪名を見ると議員選舉其他の2割2分が最も多く、商事産業2割1分、通信運輸電氣2割0分、警察著作出版新聞紙1割3分、衛生1割1分、租稅專賣8分、軍事5分である。科刑は罰金最も多く其の6割9分を占め、科料は2割9分、有期懲役2分である。

昭和四年中外國人に關する第一審事件を見るに被告人員152人にして前年に比して5人を減じ國籍別に於ては支那人最大で145人で9割3分に當つて居る。終局の結果は有期懲役の79最も多く他は罰金の62、科料10である。

【登記】 和和四年に於ける登記件數は5,580,997件、登録稅及手数料總額は54,532千圓で前年に比し279,086件を増し、5,686千圓を減少した。

登記件數は土地8割6分、建物1割1分にして他は僅かに3分に過ぎず其の主なるものは商事會社、産業組合の登記である。商事會社の登記に於ては株式會社最も多く6割9分に及んで居る。朝鮮に於ては課稅不課稅共土地大部分を占め建物、商事會社、非營利法人、商號及び船舶之に亞ぎ臺灣に於ても殆んど同様の状態を示して居る。

【在監人員】 昭和四年末に於ける在監人員は41,842人で前年に比し2,218人を増加した。在監人員は大正五年末には52,776人であつたが大正六、七、八年に於て、少しく増加し、爾後減少の趨勢に轉じ、3萬人臺に下つたが大正十四年には増加し、昭和三年に3萬人臺を示したる他は引續き4萬人臺に在る。

在監者は男9割8分、女2分で前年と殆ど同割合である。在監者の大部分は受刑者で總員の9割弱を占め他の1割は勞役場留置者322人、刑事被告人3,934人、乳兒8人、被疑者85人より成つて居る。

昭和四年中の入監人員は62,974人、出監人員は60,376人で前

物及船舶等である。

控訴院に於ける民事新受件數は5,227、同終局件數は5,005で前年に比し終局件數906を増加した。

大審院に於ける民事新受件數は3,235、上告の結果は上告の理由なくして棄却せられたるもの1,141、原判決を破毀せられたもの273、取下191である。

【植民地に於ける民事々件】 昭和四年朝鮮に於ける民事争訟調停事件新受の數は2,032にして終局2,067を示し、臺灣に於ては新受10,356、終局10,453、關東州は新受4、終局3を示し之等を前年末に比するに關東州の減少したる他は何れも増加を示して居る。

終局事件中最も大なる割合を占むるは朝鮮及臺灣に於ては執達吏事務取扱に關するものにして之に亞いで朝鮮の督促事件、臺灣の公證である。

昭和四年中に於ける捜査數は400,670件、豫審4,751件で前年に比し前者は37,212件、後者は36件増加した、第一審は101,508件で前年に比し12,014件増加し控訴審は6,066件で、前年に比し488件減少した。其の他上告審は1,867件、抗告64件、再審29件、非常上告3件、公訴附帶私訴454件にして再審及非常上告を除き何れも前年より減少してゐる。

昭和四年に於ける刑事々件の捜査終局事件數は395,429件で、前年に比し36,101件を増加した。捜査の結果起訴したるものは2割5分、不起訴のものは5割6分、他へ送致は1割等である。

昭和四年に於ける豫審終局人員は6,065人で前年に比し1,813人を減少した、豫審終結者の公判に付せられたるものは9割7分、免訴は3分である。

昭和四年に於ける第一審裁判事件終局は98,624件で前年に比し11,520件を増加した、第一審裁判事件中刑法犯は5割4分、特別法犯は4割6分である。被告人は162,345人で前年に比し11,301人を増加し、終局被告人153,867人中有罪は9割9分、無罪免訴管轄違等は1分である。人口10,000に對する刑事被告人の割合を見ると25.70で前年に比し1.48を増加し、右の内刑法犯は16.35、特別法犯は9.34にして前者後者に共に増加を示して居る。

昭和四年に於ける控訴事件終局件數は5,197件で前年に比し517件を減少した、終局は刑の言渡8割1分、控訴取下1割5分、無罪4分である。

昭和四年に於ける上告事件終局件數は1,586件で前年に比し576件を減少した、終局は上告棄却6割5分、決定2割0分、上告取下1割1分である。

第一審刑法犯有罪被告人に於て其の罪名を見ると男は賭博及富籤に關する罪5割4分、竊盜罪1割5分、傷害罪8分、詐欺恐喝罪5分、過失傷害罪5分、女は賭博富籤に關する罪6割7分、失火罪1割6分、竊盜罪4分、墮胎罪2分、殺人罪(嬰兒殺を含む)

石川、長野、静岡、愛知、和歌山、高知、熊本及宮崎が在る。

【潮災】 昭和四年中に於て潮災を被つた市區町村は195、田畑169ヘクタール、宅地其他の23ヘクタール、建物5,627棟、船舶370隻で、死亡者16負傷67にして災害による損耗額は1,657千圓、復舊費1,244千圓である。

【暴風雨被害】 昭和四年中に於ける暴風雨被害は市區町村851田畑損害4,292ヘクタール、宅地其他89ヘクタール、建物9,718棟、船舶228隻、人の死亡114人、負傷55人で損耗額は2,409千圓、復舊費は2,649千圓である。

【火災】 昭和四年中に於ける火災度數は18,528、内放火度數は1,311(7分)にして之により全焼したる世帶數は18,821で平均一度當全焼世帶は1.02世帶である、其の損害見積額は7,128萬圓の多きに上つた。

火災度數は北海道1,394度最も多く東京の1,341度之に亞ぎ大阪の852度、新潟の689度、兵庫の643度、廣島の639度、愛知の607、茨城の603、静岡の600、等で他は600未満である。損害見積額は東京の11,360千圓を最高とし、これに亞ぐは宮城の8,403千圓茨城の3,559千圓、静岡の3,310千圓、神奈川の3,144千圓岐阜の3,009千圓等にして他は200萬圓臺に4,100萬圓臺に8,100萬未満のもの28縣にして其の多くは數十萬圓前後である。植民地及關東州に於ける火災度數をみるに同年に於て朝鮮4,879、臺灣1,069、樺太160、關東州405にして火災度數一に付損害見積額の最も大なるは樺太の34,888圓にして關東州の2,578圓之に亞ぎ朝鮮は1,036圓、臺灣は1,006圓である。内地に於ては3,847圓を示して居る。

火災の季節は二月及一月に多くて初夏の候之に亞ぎ七、九、十月は最も少いことは例年殆ど同じである。

消防員及び機械器具の状況を見るに昭和四年末に於ける特設消防署166、消防組10,895にして是等の機關の人員は1,960千人に上り消防機械器具はガソリンポンプ5,787、蒸氣ポンプ316ポンプ船1、水管車10,871、腕用ポンプ42,877となつて居る。

法 (表308—337頁參照)

子の懲戒、家督相続人及親族會に關するもの」及「戸籍に關するもの」で大部分を占め、第一審訴訟事件は通常訴訟が大部分、假差押及假處分が之に亞で多い。

地方裁判所に於ける民事新受件數は64,017件、同終局件數は65,490件で前年に比し終局件數6,311件を増加した、事件は第一審訴訟45,853件、控訴10,108件、非訴事件3,013件、抗告2,918件、破産宣告8件、小作調停事件3,590件である、第一審訴訟事件で最も多いのは金錢に關するもので之に亞ぐは人事、土地、建

所平均18に當り前年に比し1を増した。同年中の埋葬死體は711,072で埋火葬死體中火葬は4割7分、埋葬は5割3分に當り前年に比し割合大略同様である。

火葬の割合を地方別に見ると富山は9割9分9厘、石川は9割9分5厘、大阪は9割9厘、尙8割臺は北海道、新潟、廣島で、其の最も少いのは沖縄の1分弱、鹿児島2分2厘、宮崎5分2厘、高知の7分8厘、埼玉の8分5厘等である。

【精神病】 昭和四年末に於ける精神病患者は68,000人で前年に比し1,553人を減少し、人口萬に付き10.8に當り前年に比し0.4減少したが、既往に比較すると逐年増加の趨勢である、人口1萬に對する割合を地方別に見ると最も多いのは廣島の23.5之に亞ぐは香川の17.8、奈良の17.0、京都の15.9、福井の15.5、尙10以上の地方は山形、茨城、栃木、埼玉、東京、神奈川、石川、静岡、愛知、三重、滋賀、兵庫、和歌山、鳥根、岡山、山口、徳島、長崎、熊本、鹿児島で其の少いのは大分の4.6、北海道及青森の5.6等である。

精神病患者男女の割合は男6割4分、女3割6分で年々此の割合に大差を見ない。

精神病患者の内精神病院法に依るもの(市區町村長の監置すべき者、犯罪者にして特に危険の虞あるもの、療養の途なき者、地方長官の必要と認めたる者)は3,270人(5分)精神病患者監護法に依る入院及假監置者9,485(1割4分)監置を要せざる者55,245人(8割1分)である。

昭和四年中に於ける水害を被つた市區町村は3,239で全國市區町村の2割7分、汎濫面積は87,644ヘクタール、田畑の流失及埋没は14,261ヘクタール、宅地其他の土地埋没崩潰、2,504ヘクタール、建物12,846棟、船舶80隻、人の死亡53人、負傷76人で損耗額は9,708千圓、復舊費29,581千圓である。

損耗の多い地方は新潟の1,400千圓、北海道の922千圓、沖縄の777千圓、栃木の749千圓等で、尙10萬圓以上の地方としては青森、岩手、宮城、山形、福島、茨城、埼玉、東京、神奈川、

XII. 司

民事事件 昭和四年に於ける區裁判所新受の民事事件數は973,800件、同終局件數は988,281件で前年に比し終局件數33,968件を増加した、終局件數の内譯は督促305,156件、非訟事件268,142件、第一審訴訟285,707件、強制執行38,379件、商事調停事件2,932件、借地借家調停事件11,543件、和解12,417件、破産事件3,836件、和議事件154件、戸籍に關する抗告15件である。

督促事件は殆ど全部一定金額の督促、非訟事件は「隠居、廢家、

年に比し入監 1,570人を増加し、出監 2,028人を減少した、受刑者の出監は大部分満期で外に假出獄 1,143人、死亡 351人刑の執行停止 251人がある。

昭和四年末及同年中の植民地及關東州に於ける在監入監出監を見るに朝鮮に於ては年末在監者 15,897 人を示し同年中入監者數 38,720人、出監 37,087人を算して居る、臺灣に於ては年末 在監者 3,195人年内中入監者 14,666人、出監者 14,512人にして關東州に於ては年末在監者 1,037 人、年内中入監者 3,941 人出監者 4,025人を示してある。

在監者を犯罪の種別に見ると男は刑法 9割 8分を占め他の 2分は陸海軍刑法犯 38人、森林法犯 23人、兵役法 3人、警察犯處罰令違犯 231人其他 303人にして女も亦刑法犯大部分を占め、警察犯處罰令違犯 23人其他 5人である。

刑法犯のみに付其の罪名を見ると男は竊盜 5割 8分、詐欺及恐喝 1割、強盜 8分、殺人 6分、傷害 4分、放火 4分、横領 3分、女は竊盜 3割 6分、放火 2割 6分、殺人 1割 4分、詐欺及恐喝の 8分 8厘、嬰兒殺の 2 分等で前年に比し男女共其の割合に著しき變化を示して居らない。

在監受刑者の刑名は男女共に有期徒刑 9割以上を占め、無期徒刑は男 460人、女 10人、有期禁錮は男 34人、女無し、拘留は男 249人、女 24人である。更に有期徒刑を刑期別に見ると三月未滿は男 8厘、女 1分 7厘、六月未滿は男 5分、女 4分 7厘、一年未滿は男 1割 9分、女 1割 7分、三年未滿は男 3割 9分、女 3割 7分、五年未滿は男 1割 6分、女 1割 8分、十年未滿は男 1割 4分、女 1割 6分、十五年未滿は男 3分、女 3分、十五年以上は男 2分 8厘、女 2分である。

【新受刑者】 昭和四年中に於ける新受刑者は男 28,517 人、女 837人で前年に比し男 441人、女 14人を増加した、新受刑者の男は刑法犯 8割 1分、警察犯處罰令違犯 1割 5分、其の他 4分、女は刑法犯 4割 4分、警察犯處罰令違犯 4割 2分、其の他 1割 4分で更に

XIII. 財

昭和六年度豫算に依る歳入總額は 1,489,275千圓で内、經常部 1,396,970千圓(9割 3分 8厘)臨時部 92,304千圓(6分 2厘)である。歳出總額は 1,488,903千圓にして内經常部 1,182,377千圓(7割 9分)臨時部 306,526千圓(2割 1分)である。之を前年度豫算に比べると歳入 119,364千圓を減じ、内經常部に於ては 117,554 千圓、臨時部に於ては、1,810千圓を夫々減少し、歳出は 119,736千圓を減少し、内總經常部に於て 41,660千圓、臨時部に於て 78,076千圓を減少した。

明治十九年内閣制施行後に於ける國家財政の狀況を概観するに日清戦後の二十八年迄は毎年の歳出 80,000 千圓、人口一に付 2

刑法犯を罪名別に見ると男は竊盜 5割5分、詐欺及恐喝 1割4分、賭博及富籤 6分、傷害 6分、横領 5分等、女は竊盜 4割3分、詐欺及恐喝 1割 4分、放火及失火 1割1分、賭博及富籤 8分等である。

新受刑者の刑法犯の犯人數を年齢別に見ると 18 歳未滿の男は初犯 9割 4分、再犯 5分 9厘、女は殆ど總てが初犯で再犯は 1人ある。前年に比し男初犯の割合僅に減少し女は殆ど變りない。18 歳以上の男は初犯 5割 2分、再犯 2割 0分、3犯以上 5犯 2割1分、6 犯以上 7分、女は初犯 7割 4分、再犯 1割、3 犯以上 5 犯 1割、6 犯以上 7分で前年に比し男は初犯を減少し、女は之に反し初犯及 6犯以上を増加した。

新受刑者の刑名は男有期徒刑 8割 3分、拘留 1割 7分で他は無期徒刑 35人、有期禁錮 134人、死刑 13人、女有期徒刑 4割 5分拘留 5割 5分、他は無期 3人、有期禁錮無し、死刑無しである。有期徒刑の刑期を見ると三月未滿は男 7分、女 1割 3分、六月未滿は男 1割 5分、女 1割 8分、一年未滿は男 3割 5分、女 2割 8分、三年未滿は男 3割 3分、女 2割 9分、五年未滿は男 7分、女 9分、十年未滿は男 2分 9厘、女 2分 1厘、十五年未滿は男 2厘、女 3厘、十五年以上は男 2毛である。

入監時の年齢は男は 20歳乃至 30歳最も多く、30歳乃至 40歳、40歳乃至 50歳之に次ぎ、女は 40歳乃至 50歳最も多く、20歳乃至 30歳、30歳乃至 40 歳之に亞ぎ以上の年齢者で新受刑者 8割 2分を占めて居る。飲酒は酒を嗜むもの男 6割 0分、女 1割 2分、資産状態は資産なきもの男 9割 6分、女 19割 8分である。男の職業は無職業最も多く、工業、商業、農業が亞いで多い。

昭和四年に於ける少年刑務所の狀況をみるに刑務所 9、職員 598 在監者總數 2,409人を算して居る、在監受刑者を刑名別に見ると懲役無期 4人、有期 2,294人、禁錮無し、拘留10人で之等の受刑者は主として窃盜強盜犯にして 1,774人(7割 7分)に上つて居る。之に亞いで詐欺恐喝及横領の 169人、放火の 128人、傷害の 74人、殺人の 69人が多く他は何れも 50人未滿である。

政 (表338—390頁参照)

圓内外であつたが翌二十九年度に於て一躍倍加して 169,000千圓となり翌々年度 200,000千圓臺に上り三十七年度迄は一進一退、同年度 277,000千圓(人口 1 に付 5圓 87錢)となり、日露戦後の三十八年度には頗る増加して 400,000千圓臺(人口一に付 8圓 88錢)四十年には 600,000千圓臺(人口一に付 12圓 27錢)となり、翌四十一年には尙 636,000千圓に上つたが、四十二年には 100,000 千圓を減少して 532,000 千圓に下り、大正三年度に於て一度 600,000 千圓を出たものあるを除き大正五年度迄は常に 500,000千圓臺(人口一に付 11圓内外)であつたが大正六年度に至つては 735,000千圓、更に七年度には 1,000,000千圓臺(人

口一に付 17圓 51錢)に躍進し爾來逐年増加して大正十年度には 1,489,856 千圓に上り十一年度には 61,390千圓を減少して 1,428,466千圓(人口一に付 25圓 15錢)となつたが十二年度には 1,521,050千圓となり 92,584千圓を増加し、更に十三年度に於て 103,974千圓を増加し、(人口一に付 27圓 48錢)を示し、十四年度は 100,035 千圓を減少したが昭和元年度より再び増加して昭和三年度には 1,814,855 千圓人口一人當 29圓 21錢となつたが其の翌年度からは減少に轉じた。

昭和六年度歳入經常部は租稅 5 割 6 分、官業及官有財産收入 3割 6分印紙收入 5分、殘餘の 3分は教育改善及農村振興基金特別會計より繰入、預金特別會計より繰入及雜收入である。租稅は酒稅 210,807千圓、所得稅 163,774千圓、關稅 112,269千圓、砂糖消費稅 76,627千圓、地租 64,789千圓、營業收益稅 44,993 千圓、織物消費稅 31,667千圓、相續稅 29,067千圓、資本 利子稅 15,976千圓、取引所稅 8,483千圓が主なるもので他は何れも 5,000千圓未滿である。官業及官有財産收入は郵便電信電話收入 240,888千圓、專賣局益金 198,249千圓、森林收入 43,091千圓、配當金收入 9,543千圓、刑務所收入 5,416千圓、が主なるもので他は何れも 2,000千圓未滿である。

歳入臨時部は雜收入 25,290千圓、公債金の各 22,000千圓が主なるものである。

昭和六年度歳出總額中皇室費の 4,500千圓(全歳出の 3厘)を除き他を所管別に見ると逓信省、大藏省の各 2割 2分、海軍省 1割 4分、陸軍省 1割 3分、内務省 1割、文部省 9分、農林省 3分 8厘、司法省 2分、拓務省 1分 8厘、外務省 1分 2厘、商工省 7厘で前年度に比し著しき差違はない。

大正九年度に於ては陸軍、海軍兩省で同歳出の 4割 8分を占めて居たが昭和二年度以降に於ては 2割臺に減少した。

【特別會計】 昭和五年度に於ける特別會計は39で其の所管は外務省 1、内務省 2、大藏省 10、陸軍省 2、海軍省 3、文部省 3、農林省 2、商工省 3、逓信省 2、鐵道省 3、拓務省 8である。特別會計中には資金又は勘定の如く單に帳簿上の出納に止まるものがあるが、其の額の多少に依て見ると鐵道の 903,377千圓(歳入)國債整理基金の 693,399千圓、專賣局の 368,741千圓(歳入)朝鮮總督府の 238,924千圓等巨額のものに屬する。

【豫算純計】 前項に掲げた一般會計及各特別會計の歳入歳出金額の總額を計算した處で、實際の國家の歳入歳出の總額には當らない、或る會計で歳出に立てゝある金額も他の會計に入るものがあり又或る會計の歳入にして他の會計の歳出に依りて支拂はるゝものがあり従て同じ金が二重に歳入に又は歳出に計上せられて居るが爲眞の歳入歳出の總額と云ふものが分らない。故に其の眞の歳入歳出即ち豫算の統計が調整せられて居るが、之に依ると昭和

六年度に於ける一般會計及特別會計の歳入豫算額は 4,800,573千圓、内純計額 3,393,587千圓、控除額は 1,406,986 千圓である、更に一般會計及特別會計の歳出豫算總額は 4,370,957千圓内純計額 3,247,528千圓、控除額は 1,123,428千圓である。豫算總額と純計額との割を見れば歳入 7割 1分、歳出 7割 4分である。主要なる控除科目は歳入歳出各三十餘種數十科目に分れる。尙純計額調整方法の概略は統計表に掲げてある。

【所得稅】 昭和四年度に於ける所得納稅人員は第一種法人 36,520 第三種 957,046 人で前年度に比し前者は 3,544 を増し後者も 10,358人を増加した。

所得金額は第一種法人 984,385千圓、第二種公債社債銀行定期預金利子等 621,702千圓、第三種 2,365,517千圓、合計 3,971,604千圓で前年度に比し 50,350千圓を減少した。

第三種所得は商業の 565,584 千圓最も多く、之に亞ぐは俸給々料歳費の 442,197 千圓、貸宅地貸家の 386,476 千圓、配當の 315,676千圓、賞典の 154,925千圓、田小作の 153,698千圓、庶業の 121,281千圓、工業の 89,604千圓、尙 50,000千圓以上のものは貸金預金其他 利子、諸 給 典である。所得稅 納 稅 額は第一種 54,183 千圓、第二種 30,487 千圓、第三種 116,090 千圓、合計 200,760千圓で前年度に比し 6,697 千圓を減少した、地方別に見ると東京の 69,871 千圓最も多く大阪の 29,028 千圓、兵庫の 14,725千圓之に亞ぎ、5,000千圓以上 10,000千圓は神奈川、愛知、京都、福岡、3,000千圓以上 5,000 千圓は北海道、新潟、廣島にして百萬圓未滿のものに青森、岩手、福井、山梨、奈良、鳥取、島根、徳島、香川、高知、佐賀、宮崎、沖縄があり、内沖縄は140千圓に過ぎない。

【地租】 昭和五年首に於ける地租納稅人員は 10,668 千人で前年に比し 120千人を増加し人口 100に付納稅者の割合は 16.55前年に比し 0.42を減少した。而して同年首に於ける地租 75,412千圓中主なるものは田の 45,611 千圓、宅地の 17,677 千圓、畑の 10,429千圓で他は何れも 1,500千圓未滿である。地租納稅額を地方別に見ると兵庫の 3,419千圓最も多く之に亞ぐは大阪の 3,242千圓、愛知の 3,226千圓、新潟の 3,181千圓、東京の 3,148千圓、20,000千圓以上は茨城、埼玉、千葉、三重、岡山、廣島、福岡、其の少き地方は青森、岩手、山梨、奈良、和歌山、鳥取、徳島、高知、長崎、宮崎、沖縄の各 1,000千圓未滿である。

納稅人員一に付納稅額は全國平均にて 7圓 7錢に當り前年に比し 9錢を減少した、之を地方別に見ると東京の19圓、大阪の18圓特に多く他は概ね 5圓乃至 9圓で其の少いものは山口、高知、長崎、大分、宮崎の 4圓臺、鹿兒島、沖縄の 3圓臺等である。

【營業收益稅】 昭和五年度に於ける法人事業年度數は 48,674其純益額 997,870千圓、内納稅人員 35,778、純益金額 955,337千

圓にして税額は30,750千圓である。而して個人營業人員は730,229人其純益額 870,543 千圓にして納税人員は 730,202 人純益金額 870,491千圓税額は 24,211千圓である。

法人純益額は東京、大阪特に多く兩者の計 660,555千圓に上り 6 割 6 分を占めて居る。個人に於ても東京、大阪 純益總額 212,456千圓に上り 2割 4分を占めて居る。

【國有財産】 昭和五年三月末日現在の國有財産法の支配する國有財産總額は 8,111,386千圓、内一般會計所屬 5,016,981千圓、特別會計所屬 3,094,405千圓である。各種財産毎の内譯は、公用財産 5,934,900千圓、營林財産 1,793,045千圓、雜種財産 383,441千圓で前年に比し總額 274,396千圓を増加した。財産種類の割合は土地 2割 2分、立木材 1割 9分、建物 1割 1分、工作物及器具機械 3割 3分、船舶 1割 2分等である。

更に所管別に見ると鐵道省の 2,324,462 千圓最も多く之に亞ぐは海軍省の 1,357,409 千圓、陸軍省の 885,931 千圓、内務省の 753,554 千圓、大藏省の 624,424 千圓等で其の最も少いのは外務省の 23,455千圓である。

【國債】 昭和五年度末に於ける國債總額は 6,842,781千圓で前年に比し 266,772千圓を増加した、右の中、内國債は 4,476,792千圓で前年に比し 35,816千圓を減少し外國債は 1,479,024千圓で前年に比し 32,175千圓を増加した。尙外に借入金 688,455 千圓、米穀證券 48,509千圓大藏省證券 150,000 千圓あり前年に比し借入金 115,495千圓を増し、米穀證券は 4,917千圓を増加した。人口一に付國債は内國債 69圓 46錢、外國債 22圓 95錢、合計 92圓 41錢に當り前年に比し 2圓 28錢を減少した。

昭和五年に於ける列國の國債額は英吉利 7,700,619千磅、佛蘭西 264,426百萬法、伊太利 1,861,410 百萬利、獨逸 9,629,598 千ライヒス麻、北米合衆國 16,185,308千弗で、人口一に付割合は英吉利 168磅佛蘭西 6,446法、伊太利 44,844利、獨逸 151ライヒス麻、北米合衆國 132弗である。

【道府縣】 昭和五年度豫算に依る道府縣の歳入總額は 402,313

XIV. 選舉、官公吏、軍事及恩賞 (表391—425頁參照)

選舉 七年一回選舉に依る貴族院議員多額納税者議員最近大正十四年九月第六回選舉に於て議員定數 66 人、互選人定數は 6,600人中、選舉當日の互選資格者は 6,252人で、前年に比し約 9倍に増加した。是れ議員選舉規則の改正された爲である。

投票中有效 5,779票、無效票26である。互選権を有する者の直接國税總納税額は 23,866千圓前年に比し約 4倍に増加した。其の一人當納税額最高 248,308圓で最低 236圓前年に比し最高16,603圓、最低に於て19圓の減少である。

千圓で平均一府縣 8,560 千圓に當り、前年度に比し總額に於て 78,934 千圓平均に於て 1,679 千圓を減少した。歳入の主なるものは租税で全額の 6割 1分を占め、内直接國税附加税 3割 2分を占め尙國庫補助金及下渡金、道府縣債等が主な財源である。

同年度道府縣の歳出は教育費に 2割 6分、土木費に 2割 1分、警察費に 2割、勸業費に 1割 1分等の割合となつて居る。

歳出總額を地方別に見ると東京の 43,560 千圓最も多く之に亞ぐは大阪の 21,270千圓、兵庫の 19,044千圓、愛知の 15,847 千圓、福岡の 15,220 千圓で尙北海道、新潟、長野、京都、廣島は 10,000千圓を超え他は 4,000千圓以上 10,000 千圓の地方多く、4,000千圓未滿は、奈良、沖繩である。

【市】 昭和五年度豫算に依る全國市の歳入總額は 693,510千圓で、前年度に比し 60,366 千圓を減少した、歳入の主なるものは公債金の 2割 6分、使用料及手数料の 2割 8分、租税の 1割 9分等である。

昭和五年度豫算に依る市の歳出總額は 686,578千圓で内電氣瓦斯事業に 2割 2分、公債費に 2割 9分、教育費 1割 2分、衛生費に 1割 1分、土木費に 8分といふ割合になつて居る。

【町村】 昭和五年度豫算に依る町村歳入總額は 474,301千圓で前年度に比し 51,318 千圓を減少した。歳入の主なるものは租税で 3割 8分を占め内直接國税附加税 6分 9厘を占め、税外収入の主たるものは下渡交付及補助金、公債金、前年度繰越金、使用料及手数料、財産より生ずる収入等である。

町村歳出總額は 474,101千圓で教育費に 4割 5分、役場費に 1割 7分、土木費に 7分等が其の主たる項目を成して居る。

【地方債】 昭和四年度末に於ける地方債の總額は 2,221,703千圓で前年度に比し 171,320千圓を増加した、團體別に見ると市債 1,461,953千圓、道府縣債 482,413千圓、町村債 235,737千圓、水利組合(土功) 41,601千圓で、其の目的別は電氣及瓦斯事業 2 割 5分、普通土木費 2割 8分、衛生費 1割 3分、教育費 9分、災害土木費 7分、社會事業費 6分、勸業費 4分の割合である。

大正十四年九月一日に於ける互選権者納税額の最多いものは東京の 1,920千圓で之に亞ぐは大阪の 1,901千圓、兵庫の 1,653千圓、新潟の 1,098千圓、京都の 1,071千圓、其の他は 1,000千圓以下で最低は沖繩の81千圓である。

【衆議院議員】 昭和五年二月議員數は 466人、議員一人に對する人口は 138,305人で 1府縣の議員數は東京府の 31 人を最多とし鳥取縣の 4人を最少とする。昭和五年二月の總選舉に於て選舉権を有する者の數は 12,813,192人で人口 1,000に對する有権者の割合は 198.81 人に當る、各府縣中右の割合最も多いのは鳥根の

233人で其の最も少いのは北海道の 170人である、議員 1 人に對する有権者は 27,496人に當り、鹿兒島の 34,870人最も多く佐賀の 22,663人最も少い。

有権者中投票したる者と投票せざりし者との割合は前者 8割 3分、後者 1割 7分、投票中有效は 9割 9分、無効は 1分となつて居る。

衆議院議員の年齢を見るに 60歳以上の 112人最も多く、45 歳以上 49歳の 106人、50歳以上 54歳の 95人、55歳以上 59歳の71人、40歳以上 44歳の 62人、35歳以上 39歳の 18人、30歳以上34歳の 2人の順位である。職業は會社員 82人、辯護士 78人、無職業 77人、農林業 69人、著述通信及新聞雜誌記者 38人、官吏 36人等多く尙右以外の職業者の順位は醫師及藥劑師、商業、教員、工業、軍人、鑛山業、銀行員である。

【府縣會議員】 主として昭和二年の選舉に係る議員數は 1,842人中、市部 350 人、郡部 1,492 人である、選舉有権者の總數は 11,400,614 人で東京の 724,760人最も多く沖繩の 66,746 人最も少い。議員 1人に付有権者は 6,189人で前年に比し 3倍近く増加した。

投票したる者と投票せざりし者との割合は前者 7割 3分、後者 2割 7分、投票中有效の割合は 9割 9分である。

【市町村會議員】 本項は前各項の如く選舉の結果に非ずして昭和四年末に於ける現在の調査である。

市會は 109、議員 3,870人、選舉有権者 2,738,618人で、議員 1人に付有権者 708人である。町會は 1,648、議員 28,764人、選舉有権者 2,731,744 人で議員 1人に付有権者 95 人である。村會は 9,721、議員 125,857人選舉有権者 6,764,719人で議員 1人に付有権者 54 人である。町村組合會は 35、議員 452 人、選舉有権者 24,429人で議員 1人に付有権者 54 人である。町村總會は 1、選舉有権者 12 人である。

尙北海道一級二級町村制並東京府に於ける島嶼町村制に依るものがある、即ち町會は 43、議員 926人、選舉有権者 108,645人、村會は 242、議員 3,574人選舉有権者 236,899人、町村組合會は 1、議員 6人、選舉有権者 26人である。

官公吏 昭和五年末に於ける文官は勅任 1,347人俸給 8,509千圓、奏任 14,057人、俸給 40,497 千圓、判任 111,591人、俸給 111,709千圓、合計 126,995人、俸給總額 160,265千圓、雇員 348,631人、給料 190,843千圓で平均俸給額は勅任 5,983千圓、奏任 2,881圓、判任 1,001圓、雇員 547圓である。

勅奏判任を通じて官吏を所屬別に見ると最も多いのは逓信省の 27,395 人之に亞ぐは鐵道省 25,957 人、朝鮮總督府 10,015人、大藏省の 11,363人で、他は 10,000人以下である。即ち司法省の

8,443人、文部省は 7,397人、臺灣總督府の 6,157 人、農林省は 3,813人、内務省 2,457人、關東廳は 2,139人、陸軍省 2,084人、商工省 1,789人、海軍省 1,305人、樺太廳 1,063外務省 1,009人、人て其の他は 1,000人以下である、地方廳は北海道廳 2,475人、警視廳 1,081人て、府縣 9,886人、1府縣平均 215人に當る。

【現役陸海軍々人】 陸軍 昭和五年末に於ける陸軍現役准士官以上の人員總數は 17,321人にして、將官及相當官 220人、佐官及相當官 3,747人、尉官及相當官 9,823人、准士官 3,531人である。

海軍 昭和五年末に於ける海軍現役准士官以上の人員總數は 8,095人にして、將官 121人、佐官 2,037 人、尉官 2,809人、特務士官 1,370人、候補生 174人、准士官 1,584人である。尙海軍に於ては下士官 17,958人、兵 53,340人、生徒 542人が在る。

【鐵道職員及逓信職員】 昭和四年末國有鐵道職員は親任 1人、勅奏任及同待遇 938人、判任及同待遇 23,740人、雇員男 76,245人、女 4,401人、傭男 100,425人、女 4,672人、合計 210,472人で前年に比し 411人を減少した。

逓信職員は一等局 52,902、二等局 33,620、三等局 82,149 にして其雇員以下の數を見るに雇員に於ては通信事務 54,408人、電話交換手 24,613人其他 134 人にして傭人に於ては遞送人 5,059人、集配人 47,664人其他 8,295人である。

【警察官署】 昭和五年末に於ける警察官署數は、警察署 1,207、警察官派出所 4,847、巡查駐在所及立番所 14,324 である、警察署及派出所は一府縣平均 129、駐在所は一市町村平均 1.2 に當る。

【警察職員】 昭和五年末に於ける職員は警視 318人、警部 1,562人、警部補 3,319人、巡查 57,984人、合計 63,183人で前年に比し警視及警部を減少したが合計に於て 1,000人を増加した、警官 1人に付人口は 1,112人で前年に比し 3 人を増加した、昭和四年末植民地に於ける警察の狀態をみるに朝鮮は 警察署 250 派出所 2,663 を有し其職員總數 18,798 人あり、巡查 1 人に付人口は 1,106である、臺灣に於ては警察署 8派出所 1,510 を有し其職員總數 8,190 あり、巡查 1人に付人口は 594 樺太に於ては警察署 12、派出所 96あり、職員 427を有し巡查 1人に付人口 635 人で關東州は警察署 22 派出所 361あり職員 2,699人を有し巡查 1人に付人口 482人が屬し南洋廳に於ては警察署 6、派出所 3、立番所 16を有し、職員 107人あり巡查 1人に付人口 717 人が屬して居る。

【司法官署及職員】 昭和五年十月末に於ける裁判所數は 341にして前年に比し 1を増加した。而して判事 1,279、檢事 627書記長 8、司法官試補 233、書記 5,179、廷丁 1,502、雇員 5,024、總數 13,852 人が携はつて居る。裁判所は更に大審院 1、控訴院

7、地方裁判所 51、區裁判所 232に分たれて居る。

植民地に於ける裁判所は朝鮮に 231ある。

刑務所(内地)は 56 支所98 にしに警察留置場 1,238 がある、職員は典獄47人、典獄補30人、看守長 440人、通譯 4人、保健技師技手 102人、教誨師 137人、教師35人、作業技師及技手361人、看守 6,361人、女監取締 110人、雇傭 1,346人、總數 8,973人である。

朝鮮に於ては刑務所 16、支所 10、職員總數は 2,337 である。

【在外公館官吏】 昭和五年末に於ける在外公館の官吏は大使館公使館 274人、領事館 1,338人で前年に比し前者は 9人、後者は6人を減少した。

【宮内官吏】 昭和五年末に於ける宮内官吏(女官を除く)は勅任 69人、奏任 297人、判任 1,183人、合計 1,549人、他に雇傭3,098人あり、その俸給 4,467千圓で前年に比し官吏 53 人減少し、21千圓を減少した。

宮内官吏の部局別は帝室林野局 542 人、大臣官房 98人、式部職 94 人、内匠寮 92人、皇族附 87人、學習院 83人、李王職 75人、主馬寮 74人、女子學習院64人、諸陵寮52人、他は50人に満たない。

【公吏】 昭和四年末に於ける府縣名譽職參事會員は 480人吏員は 11,802人其の俸給 7,227千圓で前年に比し參事會員 2人減少し、吏員 488人を増加し、有給吏員の俸給 243千圓を減少した。

昭和四年末に於ける市名譽職及吏員は 40,554 人其の有給吏員俸給 30,250千圓で前年に比し 1,859人、166千圓を増加し、町村名譽職及吏員は 337,600人其の有給吏員俸給 31,866 千圓で前年に比し 340千圓を減じ 5,198人を増加した。

陸 軍

昭和五年中に於ける壯丁検査人員は 592,161 人で前年に比し 9,656 人を増加した、検査人員の最も多いのは東京の 26,095人で此他 15,000人以上の地方は北海道、福島、新潟、長野、静岡、愛知、大阪、兵庫、廣島、福岡、鹿児島、其の最も少いのは樺太の 686人、鳥取の 4,836人沖繩の 5,292人、宮崎の 6,682人等である。

壯丁の身長割合は 1米60以上 1米 62.5未満の 1割 7分 4 厘最も多く 1米 57.5以上 1米 60.0未満の 1割 7分 1厘、1米 55以上 1米 57.5 未満の 1割 4分 3厘之に亞ぎ、尙是より長尺のもの及短尺のものゝ割合順次相亞ぎ、1米 75.0以上は 4厘、1米 45.0 未満は 7厘である。尙以外に測尺不能者 3,344人あり前年に比して50人を増加した、而して平均身長は 1.598米である。

同年に於ける壯丁の教育程度は高等小學校卒業及之と同等者最も多くて 4割 9分 8厘を占め之に亞ぐは尋常小學校卒業及同上中途退學者 3割 8分、中學校卒業及之と同等者 9分 6厘、高等學校及專門學校卒業及之と同等者 1分 2厘、大學卒業及之と同等8毛、

不就學者にして讀方算術を爲し得る者、3 厘、讀方算術を知らざる者 5厘で前年に比べると高等教育を受けたる者の割合は少しく増加した。

【陸軍教育機關】 昭和五年末に於て、陸軍部内の教育機關は、陸軍大學校を始め 20種ある、其教員は 654 人、卒業者は 4,583 人で前年に比し教員數17人を減じたが卒業者 167人を増加した。

【憲兵隊】 昭和五年末に於ける憲兵隊人員は 3,053人で准士官以上 316人、下士官 1,038人、(他に技手 5人)兵卒 959人、傭人 606人(囑託 106人、雇員28人)で前年に比し67人減少してゐる、其の取扱犯罪人は 2,642人で前年に比し 132人を減少した、取扱犯罪人は軍人 670人、軍屬 30人、一般の者 1,942人である。

海 軍

昭和五年末に於ける軍艦は 74 隻、排水量 642,295噸、驅逐艦は 107隻、排水量115,295噸で前年に比し隻數は軍艦 2隻を増し、驅逐艦 1隻を増加し、排水量は軍艦 4,515噸驅逐艦 4,900噸を増加した。

【海軍募兵】 昭和五年度に於ける募兵數は 4,937人、内水兵の 2,647 人最も多く機關兵の 1,736 人之に亞ぎ主計兵 248人、船匠兵90人、看護兵 79人、軍樂兵 58人、航空兵79人に分たれ總數を前年に比すれば 258人の減少である。

昭和五年度の募兵人員を地方別に見ると山口の 267人最も多く之に亞ぐ福岡の 256人、熊本の 256人、鹿児島 248人にして他は凡て 100人内外の地方で其最も少いのは沖繩の 9人、樺太の13人等である。

【海軍教育機關】 昭和五年度末に於ける海軍の教育機關は海軍大學校、兵學校、機關、軍醫、經理、砲術、水雷、潜水、工機、通信の10校である。

其の教員は 1,101人、學生、生徒は、1,139人、練習科生は 2,970 人である。

【海軍刑務所】 昭和五年度に於ける海軍刑務所の狀況は未決年末殘留17人にして前年より 5人を減少し、入監 365人、出監 370 人で何れも前年より減少して居る。既に就ては年末殘留 156人にして前年より13人を減少して居る。

【海軍下士官及兵卒の費用】 昭和五年度末人員數 71,298人に對する費用總額は 29,353千圓にして 1人平均 412 圓に當り總額を費途別に分てば俸給に 5割 3分糧食に 3割 7分殘餘の 1割は被服費に當てられて居る。

恩 給

昭和五年末に於て政府より恩給を受くる人員は 236,843人、金額 107,936千圓、扶助料を受くる人員は 118,843人、金額 26,138 千圓で前年に比し恩給は 3,366人、扶助料 91人を増加した。恩給は文官 57,373 人 34,542 千圓、陸軍々人 112,665人、48,753 千圓、海軍々人 66,805人、24,641千圓となつて居る。

扶助料は文官 24,436 人、6,876 千圓、陸軍々人 79,233 人、15,656千圓、海軍々人 15,174人、3,605千圓である。

昭和五年中新に恩給を受領した者は文官 2,395人、1,839千圓、陸軍々人 2,081人、1,591千圓、海軍々人 4,238人、1,625千圓、教育職員 949人、815千圓、警察監獄職員319人、80千圓、待遇職員32人、16千圓である。新に扶助料を受領した者は文官 1,564人、490千圓、陸軍々人 3,778人、764千圓、海軍々人 1,267 人、272 千圓、教育職員 264人、108千圓、警察監獄職員 223人、22千圓、待遇職員 17人 6千圓、廢病院入院者 14人 1千圓である。

昭和五年中に於て恩給受領權の消滅した者は 6,647人、3,219 千圓、扶助料受領權の消滅した者は 7,036人、1,398千圓である。

昭和五年中に於ける一時金受給者は 5,573人、2,420 千圓にして前年に比し 32人を減じたが 20千圓を増加した。

爵 位

【有爵者】 昭和五年末に於ける有爵者は 949人で前年に比し 61 人を減じた。公爵 19 人、侯爵38人、伯爵 109人、子爵 377人、男爵 406人、で前年に比し公爵 1人、侯爵 3人、伯爵 3人、子爵 18人、男爵 33人を減じた。

【有位者】 昭和五年末に於ける有位者は 188,307人で前年に比し 8,756人を増加した、而して從一位 1人、正二位 28人、從二位 65人、正三位 313 人、從三位 658 人、正四位 1,480人、從四位 2,954人、正五位 6,651人、從五位 9,836人、正六位 11,813人、從六位 16,826 人 等 位 階 の 下 る に 從 順 次 増 加 して 正 八 位 の

58,507人最も多く從八位は 2,007人である。

勳 章

昭和五年末に於ける勳章佩用箇數は 1,240,93 3 其の人員數 1,155,937で前年に比し 14,018 箇を増加した、各等勳章佩用人員は大勳位 15人、勳一等 311人、勳二等は 1,073人、勳三等 6,329人、勳四等 9,088人、勳五等 14,360人、勳六等 37,075人、勳七等 170,128人、勳八等 917,553 人である。

昭和五年末に於ける旭日勳章年金受領者は 3,557人、其の金額 221,125圓で前年に比し 94人 9,490圓を減少し、同年末に於ける金鷄勳章年金受領者は 61,856人、其の金額 11,074千圓で、前年に比し 1,002人、193千圓を減少した。

昭和五年に於ける勳章褫奪人員は 517人で前年に比し 195人を増加し、内金鷄勳章褫奪人員は 3 人で前年に比し 2 人を減少した。

昭和五年中外國人新敘勳人員は 32人で前年に比し 18人を減少した。

昭和四年中外國勳章佩用允許人員は 117人で前年に比し44人を減少した。

【褒章】 昭和五年中に於ける褒章受領者は 216人で前年に比し 129人を減少した、褒章は紅綬 2、藍綬 1、紺綬 213人である。

褒狀、賞杯受領者及金員表彰者は昭和五年中賞勳局より 3,001 人、前年に比し 278人を増加し昭和四年中地方廳よりは 28,091 人で前年に比して 1,065人を減少した。

